

川柳塔



No. 806

同人ずいそう・本 と 私

七月号

もくせい10周年記念川柳大会

とき 7月18日(月) 午後1時半開場

午後2時半締切

ところ 豊中市立中央公民館1階集会場

(阪急宝塚線「曽根」駅から徒歩5分)

おはなし 黒川 紫香氏

兼題と選者(各題2句)

「リスト」 田中正坊選

「豊か」 安藤 寿美子選

「知る」 小出 智子選

「十」 橋 高薫風選

「窓」 岩井三窓選

「橋」 中尾 藻介選

◎席題なし(投句拝辞)

会費 1000円(記念品・発表誌呈)

賞 各題秀句2句(計12句)に呈賞

◎参加者に合同句集『もくせい』謹呈

主催 もくせい川柳会

後援 川柳塔社

『川柳塔』八〇〇号記念出版

句集 旅人 麻生 路郎
夫婦 福寿草 麻生 葭乃

句集「旅人」などから四〇〇句、同「福寿草」から三〇〇句を収録し、表記を現代仮名遣い・新字体に統一した新訂版としました。

編集・発行 川柳塔社
体裁 B6判・一八四ページ
定価 一、五〇〇円(送料実費)

★お申込みは、なるべくグループで冊数をおまとめの上、川柳塔社事務所へご連絡下さい。
2冊以上のご注文は送料不要、10冊以上の場合送料不要の上、1割引で頒布いたします。

川柳塔社

お母さん

西尾 栗

福井県丸岡町の町の中に平城の丸岡城がある。その入口の自然石の碑に、かの有名な「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」という日本一短い手紙の見本が刻まれている。徳川家康の家臣本多作左衛門重次が陣中から妻にあてて送った手紙で、「お仙」は大きくなって丸岡城の殿様（本多成重、幼名仙千代）になった。そういう短い手紙文の由緒ある町ということから、「一筆啓上賞」というのが企画されて平成五年六月一日から九月十五日の締切まで、日本一短い母への手紙が募集された。応募数三万二三六通であった。

その選考委員は作家の黒岩重吾氏、短歌の俵万智氏、川柳作家の時実新子氏、役者の中村梅之助氏、考古学者の森浩一氏の五人であった。なんにしても時実新

子さんが川柳というジャンルから、選考委員で活躍してくれたことは大変、嬉しいことであった。新子さん以外の四人はそれぞれ題を掲げて、一文をなしておられるが、新子さんののは「本音に打たれる」という題で要約すると次のとおりである。

私は五人の選考委員の中で、唯一、母の立場にありますので、自分がどんな手紙をもらったら嬉しいかなあと思ひ、できればありきたりの「母さんありがと」よりも、子からでなければもらえない痛罵を浴びたいと思うに至りました。本音が欲しかったわけです。私の希みはある程度、叶えられました。

親というものは、特に母は、そばにいるとつるさく、離れると恋しく、死なれて初めて自分にとっての絶対者になるのだということを思いしることができました。小中学生は、ああして欲しい、こうして欲しいの母への希求が強く、二十代は母の呪縛から離れようとし、三十代は子を持って知る親の恩的、四十代・五十代は母を子ども扱いにしている。そうし

た世代別の母との関わり方も興味深く感じました。心熱く豊かになる沢山のお手紙有難う。

一筆啓上賞（郵政大臣賞）

お母さん

雪の降る夜に私を生んで下さってありがと。もうすぐ雪ですわ。

× × × × × × × ×

「私、母親似でブス」娘が笑って言うの。

私同じ事泣いて言ったのに。

ごめんね お母さん。

× × × × × × × ×

お母さんのおならをした後の

「どうもあらへん」という言葉が。

私の今の支えです。

その他、秀作、特別賞、佳作等が二三〇作発表されている。日本一短い「母」への手紙、一筆啓上の一本は、限りなき母への思慕の悲願である。母という言葉を書いただけで、目頭が熱くなり、胸がつまる。母に一筆啓上出来る人は幸せである。もう私には母がいな。



座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

私の句

親のないのが孝行をせよと言う

(路郎)

菱田満秋

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 お母さん

人間陶治

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 富士野鞍馬

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十二丁)

水煙抄

秀句鑑賞

「本と私」——同人ずいそう

西尾 栗 …… (1)

橘高 薫風 …… (2)

西尾 栗選 …… (4)

東野 大八 …… (44)

黒川 紫香選 …… (46)

八木 千代 …… (48)

松本 ただし …… (71)

水煙抄 …… (72)

堀 良江・政岡日枝子・三宅保州・久保正剣・藤井一二三

木本朱夏・大橋政良・森田熊生・福浦勝晴・田中正坊

人間陶治

——厳しさのあつてこそ——

橘高 薫風

七月七日は路郎忌、しかも今年は三十回忌である。一月には「川柳塔」八百号を発行しその記念大会を開催した。また、この七月には三冊目の合同句集「川柳塔」を発刊するが、それらの企画に誠にふさわしい年まわりであると言える。

現在、路郎先生を存じ上げぬ同人誌友が大半を占める。路郎先生ご逝去のあと、川柳塔社の創立委員会として奔走した十数名のメンバーも、今では西尾栗主幹、大坂形水、金井文秋、小川恒明(その後、川柳塔から去る)の諸氏と私が残るだけになってしまった。

路郎先生は昭和四十年七月、喜寿金婚の祝賀を予定されていたが、半年ほどの短い間、坂道を転落する石のように悲劇的な命運に見舞われ、祝賀が葬送に急転したのである。しかしながら、その川柳に対する情熱と、作品への執念は死の間際まで熾烈であった。自らに厳しかった。先生の語録、「川柳は人間陶治の詩」というのは、この厳しさを措いては語ることの出来ないものと解している。

私は、去る五月五日、青森県蟹田町の「風のまち川柳広場94」の町を挙げてのイベント

大空のこころ (43)

銀河系

茴香の花

「葉」

一路集「配る」

「ページ」

初歩教室「満足」

各地柳壇（佳句地十選／岸野あやめ）

六月本社句会

■句集紹介 本間満津子「銀髪」

古川覚然坊さんを悼む

柳界展望

七月各地句会案内

■編集後記

橘高薫風 (77)

河内天笑選 (78)

八木千代選 (82)

茂見よ志子選 (84)

川竹松風選 (84)

河内月子選 (85)

吉岡美房 (86)

宮崎シマ子 (107)

神夏磯典子・松本ただし (106)

柳界展望 (108)

古川覚然坊さんを悼む (111)

柳界展望 (112)

七月各地句会案内 (112)

座右の句

父の名を呼び捨てにする迷子の子

(路郎)

私の句

島のごとはなれて住む子の家があり

近藤豊子

に参加し、「川柳・風・巡礼」と題する講演と選を受け持った。翌日、竜飛崎の川上三太郎の句碑とすさまじい風雨の中で三度目の対面をしたのである。

私は竜飛への道筋、三厩の源義経伝説のあたりから道を少し逸れて「みちのく松陰道」算用師峠への案内を乞うた。そこは、幕末に吉田松陰が海防論の根拠ともなる実地検証に、小泊から三厩へ山また山の峠越えをした史跡なのだ。松陰の見た空をこの目で見、松陰の踏みしめた道にわが足で立つた感慨は、たちまち三太郎や路郎への思いに繋がるのだった。

高杉晋作、伊藤博文、大山巖ら有数の志士を育てながら、この北の涯の地まで踏破する信念と行動力の凄さを思いつつ、実に美しい杉とヒバの林のしずもりを眺め、算用師川の清冽な流れに耳を澄ました。

松陰は後、国外渡航の企て成らず一八五九年三十にして江戸で斬、刑場の露と消える。身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも

留置まし大和魂

がその辞世。

竜飛崎の風雨にも身じろぎもしなかったであらう吉田松陰。私は瘠身、風に翻弄されて海へ落ちぬようにやつとで、早々に自動車へ逃げ込むのであった。

如何せん人間陶冶とはいかず

川柳塔

西尾 葉選

竹原市 小島 蘭 幸

メーデーの後に抽選会がある
一本の煙突がある僕等の街

湯上がりの水よ 十連休終る

カラオケボックス長女の恋の唄を聞く

自転車をつなぐ雲に見られている私

雲を見ている雲に見られている私

出雲市 岸 桂子

信用があつて渡れぬ橋もある

日記帳とぎれて一つの計に出合う

感心な話が盛つてある童話

残照の中に目標しかともつ

傘立てで蜘蛛が巣作りする日照り

名も告げず鳥が運んだ花の種

豊中市 田 中正 坊

目を洗ういのちをあらう本に逢う

古希すぎてもう変えられぬ旗の色

終の日はくる悟つても悩んでも

タラの芽を食べて三年生きのびる

二階からうわさの人が降りてくる
振仮名の本なつかしき露伴の忌

広島県 藤 解 静 風

歩いて一人は淋し花の道

樹へ祈り山へ祈つてきた歴史

生れては死ぬ約束をみな忘れ

葉ざくらになつて約束思い出す

神さまと約束がある竹の花

胸のすく啖呵帰つてから気づく

松江市 舟 木 与根一

青刈りがつづき列島軽くなる

休耕田へ来ると蛙も向きを変え

行列をして連休のめしを食う

形よい鼻で横向く癖がある

大学を出たから職が見当たらぬ

寝返つて大臣の近道へ出る

鳥取県 江 原 とみお

万緑においてけぼりをくつて居る

お隣の畑いつも背くらべ

綿あめの上にさくらが散っている
父親は由緒ただしいなまけもの
欲の風に後押しされているようだ
殿中では食えぬお茶漬くっている

大阪市

西出楓楽

妻のアルト ソプラノよりも恐ろしい
名刺出す人に一目置いておく
臓器提供しても要らんと言われそう
句読点の位置をたがえたまま夏に
本読んで賢くなれるくらいなら
わからんと言うこと知っただけ進歩

米子市

林瑞枝

客好きの布巾は乾く暇がない
額縁から覗くオランダ風物詩
夕顔咲くとちちの匂の籐の椅子
誰恋うて湖上を滑る夏帽子
こういうことになったと姪とその夫
ちちと言う看板やさし眸のハト派

今治市

野村京子

幸せごっこ続ける鍋を光らせる
古時計も夫も電池切れまして
見ぬふりが親切だとは他人さま
前向きに生きろ生きろとカスミ草
じゃがいもが奥目で人を信じない
二足の草鞋はいて答がまだ出ない

藤井寺市 吉岡美房
政変で組替えバズルしています
憲法は一つ意見は四分五裂

咲き切って牡丹にあつた羞恥心
絢爛と咲いても孤独 白牡丹

藤棚があつて噂が途切れない
れんげ田へ身を投げたが河になる

下関市

石川侃流洞

お豆腐の膽もこの頃軟弱で
杖ついて老会長はまだ辞めぬ
残業のシナリオ下手な焼鳥屋
出稼ぎの酒は故郷の唄で酌み
返り討ちの子感出直すことに決め

倉敷市

小野克枝

車椅子の高さで語る友が居る
勿体ない青空ながめ無職なり
オルゴール淋しいときも同じ音
残業のうそを笑顔で迎えられ
許されぬ恋にルールがしがみつく

松原市

小池しげお

一合に酔う日それでも酔わない日
桃の花三年ぐらい直ぐにたち
肥後守 尋常高等小学校
怒ること知らないひとと向い合い
食欲がないのに箸を割ってくれ

今治市 矢野佳雲

来世もという今生の添い心地

この絵買おうと絵葉書を買って去に

文通が重なり嘘にくたびれる

スーパのさめぬとこに居ながら寄りつかぬ

賞罰のない一生に色がない

鳥取県 新家完司

寂しいはずだここに穴があいている

赤ちゃんの靴も靴屋で売っている

かしこさをチラリと見せる馬鹿な人

捨てられた仔猫の声を聞き流す

図書館の隅で脈拍ととのえる

鳥根県 堀江正朗

半世紀の闇 川柳と歩みつ

馴れている闇の道にも負け嫌

人生の風 白杖と背伸びして

戦盲の悩み忘れて五月晴れ

耳ほっと妻の戻った嬉しさに

鳥根県 堀江芳子

戦盲のせつかち馴れていて慌て

母の日の母の手作り嬉しがり

嬉しくて正朗さんは吃ってる

明日への喜び夕陽くる窓と

最高という酔い心地もう寝息

鳥取県 土橋 螢

中途半端な人生の繰返し

旧姓に戻れと旗を振っている

旅二日 仏の花が気にかかる

遅咲きの女を泣かす恋もある

苦労したことは言わないお父さん

西宮市 奥田 みつ子

花びらが散り敷き寺は荒れている

悩みごと生きる証と言われている

遠い人もきつと眺めている銀河

大声で叫んでみたい事ばかり

バックミラー昨日の恥がついてくる

熊本市 永田 俊子

母のブライド梅干がめを守りぬく

たんぼの絮のゆくえの離婚劇

くずし字がきらいで嘘が言えぬ父

楢山へきれいな言葉移される

いつ写しても仮面はつけぬ富士の山

鳥根県 小砂 白汀

恋人の香りしきりにフリージア

水墨画色のないとこに色がある

兎も角も八十五年は耐えている

降るもよし瑞穂の国の雨なれば

寄せ集めあちら立てればこちら立たぬ

松原市 玉置 重人

言うことはなし本日の血圧値

机整頓されて発想がしほみ

父の日のシャツ面映ゆい柄を着る

ストレスを消す羊羹を厚く切る

辞書ルーペ机のニスが剥けている

奈良市 宮口 笛生

気の早い五月の蚊にかまれてる

晩酌追加えんどう豆の玉子とじ

グループで来ている女の大ジョッキ

米不足やはり誰かの作りごと

近いからいつでも行ける行けずいる

高槻市 川島 諷云児

定年の錨を下ろす海がない

ワンテンポ遅い拍手はみんな義理

人間の心理で覗く節の穴

正直に生きて後塵ばかり吸う

妻の愚痴うつらうつらと眩まくら

羽曳野市 榎本 吐来

もう明日はないよと花に教えられ

泣くことを知らぬ女の男運

お隣の新築ものの憂い音に聞く

焼酎に転向もして血糖値

笑顔の妻を見たいセリフを考える

柳井市 弘津 柳慶

本音を吐いて四方からからまれる

やけくそにどうしてもなれと投げすてる

お悔みに言葉にならず涙ぐみ

かあさんに負けたよ荷物持たされる

肝心な事はとばして返事をし

米子市 林 荒介

前を行く影に案内してもらう

屋根瓦 瑣細なことに驚かぬ

テッセンの花から道を間違える

白地図に迷い続けている軍手

仕合わせな人を見ているガラス窓

豊中市 安藤 寿美子

どうしても身体が二つ要りそうな

クシャミして今日は国際家族デー

預金高かなり減ってる春の暮れ

背が伸びて孫は視野から遠ざかる

私では亡母の結城が着こなせぬ

松山市 白石 春嶺

ためらいもなく職人の庭鉢

庭師もう昼めしにする腹時計

せつがちが餌をやり過ぎた金魚の死

酒ぐせも掌握 人事課のマル秘

心配の種が地球に多すぎる

東大阪市 森 下 愛 論

奈良市 天 正 千 梢

罪一つ黒い絵皿に盛り付ける
極楽へ道連れとなるクモの糸
うたた寝へ五月の風よ蠅の音
風鈴の下で飲んでる冷奴
残り火へ注ぐ命の美酒一献

堺市 楊 井 二 南

迷惑な話 骨身に沁みて来る
場所柄をわきまえている裾模様
外聞が悪いとけなす手前味噌
潮時と思うリハビリ手抜きする
モノクロが悲喜交々を巡らせる

堺市 高 橋 千 万 子

木の芽あえ軽い約束して別れ
夕ざくら私はここで絵になろう
遊園地ボタンの白が暮れ残る
事おこりしみじみ思う育て甲斐
十人十彩 老いに無色の日がつづく

八尾市 宮 西 弥 生

朝咲きの花に見せない花鋏
亡母の生命もうすぐ越える姉妹
胃も腸も保証のカルテ五月晴
浅漬の歯ざわりもよし主婦三日
黒い靴はくと仕事に行きたがる

夫恋えば泣けとばかりに散る桜
「さよなら」を言った日から隙間風
春愁やいや増しにけり桜散る
桜咲いたに父ちゃん帰らない
泣いたらあかん泣いたらあかと泣いている

島根県 西 村 早 苗

花が散る明日はきつと実をつける
冬物を着ていて姑の腰傷み
父母が無口となって雨期が来る
もう一寸言いたい顔の別れ際
来るはずの電話 西陽の独り部屋

松江市 柳 楽 鶴 丸

イエス・ノーはつきり言わぬ卑怯者
舞妓さんの帯の長さにびっくりし
髪も髭もファッションの一部です
新緑の嵯峨野めぐりを人妻と
一匹狼アア人生に悔いはなし

名古屋市 越 村 枯 梢

あれも夢これも皆ゆめ朝ぼらけ
妻に聞く今日は何日何曜日
野良犬よお前も齢をとったよな
自画像に一つ忘れた泣き黒子
八十の海へ漕ぎだす櫓もうつろ

砂川市 大橋 政良

奈良県 田中 紀美代

また一つミスをして来た手を洗う

目の中は今しか見えぬ不幸せ

ネクタイをはずしブライドははずされず

道草が楽しい午後の回り道

すらすらと嘘が出てくる下り坂

笠岡市 松本 忠三

お待ちどうこれで急いでくれたのか

まちがえた靴甲乙がつけがたい

頼まれもせぬのに采配振りたがり

会長をやる気 老人クラブです

定退へ村の雑用待っている

伊丹市 榎谷 寿馬

人生を裏口で待つ狂言師

カラスにも詩心あり鳥の雲

怒り笑い 妥協そして夫婦

灰皿に振じ伏せられた恋の数

宿題くらいで孫をそんなに責めないで

廿日市 林野 甦光

沸点のない人生を持ち歩き

花時計の前で待つてる仕掛人

気配りが少し気になる歯を磨く

はた山の見える所で飯にする

お気軽にどうぞと金貸し屋

ポイントは母の矢印どおりゆく

今日こそは夫を寝かせてドラマ見る

何しても偶然ではない日がつづく

あと味を思えば我慢など軽い

花道を往くが如くに家を出る

尼崎市 春城 武庫坊

ライバルがいるから背筋のばして

兜折る祖母の手付きをそのままに

燕の巣 人のなさけを心得る

安楽椅子に座る資格はまだ遠い

まだ燃えるものに草笛強く吹く

尼崎市 春城 年代

黒揚げ羽 舞い舞う 死者は新仏

うぐいすもかじかの声も嘘っぱち

死ぬることざらりと話す夕べ

街角の様変わりして逢えぬまま

同病相あわれみ電話長くなる

青森県 田中 叶

白人と僕だけ初夏のエレベーター

トンネルをぬけると見えた鯉のぼり

チューリップ罪の意識がまるでない

雲一つ浮かぶ不倫をしています

のどあめを会社の子にもらい

弘前市 蒔苗果林

土も花咲きます春肥ほどこされ
友たくさん増えたと褒める桜の樹
薯ばあさん薯芽吹いたと髪染める
知らぬ間にしたたか爺に指折られ
自分だけわかる欲びまた一つ

弘前市 小寺花峯

続編を繰り返す糸のからみ過ぎ
雨が降る土曜のこだわり捨てきれぬ
出て行つた妻でドラマの幕が降り
染み付いた涙で枕取り替える
熱燗でするめをかじる嘘を噛む

弘前市 岡本花匠

金魚玉へ映る影武者頼りない
水中花うつ吐くごとく自己主張
菊さし芽確かな出会い期待する
郭公の声に津軽もみどり風
出直しの青墨光る梅雨が明け

弘前市 村田善保

雑音の中で明日への鈴が鳴る
予想だにせぬ栄光に風薫る
発展の途上に置いてある踏み絵
影法師だけが私を見捨てない
終章に努力の汗を溶く絵皿

弘前市 佐治千加子

壁叩く闇は広がるばかりなり
ラベンダーの丘むらさきに人を恋う
返事ひとつ保留のままの夕茜
揚羽蝶 あなたのあとを追うように
またひとつ新鮮な嘘 春ですぬ

弘前市 一戸ツネ

七転び八起きしみじみ噛んだ米の粒
神さまの悪戯過ぎるおんな坂
尊厳死 足の裏から忍び寄る
法輪の恵み嬉しく米を研ぐ
陽だまりに補聴器なしで猫という

弘前市 中山雅城

碁仇を諦めている立て箒
甘さ辛さを選び分ける薬指
おおいと呼んだらお茶が出てくる居間
年表を探してゆけば火縄銃
風のない日の鯉幟になっている

弘前市 浅田隆樹

町内の総会兼ねてどぶそうじ
妻叱る隣家につこりあいさつす
ひとり酒ロダンのようなかつこして
三面鏡 亡父が横に映ってる
春を待つ 待つほど年も積み重ね

弘前市 高瀬霜石

妻も子も隠し砦を持っている

善人も悪人も這う蜘蛛の糸

世渡りが下手で船酔いばかりする

濡れ落葉族にはならぬ 髭を剃る

終電車 女神も貧乏神も乗る

十和田市 阿部進

憧れた都で夢を碎かれる

靴ちびた割に伸びない棒グラフ

手抜きされ強く育った次男坊

改革をさけぶ男が村八分

見ない振りしながら見てる親の背

十和田市 小笠原敏人

駆けつけて一瞬たじろぐ死の母に

寝息ない母の額がまだ熱い

働いて働き過ぎて明日は雨

庭いっぱいつつじ遺して母は逝く

水仙をまた植えかえる亡母の影

五所川原市 斉藤 岳

ふきのとう前に住んでた方のもの

水鳥の二羽はぐれたものでない

ここよりは父母の墓道りんご道

俺にだけ雨が降ってる訳でなし

春どきどき職場検診異常なし

五所川原市 對馬 一 閃

城築く男のロマン語り継ぐ

カルメラがふくらみ姉と仲直り

生きてゆく鬼にも蛇にもなっている

火の慕情とどかぬ愛を握りしめ

人間に戻ると欲が顔を出す

黒石市 相馬 一 花

瘦せるほど鳴いてウグイス春を呼ぶ

ベランダで花に謝り吸うタバコ

カラオケで拍手しないと村八分

ガン告知されたと知らぬシガレット

根回しの前にお酒を少し掛け

米子市 石垣 花 子

山も野もみどりの旗を振りだした

旗日の足に息切れをした自動ドア

バーゲンの旗へ妥協はせぬ財布

妻の振る反旗を甘く見すぎてた

むしろ旗の裏に隠した米はある

米子市 田中 亜 弥

花あふれて少し酸欠きみになる

反省をすれば鏡も良い顔に

わたしの愛をあげれば乾き止まるだろ

磔百まだまだ刑はつづきそう

とり逃がした笑顔が箱の中にいた

米子市 野坂 なみ

残したいノートに母の心おく
千枚のコピーはすぐに致します
青い鳥 終の日までも仲間よね
菜の花の海で黄蝶になっている
知らぬふりするのも姑の愛だろう

米子市 政岡 日枝子

影を秘かに測っておいた気づくまい
穴掘ると等身大になっていく
へその緒についてる糸が噛み切れぬ
ふる里という接点が消えていく
新人のあいだはとてよく笑う

米子市 寺沢 みど里

どの花と語ろう春の陽は浅い
藤も散り庭も無口になってきた
こころだけは衰えみせぬ百合の白
泰山木の蕾かぞえて春惜しむ
花言葉つめたノートに陽に翳す

米子市 青戸 田鶴

瓦屋根連なる街で温かい
厚い眼鏡の奥のやさしさ信じよう
明日までにボール投げかえしておこう
古希をいまのり越えようと足きたえ
生態系 鳥の地図さえ変えてゆく

米子市 澤田 千春

故里の森で空気を入れかえる
忘れてた方言恋し人恋し
あれからは人をさけてるかたつむり
浄土まで仲よく行こう土踏まず
さあ今日も笑顔をさげて町へ出る

米子市 金山 夕子

爽やかに立夏薫風帆を上げる
いい話自慢に変わり眠くなる
大工さんのお茶へ仲間にしてもらう
うちの鬼ソフトクリーム大好きで
花屋ではいつも自分を見失う

米子市 川上 より子

楠若芽 敬語三つ四つ童が使う
子を生んだ証に届くカーネーション
朧夜の腕にかすかな子の匂
子育てに終りがなくて遺言状
ひとり足りない膳の宴 母七忌

米子市 新 正子

隣より低いが多い鯉のぼり
選挙してごらんと蟻は言いました
バックして女の歴史やわらげる
人の字が古くなつてくふる里だ
おばちゃんの小言ではやってるめし屋

米子市 中井 ゆき

ひっそりと神話を語る雲の彩
出たがりの鬼をなだめる箱探す
割箸を捨てると心痛みだす
迷い子に桜の花がついてゆく
素直には書けそうもない私小説

米子市 光井 玲子

シーズンの鵜には同情してしまう
手品師の虜となった白い鳩
ふる里の袋小路にある情け
かけめぐる夢 少年の樹が育つ
乾杯のグラスの底にある謀反

和歌山市 牛尾 緑良

重い荷をみんなで持っている安堵
病院のベッド信じる他は無し
噂ばなしの中で一日暮れてゆく
主人公になった私にうろたえる
追いつ風の中で反旗も揺れている

和歌山市 堀 端三男

急ぐほど自販機 札を受け付けず
あれ以来酒の出る席遠慮する
盃の底に鬱憤溜めておく
内緒ごと好きな女に油断せぬ
裏表に肩書き書いてある名刺

和歌山市 福本 英子

若葉きらきら明日の子報へ雨蛙
カーテンを替えよと庭の若葉風
百本のバラより嬉しカーネーション
糠床を作って旅を思案する
安全週間もののしくも鼠とり

和歌山市 木本 朱夏

弱みそで恋のニアミス繰り返す
合鍵を返し唇がさむい
花びらのような下着が咬す
五月雨のような女の一会かな
ヒト科ニンゲン尻尾の痕が疼きだす

和歌山市 宮口 克子

計画も立てぬジャンプへ乱気流
人情の減った路地から犬の声
人は皆ないものねだりばかりして
晩酌が減ってはじめて気遣われ
むなしさはあなたの森を抜けてから

有田市 松井 かなめ

地続きを売ってくれるか金貯めよ
勉強も野球もいやな目の出ぬ子
不倫とは問われるまでもおぼろ月
個性的と言って世間が見放した
脳退化か油断の昨日悔いる朝

和歌山市 桜井千秀

ジーンズのゴム体型を変えてくる

美女故の免罪符には縁がない

銘入りの茶碗は接いで食器棚

サーカスの曲芸鞭の音がする

身内切ること始まる肅正化

和歌山市 福井桂香

さくら散る立ち去るものの美しさ

ゆく春へ命かぎりにシクラメン

花咲いて散って子供のない夫婦

背比べしても所詮は水芭蕉

おもかげの芍薬に似る母の微笑

和歌山市 細川稚代

葉桜に今年も会えた根来坂

もしかして愛の告白かも知れず

メロン切る姑はひとりで住みしよな

折り合いがついてうれしいらし寿司

とつときの顔して豌豆剥いている

海南市 三宅保州

大木を伐るチェンソーも泣いている

唇をいきなり奪う荒療治

風船を持つと放してみたくなる

遠回りしても公園抜けて行く

どうしよう医者も迷っている手術

和歌山市 山田高夫

カーネーション騙されやすい母である

立ち話そこが噂の震源地

良心に恥じること無し陽の真下

どの道を選ぶにしても狭い門

父の背に貼り付いていた正誤表

和歌山市 田中輝子

春夏秋冬 塔が見詰めている景色

叱る役叱られ役のいてこの世

友達の粹をこえないカタツムリ

欠勤の勇気をくれた雨の音

時々ほわわってわたしの灰汁を抜く

和歌山県 西口忠雄

くじはくじ八卦は八卦で人は人

仰向けになれば女は意識する

一点差トラファンまた吠えている

ハネムーン母さんなんで気にするの

農民作家出番来ましたコメの乱

大和高田市 岸本豊平次

花冷えに値下りしていたカイロ買い

週間予報ストープはまだ仕舞えない

お隣の大型ゴミをもらって来

人柄が敷居の低いお付合い

浮きたかろう豆腐がパックで重ねられ

西宮市 西口 いわゑ

しあわせな悩みを聞いているコーヒー

お互いに旗をおろしてお茶にする

紅椿すこし震えて落ちました

イヤリング淡い殺意を抱いている

約束を守り通して壁になる

西宮市 門谷 たず子

容赦ない月日に靴の紐を締め

額あじさい遠くで亡母の声がする

前向き志向 母のタクトが勇ましい

夫婦茶碗の模様もすこし薄くなり

どちらが先に死んでも迷うことばかり

姫路市 人見 翠 記

緑市 待望の馬酔木手に入れる

霧島躑躅やその名もあでやか火の国と

水やりにこたえてくれた芝桜

片栗の花が咲いたと便り来る

給料日孫に夕食招かれる

高石市 浅野 房子

無為無策 今日一日が暮れて行く

気が付けば味方は誰も居なかった

そのくらいの金ならあるという程度

結局はどの子も同じ他人の子
目の上の瘤が私という事実

大阪市 大塚 節子

台所 和鉄で切る鰻の皮

もう日傘がいりますなあと彼岸入り

本葛とことわり書きのある饅頭

蜜豆にとって代らんナタデココ

道連れとはぐれてゆきたい道もある

寝屋川市 岸野 あやめ

飽食の果ては粟粥 稗の粥

おばはんも信号無視をする世なり

陰悪な空気スリと逃げる猫

女には人を見る目が無いと言う

梅雨寒しアドレス一つ消したベン

宝塚市 丸山 よし津

陽時計で動く農夫のスケジュール

鍵穴の奥は見えない方が良い

鼻歌に妻の機嫌は良い模様

取り巻きに囲まれ明日が見えにくい

急ぐのに自販機札をのみ込まぬ

八尾市 宮崎 シマ子

つつじしやくなげ誘いの電話ばかりなり

四国なまりのうどんや四国の人が寄る

結局は子の言いなりに母の日も

蟻にもまた我にも家がある果報
懲りもせず空の旅には夢満たす

八尾市 高杉千歩
五線譜にのせる科白を溜めてまつ

もう六十まだ六十の花咲かせ
冥府にも会いたい人の輪がふえる
指輪など交わさぬままに共白髪
白昼夢 消えない虹と石の街

八尾市 山下美津留

発火点上げライバルと競いあう

人生の登りで酒の毒に遭う

円高の土砂降り浴びた父の服

一本の鉄路やさしい里に着く

道路地図昔の道はずたずたに

八尾市 吉村一風

お隣の庭には花が順に咲く

夕焼けが好きで夫をすぐに呼ぶ

七十の火種を妻に診てもらう

嫁の持つ里の味には文句ない

娘二人で家の電話は話し中

大阪府 榎山隆

惚れぐすり飲んでるかによく惚れる

五月病おんば日傘の社会人

一駅をずらして歩く若葉みち

円滑な愛にタブーの呪文かけ

かなづちも河童も混じる海開き

香川県 木村あきら
和を作る嘘なら一つついてみる

一言が過ぎて陸にも波が立つ
草深い田舎にあった人情味
浮き沈み荒波越えてきた傘寿
松並木 今に戦を語り継ぐ

香川県 成重放任

力説をすれど応えぬ新人類

わが党を守り国民そっちのけ

練りすぎて治まるところ元の鞘

淋しさを耐えて添い寝の縫いグルミ

あーほうでケンカ売られた阿波言葉

香川県 川崎ひかり

その先の話は後日談とする

沈黙に弱い私ののだぼとけ

一つ覚え三つ忘れて黄昏る

その時のために縫代残しとく

出る杭は打たねば私の負けになる

香川県 工藤吟笑

ヌードルの味に明治もついてゆく

つまずきが多くて老いを自覚する

何が無くとも心ばかりは錦なり

ウス味に慣れて気兼ねのない二人

見定め付かぬ日和で舟が出ず

座布団が並び席順気にかかる

香川県

新川 マサエ

蟻の巢へ砂糖をまいてゆく怖さ

百までも生きるつもりで溜めてます

満開の桜の下で咲くスミレ

春本番小さな種に夢をかけ

香川県

池内 かおり

簡単にノーとは言えぬのが未練

叱られても逃げててもやはり母の膝

子に残す要所ようしよに返し縫い

口だけは達者と車椅子の女

落込んだ私に届くさくらメール

竹原市

森井 菁居

初孫誕生 誰か取材に来ないかな

外孫でよし感動の日記帳

正論と言う切り札を持っている

覗き窓いつの日からの不信任

星がまたたいて勝利を確信す

竹原市

時 広 一 路

横降りの雨が苦手な歩道橋

どちらでもいいから拍手しておこう

何故僕に中性脂肪しがみつく

帆を上げてみよう少しは進むかも

生き抜いた皺を恥ずかしがらないで

人の死で我が命計る寿命表

竹原市

岡本 清水

不慮の死も病死もみんな寿命なり

怖くても半身不随 世の定め

梅実るみかんの花や栗の花

金の功罪 敵になったり神になったり

竹原市

岩本 笑子

もしここで狂えば丸く事が済み

美しい怒りとなって新能

風の罪少うし揺れて花時計

夜の雨 春の足跡消すように

許しては咲き悩んでは咲き

バラよ

石原 淑子

退院を知らず見舞うた不覚の日

嘘まぜて繕うた穴 でかくなり

こだわりを捨ててまた抱く姫だるま

巣立つ子に心も金もせわしない

朝露にぬれてひととき草花に

呉市

楨田 英詩

目立ちたい男 木登り繰り返す

少年に戻れば母の詩が書ける

しんどいね僕の短足親譲り

無念だな彼女の横が空いてない

チャルメラの笛を合図に腹が減り

出雲市 尼 れいじ

内角をグサリと突いてくる話
煩惱がまだ渦巻いてる終電車
渦一つ消さねば座る場所がない
新芽出て役目を終えた葉が落ちる
三差路で何時も迷つてばかりいる

出雲市 板垣草丘

雀と起きると見出しなら読める
竹串で鯖は地物でございます
豌豆は下から序列 莢と花
定刻のただいま隣から届く
密航船 余程の事情乗せて着く

出雲市 久谷 まこと

どの道も真直ぐ行ける道はない
逃げ道はまだ見付からぬ王手飛車
出後れた悔いの失せない日のあせり
結論は近所がすでに出している
婦唱夫随 時には違ふ答出す

出雲市 竹治 ちかし

父が居た頃には見えなかった父
灰皿も酒も出ぬからすぐ帰り
補欠より二軍のエースにある自信
鳥の羽根色々かえてくる募金
平均の寿命を越えてから元氣

出雲市 園山 多賀子

フルムーン愛のかけらを継ぎ合わす
七夕の産み月予定男の子らし
六時間寝て不眠症気にしない
場違いのジョークに誰も笑わない
麻酔剤と聞いて腰痛身構える

出雲市 吉岡 きみえ

大樹の下へ身を寄す悪い癖
揺れうごく心に月も欠けてゆく
珍しく桃マツチが売れている
だんだんとマツチ擦ること下手になる
嫁さんがなくて今年の花も散る

島根県 松本文子

朧月 誰とも話したくはない
自問自答で噴水は知らん顔
初孫と亡夫の噂をしてくれる
弟から内緒で貰うお小遣い
イベントが多くて右往左往する

出雲市 島 祥庵

人を指す指の汚れに気がつかず
親自在 道路 径の旅路かな
ぼんやりと言ったセリフが光り出し
スパイスが欲しい いつもの家庭劇
訓練の出来を鯨が嗤ってる

島根県 佐々木 鳳 笙

父は艾 母は葦でいてほしい

老いという波ひたひたとじわじわと

いつの世も天狗は高い枝が好き

突撃も匍匐も知らぬ麦畑

若者の溜まりへ誘う口笛か

出雲市 伊藤 寿 美

は何をして来たのかと立ち止まる

オカリナの調べ黄河のラプソディー

キャリアウーマン増えて燃えつき症候群

孝夫に似た友だち連れてくる夫

お助けマン出る頃眠る添い寝の孫

出雲市 石 倉 芙佐子

一針に母の想いの花木綿

逢う度に月は私を遠ざける

おんたと女 二人の私が競い合う

彼の人と流れてゆこう笹の舟

落ちのびてばんじましてもすんなりと

唐津市 田 口 虹 汀

渋滞もコースの中よ家族旅

メーデーの列に座すよな閑はなし

七人の敵より怖い子供の目

風雪に耐えて傘寿の床柱

藤も見た車のラッシュ傍で見た

唐津市 久 保 正 剣

お薬を心にくれる医者が好き

延々と八百長続くアダム・イブ

流れ星叶うと困ること願う

ギブアンドギブでテークのないデート

ジャンケンはするなと蟹の親が言う

唐津市 仁 部 四 郎

血液型程度の私の運なのか

半日は哲学者なりお留守番

留守居して時間の色が分かりかけ

名水のツアー社長も壘を下げ

大臣のジョーク物価へはね返り

唐津市 山 口 高 明

へソクリが消えております額の裏

狸小路駆けて終電間に合わず

チンドン屋 犬も一匹従いてゆき

丹精の菊が気になる一夜旅

おちそうでおちぬお方に困り果て

唐津市 筒 井 朴 竜

二度童子 食事再三ご催促

三葉の松は庚申塚に植え

五倫の書 紐解く極意二刀流

六地藏 百万遍に耳を貸す

九重山の木霊と響け木挽き唄

唐津市 浜本義美

老いの足汽車のドアに間に合わず

酒好きに飲めぬ日がくる癌末期

右向きに右に向けない主義主張

汐風を背なにサザエの店並び

ドンタクの渦と流れてひと足

唐津市 浜本ちよ

大げさなゼスチャーばかり話下手

世話好きでうるさがられてお人好し

同情が得たくて愚痴のホラ並べ

凶星指されビクともしない知能犯

掟あるも無法の通る浮世なり

岡山市 川端柳子

雑草でよし全身に陽を浴びて

結婚はいや赤ちゃんだけほしい

アッハッハ齡と言う厄介もの忘れ

世の中は金だ心だお祭りだ

女ざかり過ぎてばあちゃんざかりかな

岡山市 小林妻子

ご馳走さん言うてブレンド米だった

鬼の脈見ながらブラン練っている

大人の恋もいろいろあって来る来ない

大波も静かによけて聞き上手

花の名を忘れ仏間へ引き返す

岡山市 矢内寿恵子

左傾した日から歯車くるわせる

飽食も飢餓も地球の裏表

諦めた枯木芽吹いてほつとする

事勿れ主義にも風は容赦せず

得手に帆をあげると既に風挽歌

岡山市 二宗吟平

連休を娘や孫が来て待っていた

二十一世紀任せと曾孫のVサイン

旅便り知らぬ世界の風をくれ

見てあげた句が全没となっている

目をこすり見てもちがわぬ目鼻だち

岡山市 荻野鮫虎狼

惨敗の胸石ころの音がする

毛の生えた脛は毛布の外に寝る

ローカルの吊皮退屈そうに揺れ

甘言へ二度善人は乗ってくれ

愛される駐在さんが左遷され

岡山市 花田たけ志

斜めから声援送るほどの義理

気に入らぬ声援聞こえない素振り

もしもしと浮つく声でいい話

失速で絶叫したくない余生

好意からもう足し算すぐに減り

岡山県 山本玉恵

虚と実の演技に迷っている鏡
生きざまに上手も下手もない命
もう親も亡くて今宵は爪を切る
遺伝子がまたも私をしゃべらせる
もう拾うすべなし転び出た言葉

倉敷市 田辺灸六

したたかに生きて知らない金の使途
日日好日 続いて欲しい西の旅
舗装道ばかりで枯れてくる素足
転移する癌へ逆療法 of 酒
報われぬ愛にもくじけてはならぬ

岸和田市 福浦勝晴

糟糠の妻のみぞ知る泣き所
八十の気を吐く八十の青年
父親の咳に咳まで似る息子
さくら散るはらはらと散るゼニも散る
淪落の淵でごくごく水を飲み

岸和田市 芳地狸村

白砂が波に見えます枯れた庭（仁和寺）
酒樽が見事になるお茶の部屋
信頼が裏目になった保証印
磨かれた年季が光る志野茶碗
夢のある手合わせ待っているファン

岸和田市 島崎富志子

ばんやりとツバメの子育てで見る幸
もうお年 辞典が今日も忙しい
意地があり根性があり一本気
井の中の蛙で天狗になりたがる
卓球の一汗若さ呼びもどす

岸和田市 高須賀金太

日本に住むなら日本語をしゃべれ
気まぐれな雨は無職に冷たいね
前向きに生きやとツバメ宙がえり
年金が出たぞ一本増やそうか
テレビのお守りも結構疲れます

岸和田市 古野ひで

油断した一球で散る投手
子の事になると母の直感素晴らしい
月並の老母でも大事な宝です
彩緹せた人形大事に飾る理由
種を蒔く少うし打算も入れて蒔く

岸和田市 原さよ子

一行に書かれた孫の夢信じ
都合よく忘れ上手に生きている
極楽へ行ける気になる寺参り
ひょうきんな童話の鬼は人気者
金持の顔で真珠を選っている

岸和田市 岩佐ダン吉

寝屋川市 柴田英壬子

バイト先やはり燃えつきそうになる

喝采を浴びたあの日からの不安

弱いなあ一本つけてやると言う

誰ひとり信じてくれぬ中の母

外で会う猫に他人の顔をされ

大阪市 藤田頂留子

歴史をたずね人とふれあうウォーキング

地下鉄ラリー今年も完走できました

完走証もらって急に出る疲れ

各停の余生どこまで行けるやら

心眼の歩幅たしかな白い杖

大阪市 河井庸佑

なまじつか小細工をして墓穴掘る

何げなく言ったひと連絡まれる

聞く耳を持てば拓けていく活路

災いの元は背伸びに高望み

生半可知って手を出し火傷する

大阪市 本間満津子

創作の美と天然の贅花開く（吐田公二氏貴石画展）

余韻ほのぼの異人館のティールーム

ボロクソの批評に闘志わいてくる

反論に耳傾ける好敵手

毒舌の中に煌く一家言

松ぼくり明るい暗示してくれる

薄味のまだ薄味へ逆らわず

年齢やネーと近頃すこし言いすぎる

左脳も一度試すスタートだ

星屑を浴び忍耐のつづく日々

大阪市 北勝美

便利さも使いこなせぬ老いの指

如来様 悟って璽珞つけてない

外米を買って減反補償金

五人男見栄を切るのは七五調

レトロ趣味 河内木綿へ綿の種

大阪市 稲本凡子

こんにちわだけの近所に住み慣れる

猫一匹に今日の予定を奪われる

絵具皿多彩になった春の庭

幸せを絵にしたような潮干狩

待つことの大事さ春に教えられ

大阪市 榊本落児

無人駅降りたは僕ら二人だけ

負けておく敵が美しすぎるから

大島が身につきだしたかの子の忌

浪人がつづき酒だけ強くなる

定年後 時々時計止まります

大阪市 渡部さと美

淋しさは老母のことばが丸くまるく
外米も恋も冷めてから分かる
良いことは尾鰭をつけて泳がそう
高見の見物きめてますがな鬼やんま
他人の目氣にして一つ傘に入り

鳥取県 松下たつみ

ハイと言う返事に心風いでくる
初一念 苦い実を食う覚悟する
人誉める事を忘れた盲判
自尊心 近所に少し拗ねてみる
責任が大きな声にさせている

鳥取県 林露杖

春旱十日続いた今日の慈雨
鏡より写真にみえる真の老い
年金の引算だけで済むくらし
悔しさも少し前立腺肥大
輪廻転生 次は女であるもよし

鳥取市 小谷美ツ千

連休の一日 郵便夫と話す
鰐広の帽子よ恋の狩人よ
百舌が啼く貴男はいつも忙しい
花も女もゆらりゆらりと過ぎてゆく
臆病になってしまった花の下

鳥取市 西原艶子

人ひとりばかり気になる花の下
街路樹の芽吹きいちめん初夏にする
湧き出した思いへ文も長くなる
子を思うつばめの愛に負けている
水平線眺めて不協和音消す

鳥取市 岩原喬水

夫婦道卒業出来ずまだ悩む
子を育てボロボロになる母の城
一本道 挨拶せずに逃げられぬ
ふたたびの入院 不安増すばかり
親という名で心労種尽きぬ

鳥取県 鈴木公弘

一灯をめざして走る日がつづく
壮年のわずかに残る歯を磨く
雀から屋根裏ばなし聴いている
真夜中の電話に妻が噛みついた
給料を吸い込む穴の深いこと

鳥取市 春木圭一郎

理想論 本当の姿見つめない
たくさんの方達という幸という
雑草も自分の花へ誇り持つ
はかなさと強さ雑草から学ぶ
喜寿すぎた母の饒舌とまらない

寝屋川市 江 口 度

うず潮を見ているグリコ犯時効

種のない葡萄食べてる子沢山

磨崖仏 無欲の花が咲いている

喚問の手ぬるさ笑う かすみ草

恵まれた人だと思ふストのピラ

京都市 都 倉 求 芽

永田町 一国治めれば済む政治

バクテリアだね分離結合する政党

漕ぎ方によっては沈まぬ泥の舟

春爛漫 都心の廃校虚無満ちる

バラの刺そんなになくさん要りますか

美禰市 安平次 弘 道

中立を敵と見た日の猜疑心

眠くなる法話 仏に会うてくる

信号は黄色 行く人止る人

遣伝子は正直 悪いとこが似て

卦は女難 妻に内緒が一つ増え

大阪市 津 守 柳 伸

せめてもの贅ブレンド米は買わぬ主義

運鈍根 英気養うハイキング

昼食がいつち楽しいハイキング

来客と馴染むペットのおもてなし

自然体崩す夜更けのインターホン

寝屋川市 稲 葉 冬 葉

花筏むかしを忍ぶ愛ひとつ

仲人も驚くほどに化けて来た

銭湯の鏡に罪はないのです

お味見に寄ってきたのが花エブロン

訳あって少しシブチンしてみよう

高知県 赤 川 菊 野

訳あってひとりで生きて居りますの

お迎えを待つてゐるなんて嘘っぱち

女です一度は母と呼ばれたい

手の届く位置より目標高い目に

一喜一憂パチンコ玉にあなどられ

高知県 北 川 竹 萌

ふるさとに茶摘み茶づくりする一日

新緑の郷里 八十路に夢がある

身に合やす酒もビールも八分目に

引揚げの日の舞鶴の記念館

八十に見る浦島神社ご宝物

仙台市 川 村 映 輝

過ぎたるは及ばざりけり親切も

妻にさえ注意することのむずかしき

一言も発せず今日も日が暮れる

老人とペットが留守番GW

こどもの日 子供を車にパチンコ屋

西条市 片上 明水

風に色着いて茶店の茶が旨い
ステッキを振り回すほど五月晴

駐車場 家よりみんないい車

店員の名札覚えるいい行儀

値切ったら奥の主人と入れ替り

奈良市 米田 恭昌

会社人間 今更趣味と言われても

父母に無沙汰を詫びてする写経

口癖はひと味咲かすと言う男

父さんを凌ぐ息子の女癖

フルムーン無口無趣味の老い二人

鳥取県 土橋 はるお

お巡りさんが油断していたから抜ける

パチンコで稼ぎ祭の準備かい

準備するまでの話が長すぎる

梅干しを食べて百歳まで生きる

噂では冷夏三年続くとか

豊中市 吉田 あずき

バラの咲く間は夢を見ていよう

またしても胸底で鳴る母の鈴

うどん屋の湯気に哲学などいらぬ

あんパンの餡に陰謀などは無い

木の芽和えこの相性の確かさよ

今治市 越智 一水

小走りは女と分かる音を立て

おふくろが赤子になって笑わせる

骨だけになっても乳房は太い母

介護疲れああ世を恨み世を恨み

安らかに眠った顔をほめてくれ (母94歳で死去)

広島県 田村 新造

逃げていく嘗ては野砲曳いた道 (興安嶺逃亡記)

昼は寝て夜は北斗を見て逃げる

興安嶺 灯を避け部落遠回り

炎熱百度 木蔭で憩う昼の夢

逃げる逃げる望郷の念断ちがたし

姫路市 大原 葉香

改定というけど値下げなどはない

いらっしやいませ目は次の客へ向け

運命に背き行く道ひとり道

千羽鶴 腹にはみんな善を詰め

風車回ればきれいな空がある

横浜市 菱田 満秋

淡色の女がふえて春が来る

失業を認定されに早く起き

総入歯はずして言いたい事を言い

一日が無事であの世に近づきぬ

香水が振りかえらせて見たヒップ

堺市 黒田真砂

染めようか染めよまいかと三面鏡

しゃべりつつ同窓会の通り抜け

昔なつかしラムネを飲んで通り抜け

髪形を変えて明日へ飛ぶ心算

世間体悪いと嫁かぬ娘をさとし

宇部市 平田実男

ゴルフ焼けですと農夫のジョーク好き

いい人と言われ仮面が外せない

孫達が来ると喜ぶ炊飯器

元士族 昔話がとても好き

エリートコースに乗ったと思う自己過信

島根県 榊原秀子

行楽日 人の流れをみるテレビ

微風のうたを若葉ときいている

矢も楯もなくかたくりの花恋し

結局は私のためにする奉仕

イエローカードそんなことさえ知らなんだ

島根県 藤原鈴江

花活けて心豊かな刻をもち

うとうとと眠りの中に見るドラマ

命日の墓参へみどりの風もらう

野も山も緑わたしもまたみどり

老春の色は緑かむらさきか

奈良県 長谷川春蘭

春愁で調子狂うた月曜日

老いの春男子厨房に入りもして

胸線の隆起ゆたかに薄暑来る

瓦礫より出て蒲公英の不退転

風車 水子地蔵の群に鳴る

尼崎市 田中薫

川向うの道に未練な花が咲く

逢うて別れて靴何足を履き潰す

自動ドア開く 多くの矛盾を乗せて

森の五月に迷い続けて コインは裏

某月某日死後の景色の罌粟ひらく

枚方市 海老池洋

仕事なら文句 ゴルフの炎天下

教え魔のうずうずしてる趣味仲間

ええ夢をおおきに捨てる宝くじ

夜店ではねだり家では捨ててある

知らぬ間に頭の数に入れられる

富田林市 池森子

屋根になるかたちに父も友達も

花びらが散ると月日が軽くなる

深々と勝利の旗を振る樞

丁寧な包みにものを言わせてる

窓際の風は移ろい易きまま

藤井寺市 中島志洋

恐妻の声で嚇かす九官鳥

痴話げんかその後気になる鳩時計

その後が恐い上司の誉め言葉

反対の母は黙って席を抜け

男だけ解る話で弾む酒

川西市 松本ただし

米の値を知らずに生きる幸不幸

中流の自負で結び目ゆるくなり

居酒屋で鰯ぐらいの政治論

丹念に新聞を読む閑つぶし

人生は運にまかせた鬼ごっこ

富田林市 片岡智恵子

足りぬ一言 過ぎたひとこと揉めるもと

共通の話題とだえた肩の凝り

ハイテク医療やつぱり人が人を診る

ころ入れ替えしつかり野次の目をすえる

打ちつけられたボールは高く弾むなり

静岡県 蘭田 模 杏

山の幸とつさり摘んで登山帽

人は騒ぎ花は静かに散ってゆく

工事場の塀に楽しい絵が躍る

待合室 同病互いに問診す

駅弁が民話の里を語りだす

宝塚市 中田純次

脳細胞 毎日十万散ってゆく

いさぎよく席を譲って無位無冠

目に仏 耳に教えを聴くが趣味

レンタルを使いこなしてナウい人

引きぎわは綺麗だったといわれたい

茨木市 堀 良江

かげろうと共に育つたれんげそう

リラの香をお分けしましう風そよく

男は度胸そんなお人は減りました

髪切って期待の美女になりそこね

もったいないほど美しいお嫁さん

西宮市 秋元てる

金星だ農継ぐ孫に嫁が来る

四月馬鹿 孫と相討ちまた楽し

花吹雪浴びたあの日の弘前城

カルシウム不足 夢でも走れない

折りたたみ椅子これからの己が位置

静岡市 安本晃授

肩書を捨てると聞ける風の私語

単身赴任 心やすらぐ他人船

リストラの行方見守る不況風

夏の序曲 老いを眠らすメロドラマ

投げ返すチャンスまだある思慕の毳

姫路市 中塚遊峰

ガラス越し庭土浴びる雀二羽
病院へ友に花よとペダル踏む
仲の良い親子にもある車間距離
運勢を逆手に取って生きのびる
雑草の強さ求めて河原土手

寝屋川市 平松 かすみ

お日様が好きで追いたい花の首
箱庭へ黄色い声で呼び出され
知恵熱と言いたいけれど髭が生え
献血車下りるとどうぞ缶ジュース
鬼よりも上手に彫れた福の面

高知県 小澤 幸泉

平成のメガネをかけて見る平和
古時計 父が修理したままに動き
五月空うらめしうに街が見る
一人酒コップの中が見えすぎる
スタートライン遅い早いも同じ事

富士宮市 渥美 弧秀

晩年は富士に守られ詩と生き
富士薊 訪う友もなく独り酒
七色の庭の囁き初夏躍る
冷奴でちよつと一ぱい本音聞く
明けて行くベッドに重き日記帖

京都市 山海友熙

駅弁が其の時その日の顔になり
貴女だけと気軽に誘う通信センター
親切も過ぎて間尺合わぬまま
あら美味し夫婦の味が味噌に慣れ
言葉表情麗しく腹別人の友

吹田市 山本 希久子

五月雨もピアノも弾む夏近し
残された時間を歩くかたつむり
行く道と思えど険し母を看る
辛抱もここまで花びら風に散る
女の悩み聞いて下さるだけでよい

大阪市 板東 倫子

女医さんの忙し過ぎる春のウツ
嘘ついてみたらすんなり信じられ
死んだ方がましとばあちゃんまた脅す
老いてなお猜疑心のみ衰えず
年金がついて老妻巻き返す

羽曳野市 吉川 寿美

長男のしみじみ温い傘のうち
病夫には悪いと思う面二つ
無言電話あなたも愛に飢えてるか
ことのほか重い今年の夏ぶとん
二人三脚ばつばつ紐がゆるみがち

富田林市 松本 今日子

真夜中の間違い電話に起される
陸橋で犬と犬とがすれちがう

我が家から灰皿消えた四月馬鹿

しぶ皮のむけた女の舌三寸

ラッシュアワー正面にある喉仏

松山市 谷 真風

気休めも時によつてはありがたい

火の用心に水だけ上げて拌んどく

優雅ではないが甘藷天ぷらが好き

ちよつと聞いてみたくなつたと言うのだが

みちおしえ お地藏さまの在す道

伊丹市 山崎 君子

バラ園におさげの少女絵のように

再会をいまかいまかと花時計

甘酒の麴も上々夏祭り

待ち呆けショーウィンドーはニューファッション

雨が降る今日のお客は雨女

羽曳野市 田中 透太

雨降つて地固まらず旅に出る

喜怒哀楽 月日重ねて来た絆

順番が狂うと困るお父さん

老眼鏡少し文句を言い過ぎる

両足で歩いてるのに蹴躓く

堺市 中野 櫛子

新緑へ花に優ると語りかけ

あやめ咲く今朝方の雨紫か

一病息災お守り札も承知です

姉妹旅行 気ままとあくび遠慮せず

留守電話相槌なくて不整脈

姫路市 丁坪 サワ子

老残のいつかは果つ身を爽やかに

ゴールデンウィーク バブルはじけてからは死語

引き際を煙に巻いてお殿様

ワンテンポいつも遅れる祖母の四季

この次は勉強しますと葬式屋

北九州市 梅田 宣司

空いている上座に若さためらわず

実年の雑誌を読んで血がたぎり

熱燗で治ると俺の医者嫌い

指の出た軍手に寡婦の意地を見る

よく稼ぐ女房そろそろ他人めく

和泉市 岡井 やすお

ご政道どこまで続くぬかるみぞ

洗脳はとももう無理です閣下

花見すみ手持無沙汰の新社員

ニュートンに勝てずハイテク航空機

兄弟が寄るは仏事と言う齡

吹田市 栗谷春子

風向きの変わるつめたき腑におちぬ

大原野あたりの夢もみる頃に

無念なりあと幾とせと思うとき

有馬みち歩けばあるく五人連れ

耳鳴りがはげしい今日の花ぐもり

堺市 柿花紀美女

此の街に嫁して金婚五十年

時事吟を詠み世相の憂さはらす

一つだけ厳しさ持つて凡夫婦

いつからか家計簿つけぬ主婦となり

ピアガーデン女の陣の大ジョッキ

和泉市 西岡洛醉

日日好日 妻の達者に双手上げ

春霞 凡夫の城を今日も暮れ

雑学の文机 埃積み上げて

凡人の素顔 税務署の門くぐり

ごみの日を男が知って居る世帯

生駒市 北山悟郎

信頼感 無口こんなにもてている

血の彩に女少しも慌てない

ダルマの眼 両眼入れたらさらに欲

粗大ごみよく喋りよく食べる

青春の孫 二十四時間短すぎ

町田市 竹内紫鍔

近代化 客がボタンを押して降り

行進曲すたれ男女が空路ゆく

手刀は凱歌に代わる三拍子

母の日のムードで爺も席を得る

結核も長寿も冴えて文学館

東大阪市 崎山美子

古都暮色 私も詩人になっている

わがまなベットのリズムにのせられる

グループの中で私が浮いている

それなりの楽しみもあり裏長屋

窓ごしにむかいの歓声きいている

川西市 氏林洋敏

一日の始まり眼鏡掛けてから

水虫と妻より長いお付き合い

仏事するたびに仏が遠ざかる

息子には同居宣言するつもり

参観日わが子の欠伸見てしまひ

東京都 山口新子

通勤路変えて六月風に乗る

柏餅よりケーキが売れる子供の日

今一人茶碗の触れる音きいろ

叩くには惜しい夢のふとん干す

子宮ガン検診となりはばっちゃまだ

松山市 宮尾 みのり

イヌフグリ少し休めと咲いている

ゆつたりと母の形見の縞を着る

嫁となる人の笑顔がいと嬉しい

うれしさは気づいてほしい薬指

働く手 昔はえくぼなどもつき

豊中市 井上 直次

見送りの母一人だけ背をみせ

シナリオにまだ生きてろと書いてある

趣味の釣り嵩じて小さい店を出す

指タコがいつしか消えた二度の職

比べても仕方ないけど親譲り

大阪市 寺井 東雲

人前であの娘くさすと怪しまれ

学生の頃と一緒に窓際に

青い目の女将がおって満席で

遺言書見せると家内ほっとした

犬小屋を覗くとチビも恐れてる

八尾市 片上 英一

嵐山しだれ桜と湯どうふと

春愁や君とわたった渡月橋

山荘の抹茶にしのぶ伝次郎

竹の小径ゆけば山荘待つ左膳

漬物を土産に小さい京の旅

河内長野市 井上 喜醉

話だけ合うのが不思議ケチ同士

生活のピンチに強い冷奴

隠しても背中で匂うサロンパス

一杯の酒で人情ぐつと来る

藤井寺市 福元 みのる

美辞麗句だけが式場支配する

もう明日にしたらと妻は寝てしまい

ボルノ見る子どもにマンガ読む大人

アクセルを踏んであしたへ身構える

河内長野市 植村 喜代

出費までどんどん増える陽気かな

山潰す噂へ驚よく鳴く日

運転手下りても走る縄電車

意地張って見ても齢は取るばかり

池田市 岡本 吉太郎

パーキンソン寝返りさえもままならず

正直すぎ一本道にて老いわけし

吊皮で名作片手によみふける

箕面市 椎江 清芳

喪の列で真珠値踏みのネックレス

いざと言う時だけおればよい夫

焼飯の皿とスプーンが日本産

この家の人脈語る檣数

堺市 一瀬 福一

労りを添えて夫婦はなめらかに
鉄骨の寺でテープの経が鳴る
望んでも農は継ぐまい鯉のぼり
吉報の祝辞 刺客かも知れぬ

茨木市 藤井 正雄

すぐ飽きた子の趣味継いだ熱帯魚
カステラと紅茶が良いと言う書齋
祖母元氣 庭の歳時記花百科
弁解は油断と言うが実力差

吹田市 茂見 よ志子

五十回忌 若き兵士の兄二人
度忘れも自然の理とか落ち椿
テリトリ―夫婦にもある一つ屋根
花みずき白とピンクの並木行く

守口市 結城 君子

飯盒のめしのうまさよ五月晴
連休のテレビ渋滞面白い
ディズニ―ランドの空缶いまだ捨てられず
おみやげの和蠟燭です仏さま

守口市 森川 まさお

やっと来た島は時間のない暮し
遊覧船いきなり外国語が聞こえ
船室のつめたい畳に寝てしまい
耐えるだけ耐えた岬の松をほめ

豊中市 滝北 博史

むかしむかしみみずは鳴くと教えられ
ごろごろと鳴っているけど蚊帳がない
鉛筆を削れるひとがお友だち
飼犬のリズム狂わす主婦の下痢

豊中市 三宅 つえ子

擦り傷に怯えは見せぬ夏帽子
紫木蓮の蕾数えてこれも欲
さりげなく口紅を拭き貝になる
想い出を洗い流した水の音

大阪市 町田 達子

遺伝子の話こわごわ聞いている
情報過多へ知り過ぎたのね何もかも
遺品となる写真 南の国のビーチ
山峡の湯にしっかりと抱くいのち

大阪市 松尾 柳右子

立ち話ベットの手術聞かされる
青空がまだまだ励ます人生譜
素寒貧だから偉そに口叩く
大空に心遊ばせ今詩人

吹田市 井上 照子

カーテンを開けると笑顔陽が光る
翔ぶ気力体力つける薬買う
よくもまあ涼しい顔した二枚舌
高貴薬 胸の傷手は効目ない

寝屋川市 堀江光子

一本のわが家の花に花見客
日向ぼこ浮世話の裏おもて
宝石のきらめく指で涙拭く
明日ひらく花に数えること教え

和歌山市 玉井豊太

同じ土に育って違う伸び具合
暴走族うちに単車は見当たらぬ
赤い色 車もシャツも男の子
雨漏りが梅雨に入ってから分かり

和歌山市 青枝鉄治

銘柄の分からぬままに飲むワイン
紙吹雪 覇者の孤独を知って舞う
いい知らせ久しく母のおけさ節
利き酒へ賞をもらった下戸の舌

和歌山市 玉置当代

のぼせたり冷えたり今日も更年期
つくづくと女性がおんなでない変化
噂飛ぶうちは華だと諦める
土煙上げて廃屋 歴史閉じ

和歌山市 池永正雄

散る花を待ってましたと鯉のぼり
敵方に座れば孫のホームラン
掃除機を立てても帰る客が居る
谷底をそおと覗く親心

和歌山市 岩本美智子

アンブレラ大正ロマン遠くなり
藤の下で藤の泪に濡れて佇つ
流行が好きで病も骨粗鬆
痩せてきた骨を愛しむ影法師

和歌山市 北山好笑

好きな人の横で逃がたい座りたい
耳打ちの噂の人が来て黙り
飾り言葉 美しいほど錆びやすい
孫に見せただ笑われた地獄絵図

和歌山県 小倉アサ

十薬もはこべも萌えて病んでいる
再生紙 次の約束喋りだす
切り取り線を甘く見ていただけの指
ラストまで脇に徹するかすみ草

和歌山市 田中みね

お茶っ葉が切れたと言える両隣
ねんごろに車洗うも最初だけ
高速でトイレの我慢強いられる
建前は嫌い好かんの甘い仲

和歌山市 堀畑靖子

手を加え夢を育む青写真
アルコール気付け薬に飲む男
仮面つけ間ちがえ笑う者になる
もう宝探しに飽きて米を研ぐ

米子市 白根ふみ
老母が語ると一番まるい輪になつて

放浪記行きつくところ春とする

減塩に妻が努めた命なり

鉛筆がゆっくりちびる春宵に

米子市 茂理高代

鬼ならば鬼のやさしさ教えよう

悩むなどよして牡丹の島にゆく

母の日に仲良くしてと贈られる

恥ばかり蒔いた種から花が咲く

岡山市 嘉数兆代賀

木から落ちた猿が一言物申す

母である忍の一字をにぎりしめ

自画像のうしろはいつも冬の景

信用一途に生きて来ました座りだこ

岡山市 井上柳五郎

妻にさえ相談せずに頼る友

得意絶頂 他人のいたみなど忘れ

ゆるむ気を素顔みじんも見せぬボス

小心と緻密を違え貶される

岡山市 岩道博友

不器用な男が野次馬だけをする

妻の脚また無理をした僕の留守

三日坊主 子供が大好きもう忘れ

天気予報見てから明日の自由聞く

どんぐりの山に鍬形甲虫

牡丹咲き我が家の庭も格を上げ

木の性は夏は厚着で冬裸

毎日がゲートボールの出来る幸

倉敷市 井上富子

インターを出て肩書のない道路

しなやかな指で男の骨を抜く

ビタミンのようなあなたと手を繋ぐ

空しくて衝動買いをした帽子

岡山市 江口有一朗

けちで貯めた金で楽しい夢を買う

何となく嘘が零れてくる話

受話器から若さを貰う友を持つ

用心をせねば命は自分持ち

貝塚市 行天千代

肝臓の検査事なく安堵する

一日に何回探す拡大鏡

おみやげのコアラは他所へもらわれて

腹立ちをじつとこらえる高血圧

岸和田市 田中文時

僕よりも妻怒ってる社の人事

長生きはしたし嫌われたくはなし

増やしてはならぬ体重 酒の量

後悔の種時かぬ下戸羨まし

岸和田市 寺田甚一

香川県 山地 マツエ

合縁奇縁たで食う虫と言うけれど
そんな柄でありませんが嬉しそう
新大臣の研修などは如何です
ドアホーンで顔を合わせぬ疎外感

(前月分) 七尾市 松高秀峰

ゆうバックふる里の味四季の味
ゴメンネの一言欲しい夫婦仲
満開の桜に散るを教えられ
苦しみを分かってくれた亡母もなく

七尾市 松高秀峰

何しても許してくれた亡母の夢
本心をそっと漏らした縄のれん
野辺送り明日は我が身か掌を合わす
筈の匂う窓口ゆうバック

羽咋市 三宅ろ亭

鉄則はひとの美学に立ち入らぬ
人はみな吾より上を行くよう
雑草の愚直に負ける百姓で
郵便のこぬ日ここに穴があく

富山市 酒井輝

混浴が少女を女らしくする
我が家にもなくなりそうな俺の椅子
補聴器が無くても解る時代劇
かけ声でふたり一緒に立つ笑い

達筆な便りどうやら無心らし
逃げ道の一つを敵に教えとく
孫叱りながら機嫌もとっている
七回忌 亡夫の表札掛けたまま

西宮市 瀬尾六郎太

サイタサイタひとときわ郷愁
沈下ゼロ気が遠くなる半世紀 (新聞西空港)
親父より飼いならされて六代目 (植木職)
好々爺 恋人まがい孫娘

宝塚市 吉田笑女

たっぷりと花に水やる旅がえり
夏場所のテレビへ母はかじりつき
戦死した弟も五十回忌 亡母も二十五年
星を見る気持もなくてひとりの夜

芦屋市 黒田能子

競争心このごろ萎えてきた兎
化粧映えせぬがともかく化粧する
別れ際振った右手が下ろせない
妻の愚痴聞いているような振りをする

鳥取県 羽津川公乃

千両の笑顔に仮面はがされる
嘘ついた口をもしよく漱ぐ
物忘れまでも夫の所為にする
口下手に今日の味付け辛すぎる

鳥取県 さえき や え

藤寺のふじとはなして言うことなし
仏さまの残してくれた友である

宴の果てにハタめいわくなことを言う
まだ夫がそばに居るから気が強い

鳥取県 山根 八重

菜の花が恋しくなったおぼろ月
気に入った花を見つめている無心

あの時は酒に涙を沈めていた
得をする事を覚えてよく喋る

鳥取県 津村 八重子

新築の槌音 景気よくはずむ

母さんの声は明るいから好きよ
暑さにも草にも負けず農に生き

民謡に遠い故郷が浮いてくる

鳥取県 幸家 單車

めきめきと地球が病んで行く怖さ
傘借りた恩はあつても恋仇

プロセスはどうあれ勝利信じよう
良く出来た嫁だ私にウマ合わす

鳥取県 谷口 次男

弱虫で真ん中ばかり座る癖
ほかほかの弁当母が作るもの

このごろはタバコを吸うと罪人だ
このごろは山の奥にもファクシミリ

鳥取県 上田 俊路

佗助の白に母の忌めぐり来る

血のもろさ法律の名で晒される

あの笑顔イエスカノーか迷わせる
啓蟄の虫も私も米探す

鳥取県 乾 隆風

手の内を知りつくしてる夫婦劇

挨拶をするに女房前になる

短足ヘサラブレッドの血を探す

お土産は秘書がどつさり提げて戻る

鳥取市 美田 旋風

抱きぐせがついたヒヨコは歩けない

一安心若さを武器に娘が嫁ぐ

突風がときに茶の間で渦を巻く

誰よりもひやひやさせる妻の愚痴

鳥取県 田村 きみ子

夏だ夏だと太陽が背を叩く

笑っても泣いても齢は隠せない

初夏ですね風そよそよといいい気分

仏水供え般若の面を取る

鳥取県 乾 喜与志

惚けそうなので針仕事やってみる

杖持たずボツボツ歩く自己主張

早口の言葉は異国のようだ

杜甫 李白 吟じて喉が若く居る

鳥取市 西村 黙 光

女房の電話 補聴器すぐはずす
掃除機がポリューム上げる口喧嘩
夕方になるとそわそわして困る
おでん屋へ来ると借金思い出す

鳥取県 石 尾 かつ乃

種を蒔く時季が来たねと長話
飲む組と寝る組 旅の夜のドラマ
再生紙ですがと名刺 掌に温い
すやすやと眠る笑顔の輪の中に

鳥取県 黒 田 くに子

おじさんが笑うとこわい遊園地
はんなりと露天風呂から浪花節
酸欠の街で男が欠伸する
長男と言う名に重い屋根瓦

鳥取県 石 谷 美恵子

木の芽どき私もじつとしておれぬ
羊水の中でノックをする命
風選ってばかり男の不精髭
手に負えぬ子だがいい芽をもっている

倉吉市 野 中 御 前

野いちごを食べて真つ赤な鬼の口
公園のベンチに一息置いてくる
安心のかたちで守る生たまご
初夏ですぬ女の城も塗り変える

倉吉市 淡 路 ゆり子

カーネーション母に贈って娘に貰う
安心の切符が欲しいカメラ吞む
素直になればかばちやも甘く煮えてくる
時雨のようにあなたの嘘を聞き流す

倉吉市 最 上 和 枝

葬式で隣のポチが落ちつかぬ
紙人形のつぶやきを聞く昼さがり
齢捨てて飛んで思い出作ろうか
日だまりで銭勘定をしてる猫

倉吉市 米 田 幸 子

腹黒い奴だカメラは見逃さぬ
七光 親の残した近道だ
正道に渡るとこの世住みにくい
迷わずに妻が手を打つ方に向く

倉吉市 野 口 節 子

よく回る舌がグループかきまぜる
天気屋の嫁がきりきり舞いさせる
ふところの匂信じて児は眠る
雑草の位置で序列を奪い合う

出雲市 板 垣 夢 酔

鬼だつて食わせりや芸をするだろう
ガンという虫に乳房を盗まれる
酔うたふりしてみる好きな人の脈
振り上げた皿をおろさすのも男

出雲市 小白金 房子

島に初夏招く牡丹の花見真産
きんぎんの顔はスターと言う誇り
善人がすわるとやさしい風になる
祭りずし素朴な老母の味貰う

出雲市 小玉 満江

ハイカラなおばあちゃんが居た整骨院
舌下錠秘めて出かける旅衣
良くしゃべる雀に一目置いて
花の島一回りして缶ジュース

出雲市 富田 蘭水

日々みがくジャンプ信じている蛙
心まで柔らかくする大牡丹
ああ国旗立てると胸がすつとする
花の種子まけど雑草ばかり生え

交野市 福崎 しげお

ラベンダー咲く頃おいでと娘の便り
肩書を外せば無類のお人好し
青春の汗は聖戦信じてた
六十路坂エンジンブレーキかけながら

豊中市 江口 明光

胃の隅に約束手形の日が迫る
ドル安で旅行プランに欲が出る
子の悪さうんざりするが頼母しい
つぶやいているのは母の捨てぜりふ

箕面市 岩津 ようじ

退屈はさせぬ日替り政治劇
効きすぎた仕掛けを悔いる仕掛け人
最新式治療受けてる煎じ薬
取つときの靴も履かせる余命表

吹田市 瀬戸 まさよ

快適さお金で買える不幸せ
パーティーの好きな米寿の口達者
歯と眼にはお金をかけて若返る
飛行機に乗らず長生きするつもり

堺市 近藤 豊子

紀の国の車道にころぶ夏みかん
湾岸道路虹のかたち海の上
トラックのかげに海ありドライブイン
バックミラー新空港の映る道

大阪市 川端 一步

地下鉄の一番 毎度のおばあちゃん
春人事大卒がきてお見送り
古書市で下のしたから農民史
三色もまわれば一色風車

大阪府 八十田 洞庵

追悼文慈善に徹した人だった
盛り場の朝 猫だけが起きている
幕あいの次のセットへ槌の音
踏み込んだ迷路で逢うた釈迦如来

大阪市 清水絹子

コール三回そろそろ風呂を沸かさねば

発車ベルあとの半歩に見切られる

定退もまず朝刊に自社の株

耳鼻眼科完治ためにバチンコ屋

東大阪市 安永 暁子

離箱に挨拶をしてむすぶ紐

こんにはごきげんさんと早い足

早春賦 歌うシルバーみな乙女

船旅にお達者連の青春だ

東大阪市 指宿 千枝子

八十を越せば人間エリートぞ

添い寝する母は優しい風になり

かあさんのひとり歩きも趣味のうち

カタクリの人見知りするように咲き

大和郡山市 坊 農 柳 弘

流れ星 視野一瞬の願い事

人並みの暮し中流自己満足

あなたしか目に入らない恋夢中

笹酒に酔うて金魚にとらめっこ

岸和田市 三 輪 通 彦

相談に乗って同類視をされる

実印を押したら威張る借用書

爽やかな挨拶交わす散歩道

崖っ淵で男の真価験される

大阪市 清水 利 武

病氣もし怪我もしました百歳寿

一目見ただけで火花が散る男女

中華そば心を入れた味が生き

鳥取県 西 浦 小 鹿

風のなか恋を重ねた髪になる

小説の終わりのように結婚する

嘘ひとつ許さね恋をしています

鳥取市 前 田 一 枝

蛙の子 親を跳びこす手をおぼえ

テストした後で出て来る良い答え

いたずらに押したチャイムに人が出る

大阪市 小 糸 昭 子

華やかな輪に囲まれてなお孤独

脇役に徹し灰皿座ってる

坂道を押してくれてた風小僧

★第22回かもし川柳同夢・

「輪」大賞(第13回五十嵐さ

か江賞)に本社同人の高瀬霜

石氏の次の句が受賞した。

メビウスの輪の中を行く戦

士たち

★高槻市文化連盟(上原逸代

表)は6月2日から7日まで

高槻駅前の松坂屋5階で恒例

の川柳作品展を開催、西尾菜

磯野いさむ、橘高薫風氏らの

色紙を展覧、好評を得た。

自選集

工藤甲吉

生活者重視が値上げばかりした
幸せは思うとおりに生きている
茫洋としているこれも老愁か
心臓をどきどきさせて老いの恋
春眠暁を覚えて齢八十

久家代仕男

露草がとっても好きな糸トンボ
手抜きせぬ人でストレス蓄めている
長病みで今浦島となるわたし
種芋の残り天井にからみつ
悲しみの泪キラリと真珠めく

恒松町紅

父祖からの形崩れた核家族
ワープロに老化は見せぬ古希の指
タイ米もよし老骨の空っ腹
少しずつ天寿の亡父に似て老いる
やりだすと止まらぬ性へ日脚伸ぶ

遠山可住

父の絵の中で二番に着けている
ホールインワンもあるさ蟻地獄もあるさ
切札もなし温まる席がない
札束を数える指をたしなめる
好きな娘はないかと遠い子を案じ

月原宵明

浪人の味方に水平線がある
瀬戸の霧島の暮しをひた隠す
陽炎にトラックの荷が崩れそう
返事まつ剃刀宙におく床屋
一坪の空地ポイ捨て見逃さず

藤井明朗

春の風に押されて蝶のランデヴュー
呼び返すこだま日曜家族づれ
美化活動かくれたとこにごみがある
花からみどりへ四季巡るさくら土手
政局は混迷 政治改革ほど遠し

八木千代

波多野五楽庵

風が攫った椿の首と殿の首

次の殿はいつでも用意されている

目覚めれば行方不明の殿の櫛

累代の墓 無頼にはなれぬ殿

わたしの殿がわたしに飽かぬ 有難や

藤村 女

夢を抱く八十路の窓に四季の花

猿真似の芸で八十路生きている

妥協することも大事と言う八十路

曇る日も照る日もあって八十路無事

我が余生 追憶ばかり雨が降る

植村客遊子

吊皮へ今日の疲れがぶら下がり

三十の娘の秘めごと雨期長し

町内の毛虫にある日助けられ

子ら誘い誘われて行く宵祭り

男手で洗うハンカチ染みがあり

有働芳仙

喜怒哀楽 信用できぬ顔があり

罪になる笑いを貰う気づかない

笑ってる方が裏では負けていた

美しい嘘の笑いを覚え出し

宝くじあははははと破り棄て

小西雄々

新人の編むシナリオへ気があせる

豊作を大黒様と待ちわびる

交際費増やし接点模索する

子の描いた人形の絵が呼吸する

残念の声が柩から漏れる

水粉千翁

遠足で蹴とばすように晴れました

お月さん聞いておくれと恋をする

ひたすらにうずくまるとき恋でした

すねている茶漬けの音が言いました

ここで待つうれしい憂い花時計

野田素身郎

俺がうたう軍歌は何故かうら寂し

一部改築 段差の多い家になり

知ったか振り耳学問の域を出ず

仲人が亡くなり亀裂深くなる

病院の屋上自殺防止か高い柵

正本水客

お風呂への渡り廊下も旅の音（丹波湯の花湯泉）

おそ咲きの桜がのこる庭の冷え

四月には四月の献立表 旅和む

半兵衛麩の屋号うれしき京料理（京五桑大橋たもと）

古き町屋のおもむきのこす土間の井戸

松川杜的

はからずも見た満月を病窓に

シート交換 点滴のまんま追い出され

お喋りの掃除婦ベッドを笑わせる

車椅子 患者が患者押している

手を合やす内の仏壇の方角へ

小林由多香

約束を破った指の爪をつむ

老いてなお達者な耳をうとまれる

家中の笑顔を刻み夕仕度

車座へ一升びんがよくはずむ

仏壇の父へもお酒切らさない

大矢十郎

木の国の雨量が育つ紀州杉

子は宝くじ抽籤はいつだろう

雛壇の位置争いを見てしまひ

スマイルへご次男さまははつとかれ

スカートはもう尻だけを包みかね

金井文秋

地球にもきもの着せよう木を植えて

内需拡大もつと贅沢せよと言う

びったりの祝辞が本に見つからぬ

ジェラシーの唇そつと噛んでいる

一病にかえつて安堵する老後

児島与呂志

ビールつぎ妥協の糸ぐちさぐつて

気ばかりがあせて自分を見失ひ

夏祭昔むかしの遠花火

メロン切る席から離れている音痴

泡消えたままのビールと居る一人

野村太茂津

寝転べば筵に星が降る宇宙

同情は要らぬ迷惑ホームレス

忠告も禁句静かなホームレス

満腹でこの世の旅もホームレス

その気持 何故か判ったホームレス

辻白溪子

女文字の手紙が保険屋から届く

判貰う書類が重い足にする

雲の位置レジャーを喜ばさせる富士

貝になり切つてかばうている黙秘

紙コップ下戸にはジュース酌ぐ車内

高 杉 鬼 遊
ざくろ一つわがてのひらにあるやなし
雑兵のひとり一人に母がいる
いちにちを生きて日記の白いまま
ふり向かぬ句集さびしき背をならべ
政治家に頼って生きてゆけますか

西 田 柳 宏 子
よっしゃよっしゃと調子よく利用され
最後までマイペースです亀の足
定年まで二人で築いた城で揉め
受売りのうまい男で物識で
見交わす瞳 男と男 肚と肚

黒 川 紫 香
嬉しいね裏の水路に鯉が住む
ライバルも米寿電話して祝う
ご近所の噂 堀越しから聞こえ
来年も生きるつもりの旅プラン
四世代住んでまんねんこの家で

小 出 智 子
友だちに聞いてもらった五月晴れ
ダンボール箱は踏み台にならず
母の引出しなにも変ったことがない
その訳は裏へ回って見てもらう
手鏡にきらいな夏がやってくる

奥 谷 弘 朗
油断せず心の窓を開けておく
トップにはなれぬが友をたんと持ち
お前さん情け深いが玉にきず
シベリアで夢にまで見た白い飯
笑顔には妻の処世術がある

橘 高 薫 風

路郎の忌 三十年は一つ息
路郎忌の畏怖掲仰も齡をとり
師に会いし日の師の歳がわれに来る
われら川柳難民 無力焦燥なお孤独
胃薬を買う漱石の札の顔

ふれあいの祭典'94 川柳祭 作品募集規定

作 品 各題1句、合計1人3句

題と選者 1題5人共選

「明るい」助川助六・西村道也・大森一甲

伊佐次無成・春城武庫坊

「海峡」真殿舎句里・濱邊淳・森田栄一

来住タカ子・小笠原双城

「恩」原田北涯・安川一醉・赤井花城

河島いち子・遠山可住

2次選 去来川巨城・黒川紫香・ト部晴美

小松原爽介・藤本静港子

応募料 1000円(定額小為替)

締 切 9月10日(土)

応募先 明石市中崎1-51明石市役所内
ふれあいの祭典実行委員会

川柳太平記 (194)

川柳の群像

富士野鞍馬

東野 大八

ぼく(鞍馬)は昔、台湾で日本酒の醸造を

やった。その醸造法に新工夫を編み出したら内地の酒博士が来て見て驚いていた。それはコンクリート槽の中に銅タンクを入れて、槽とタンクの間で冷水を流す方法だ。これはぼくが考案したのだが、冷蔵庫で仕込んだのでは空気が密閉されて、菌の育成に大事なものを欠くからいけないんだ。

世界の酒を語ることができるのは、恐らく日本ではぼくの右に出るものはいないだろうな。坂口博士が日本ではナンバーワンだが、彼は支那の酒を知らない。話はジョニーウォーカーのブランドのことから、ビール、ワイン、支那の酒と酒屋仲間の私とみて話は止まることを知らずである。

私(菅生沼畔)は上京の都度(年に二回)

らいたが、白金台詣りは欠かさなかった。

先生は、奥さんに先立たれてよほど淋しかったのだろう。一寸お邪魔するつもりが、どうしても半日になった。帰して下さらないのだ。お話し好きでいつもこちらは聞き役になった。それで帰りキップ時間ギリギリまで引き止められた。

東京国税局にいた池田勇人君は、若い時からたいた奴だった。戦禍で局が焼け野原になった折り見舞いに行ったら、彼は焼跡に茫然とハダシで立っていた。靴まで焼いたといっていた。ぼくは

「大変だね。今年の税金の査定はどうするんだ」

といったら、ナニ、大丈夫だ、税金は全部とる。資料は焼けとらん、と平気な顔でうそ

ぶいている。それで、どう査定したのか、やっぱり通達がきたが、思ったより安かった。これは資料不足のせいだと思ったものの、彼はどうだ、焼いてはいなかっただろうと笑っていた。その時、ぼくはこれはいした奴だ、きつと大モノになる男だと思ったら、案の定ついに内閣総理大臣にまでなっていました。(『川柳ひろしま』昭52・9刊・「ああ鞍馬先生」菅生沼畔)

富士野鞍馬・本名安之助。明治28年10月13日京都生れ。大正5年台湾は大正製酒(のち宝酒造と合併)社員で在勤中、趣味の川柳から柳誌『むらさき』刊行。大正11年帰国し、東京の宝酒造の重役に就任、販売部長で活躍の傍ら、川柳久良伎社幹事で久良伎派の重鎮となり、古川柳の造詣を深めた。

昭和に入って同4年番傘川柳本社同人、のち同社友。昭和19年同社を退任して、清水市の長島化学の取締役として同27年まで在任。その後、宝酒造の嘱託として同社社史編纂に当る。

川柳畑では昭和9年句集『川柳鞍馬集』刊行、翌年から久良伎との共著『川柳講座』で健筆を揮い、同14年大日本文学報国会川柳選者となる。終戦後は数年間、疎開先の静岡川柳社顧問兼静岡NHK川柳選者で過した。

昭和28年東京審判川柳社会長に就任して、『川柳東京』を刊行したが、二年後生地京都に帰り、地元の新新聞やラジオの川柳放送で活躍、同31年には京都市長から表彰されている。同42年川柳人協会より川柳文化賞を受賞したのを機に、同46年には恩師阪井久良伎の碑を建立すると同時に、『久良伎伝』を刊行する。

この間に全国著名柳誌に古川柳研究の評釈、古句名句集などを執筆。本誌の前身『川柳雑誌』には、長期にわたり古川柳の柳樽などの詠史評釈を連載して好評であった。

「昭和39年、私（飛田瓢軽坊）の先祖の寺は、新宿区神楽坂にあり、善国寺という。私の先祖の十代將軍家治公の小姓頭取を勤めた竹本下總守正温が建立した寺で、ここで一番繁昌したのが毘沙門様である。」

この寺で、今から百六十三年前の文化十一年二月、二世川柳はじめ当時の有名宗匠連が集まり、毘沙門天顕彰の川柳句会を開き、抜句百四十七句を懸額奉納したが、惜しくも戦災で消失した。私は還暦を機に、再建善国寺の毘沙門堂に川柳懸額の奉納を思いたった。

かくて私の願望で集句をみた七十三句を、柳界の巨峰であり、書家である鞍馬先生にお願いに参上したところ、今から十年若ければ——こんな大仕事は、七十歳になった今はムリ

だと断られた。それをなんとか懸命に口説きぬいてやっと承諾を得た。畳より大きい長さ七尺、幅三尺、厚さ一寸五分のケヤキの一枚板に、やっと先生の見事な筆管をもって、立派な川柳額が出来上がった。

昭和39年11月29日、多数の川柳人が参会して盛大な奉納式と記念句会が開かれ、先生のご講演まで頂いた。朝日、読売の中央紙はじめ多くの新聞に大きく写真入りで報道されたので、先生も自分にとっても晩年のよい記念になったと大いに喜ばれた。

その額に記された先生の句は
成功の毘沙門信仰談をきく
であったが、この句意を理解するには紙幅があるので割愛する（『川柳ひろしま』昭和52年九月刊、鞍馬先生と川柳額、飛田瓢軽坊）
昭和52年7月10日老衰のため没、81歳。宝善院徳寿安詠居士。

筆者の手許に、白表紙厚紙も典雅な『川柳鞍馬集』がある。昭和10年12月刊、定価壹円。表紙には、プロ級と称された鞍馬得意の流麗な文字に二重橋の軽妙なカットで

二重橋東京に住むありがたさ 鞍馬
とある。序文は、在市川市、67歳阪井久良伎の四頁がある。開巻まず目につくのは、大島の和服上下に雪駄履きの、壮年期のこの人の

ア力抜けた顔があり、その傍らに和服正装の若い娘がより添っている。「華やかなりし頃の鞍馬と一人娘エミ子」と下に説明書きがある。その写真の後ろには、極大の立看板に「森律子後援くらま会観劇会」とある。川柳人鞍馬の絶頂期だ。

この本の巻末の跋は蛭子省二で
「この句集の刊行の動機は、一粒種の亡きエミ子さんへの追慕の料なのである」
とある。後書では「川柳報国 鞍馬」で、彼は亡き愛嬢にはふれず、こう結んでいる。

「明るいい心は健康と現れ、暗い心は病気になる。迷いは暗く、安心は明るい。川柳は宗教なりというのも、私の川柳報国も共通の意義がある。川柳報国はその厚薄こそあれ、川柳家全部が行っているの、皆がこの日本の明朗化に努め、川柳報国の実を挙げたい」

この本を刊行する動機となった愛嬢エミ子の忌日は昭和9年9月26日、享年21、鞍馬はまさに男盛りの40歳であった。

一人娘天命を終る（鞍馬句集より）
永くなしじかくもなし二十年
天命におまけはなく線香の香
逝きし娘の編みかけがある二七日

▼次号は「草刈蒼之助」

柳籠裏三篇研究 (三十二)

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博

鈴木倉之助 故岡田 甫

271 十日の情をと嫁ハどうをすへ

鬼蝶

西原『難句』「十日の情」という成句がある

かと尋ねたが未発見。「胴を据える」は、覚悟をするとか、腹を定める意。この娘、亭主の遊びを十日程は我慢するが、それで駄目なら松が岡へと覚悟を定めた有様であろうか。青木『不明』「十日の情」は借金延引を哀願しているようにも思えますが。

佐藤『松が岡の句ではないでしょうか。十日の十は「十返り」の十を暗示した句柄で、亭主のドラが止まず、「少しく実家に帰らせて下さい。十日ほどのお暇を頂きとう存じます」とお願いし、心中には東慶寺行きの覚悟をきめているという情況の句ではないだろうか。七久保『私も佐藤氏説の如く解しています。

十返りも娘思案して松が岡
鈴木『関取の禁欲であらう。』

八四九

岡田『七久保氏が挙げた例句からすると、佐藤氏の松が岡説もあるいは成立するか、とも思うが、「十日の情」には降参、とにかく、「十日の情」の語には何かありそう。宿題として、みなさん諸文献に気をつけられたし。

272 女と馬斗に成ッて項羽死

石斧

西原『有名な「四面楚歌」の故事。史記「項羽本紀第七」に、「項羽は張畏、陳平の計略によつて、東へ帰る途中、垓下で韓信の指揮する漢軍の重囲に陥る。力は山を抜き、氣は世を蕩つても、時に利あらず、驢近かず、驢の逝かざるは、如何すべき、虞や虞や、若を如何せん。』

項羽の率いる楚兵は、楚歌により戦意を喪失、陣を去っていく。残つたのは愛馬驢と愛妃虞美人のみ。

十八史略に、「虞美人は玉剣を賜り自ら死す」。当夜項羽も同じ運命におわたつた。

鈴木・岡本『賛』

273 瓜割四郎弟と見ちがへる

鼠走

西原『辞彙に、「瓜二つの兄弟の異称」として、例句に主題句を挙げ、下注に「よく見れば兄」とする。さらに、

下女がせなゆずを二つに割つたやうハ37も挙げる。瓜二つで四郎という洒落であらうが、夢中作左などと同じような擬人名。双子であらう。

岩田『賛。兄弟でも双子でも、兎に角、瓜二つを言つたものであらう。』

鈴木『賛』

御てうあひ瓜わり四郎へも御ふち

天六桜3

岡田『よく似ているのを「瓜二つ」という。これは兄弟でも、親子でも、他人でも。その擬人名。』

274 いく嶋が行ッたはきかい近所也

狐声

西原『いく嶋は生島新五郎。例の江島生島事

件である。遠島になったところは鬼界ヶ島の近所であろうとの想像。当然、「俊寛」が念頭にあっての作であろう。しかし、鬼界ヶ島は全然ことなる場所、当時の江戸人士には、甚だ地理的概念のあいまいさが知られるのである。

佐藤 女の性器をキカイという。それに付託しただけの句ではなからうか。

岩田 佐藤氏のおっしゃるように、掛言葉はバネとした飛躍の叙述とすべきであろう。

「鳴神」に、「ほぞからちつと間を置いて○きかい○きかいから丹田、そのしたがいんばく、そのいんばくの下が、そのいんばくの下が、極楽浄土じや」とある。

紀内 岩田氏賛。『俚言集覧』に「気海 灸所の臍の少し下也」とある。この「キカイ」を島めかして詠んだ句。

鈴木 なるほど岩田・紀内両氏に教えられました。この頃から次第に迷句仕立になり、本句もその一例でしょう。

『大言海』にも「気海（一）人体の臍の下一寸ノ処。書言字考節用集五（気海（臍下））とありました。

岡田 小生も気海説を早くから考えていました。お灸の本を入手して以来、つまり三十年以前からです。

275 又無心だろふと子貢封を切り

雨譚

西原 子貢は孔門の一。

さて、江戸時代の儒者は貧乏の代名詞的存在であつたらしい。

大三十日儒者平仄が合はぬ也

三〇13

借錢のよけいあるのに儒者困り

八一21

よって、儒者の始祖、張本人たる孔子もまた然りということにして、孔子からの書簡が届いたら主題句のように子貢がいったであらうとのがちである。

瀬川 賛。むりに孔子ときめなくてもよいように思うが。

青木 同前。

蔵宿は幸我子貢に口説かれる

三三32

岩田 賛。子貢が富者であることを当世風に仕立てた趣向だから、瀬川氏のおっしゃるように、書簡の差出人を限定する必要はないと思う。

鈴木 賛。限定する必要なし。

岡田 同。孔子よりもむしろ他の弟子。

276 畳から三尺高ひおもしろさ

住の江

西原 三ツ布団。

其高き三尺有余あるを敷き

第一12

三布団敷くのではなく積むの也

玉15

八木 三布団は実際三尺くらいあるのもあったのだろうか。とまれ、この三尺は「三布団」の三にかけたものであり、実際三尺あったかどうかは、どうでもよいのであろう。

岩田 賛。

高き三尺ゆうあるふとん也

一九20

「三尺」で「三布団」を暗示したところがシヤレなのであって、実際の高さを云々するのは無意味である。

鈴木 岩田さんの言われるとおりです。

岡田 同。まあ一尺ぐらいなり。

汐風川柳社45周年大会

汐風川柳社創立45周年記念大会は6月5日、今治市中央公民館で2600人が参加して開かれた。各題秀句次のとおり。

下駄箱に今日は帰さぬ靴を入れ 渡辺 春草
正論を拾うて流れ弾に遇う 加川 博文

無一物たくましい胃を持っている 小島蘭幸

妹は火の精 姉は水の精 中野 千秋

歳月や瞳の輝きがまだ描けぬ 藤解 静風

渡されて姑の苦勞を知る財布 望月 和美

頭数そろわぬ霧が深くなる 仙波八千代

短い一生だけキラリと蓮の露 矢野 佳雲

やがて夫婦は一枚岩になるだろう 小島蘭幸

秀句鑑賞

同人吟 八木千代

— 6月号から

若い頃と違って外見にしろ内部構造にしろ

格段の凋落をみせているのですが、その分はすべてのものに空間というのかゆとりの場が生まれ、カリカリすることもなく人をも自分をも許すことばかりで、まあ良くいえば寛容、

暖味、無気力にもなっていて心には不完全燃焼のおりが溜まり、ともすれば「たいした事ではない」と多寡をくくってしまします。いつとき楽になるのですが、問題は我が身に甘くなる傾向。これが気力に体力に障り、終いには羞じらいさえ奪われてしまふ。怖いです。

歩きやすい靴とかいろいろな道具の力を用いれば少しでも長く自分の足で歩けるように、内部分裂をくり返して鮮度のいい細胞を殖やさなくては精神的に死んだと同じだと思えるのもひとえに川柳さんのお陰。有難いです。

表札を守りつけてきた泥だ

林 瑞枝

今頃は休日のために鴛鴦夫婦の川柳行脚を楽しんでいらっしやるといふ川柳環境ですが、若いときには柱ともなつて家業を守り抜かれ

ました。明るけれど芯のしつかりした性格

だから耐えられたのでしよう。物語を淡々と「泥だ」と書き流したあたり、裏側の重さをより深く伝えています。

したたかな尻尾をさりげなく補修

舟 渡 杏花

ほんとうは傷だらけの尻尾を人目につかぬうちに繕ったというのですから哀しくてたまらないはずでしょうに、このあつけらかなとした言い方はどうでしょう。わたしのある頃と全く重なるもので、涙ぐんだはしばしだけ、あまりのしたたかさにのけぞって大笑いしてしまつたではありませんか。さては深い雪の底ではろろ泣きながら尻尾の破れをひと針ひと針と縫いつづけた果ての乾ききつた笑顔だったのですね

爪伸びると一週間が経っていた

春 城 年代

年代さん。眼の調子がよくないと伺いました、この頃は如何ですか。年を寄せるということ、大変な山坂ですもの。けれど詩魂は

衰えてはいませんね。ふつと我に返つたら爪先だけはピンクいろに伸びていた。一週間はたしかに経つたのだと、切々とした泣きが烈しく迫ります。沈んだ情感に包まれて一分間ほど身動きができませんでした。

幸せて何だろ飯のおかわり

土 橋 螢

ほんとうに幸せて何でしょう。常にそつして振り返つてみる作者の真摯な姿勢に打たれます。生きるということの意味を心に問ひかけながら日常も過ごしていられるのでしょうか。そうかと思えばぐらりと変わり、「今は先ず食事の時間だ。達者で飯もつまいし、とりあえずおかわり」。この変幻自在。

二人きりなのにテレビが二つある

小 池 しげお

こんなに面白い番組なのに別々に見ずとも一緒に見たらいいのに、と考えるのはたいていご主人の方です。ずつと旦那に合わせ、子の好むチャンネルに合わせて自主性などまるで認められなかった歳月。この年になれば少しは別の世界をくださいな。私もそう思います。

もつちよつとしたら美味いお茶をもつて参ります。奥様のお声が聞こえそう。それまでに眠くなつたりして。

小寺花峯

気が付くと空き地にたっている案山子

金山夕子

花吹雪降らす役なら買うて出る

堀端三男

側には回らず、花吹雪でも紙吹雪でも引き立てる役のほうを買ってでも出る。そんな人柄だと。誠実で共感度の高い句です。

地平線とろとろと溶けはじめ

小砂白江

尻尾振る夫をとしだなとみつめ

嘉數兆代賀

妥協して胸のガラスのわれる音

吉田あずき

に、受け身の脆さが衰れてびったりです。

花の乱 今しかできぬことがあります

山本 希久子

踏み台があるから登れたのをわすれ

河井庸佑

去ればもう私を消している鏡

海老池
洋

— 49 —

水煙抄

黒川紫香選

香川県 辻 上 よしみ

許す氣になつて心の痛み消え
逃げ道を少し残した母の愛
痛いめに合つて心の奥を知り
天までも届けとブランコ漕いでみる
ストレスをゆつくり流す平泳ぎ

藤井寺市 高田 美代子

青い鳥を掴むと虹が消えていた
残された時間とブランコに揺れる
君が代をとときどき聴いてます今も
さんざ降り余程のことが天にある
後ろから押されて一歩前に出る

広島市 流 奈美子

亡母よはいまも交信して豊か
雨季ぬけた絵筆が弾む空の青
微温湯の中でうたたね上手くなる
故郷の海で疼きを癒される
脱ぎ切つて遙かな雲を見ていたり

名古屋市 藤井 高子

澄む水にその身預けて水中花
ささやかな極楽 素麺冷えてます
肩パットおんなと言うにこだわりも
美しいと思う木馬の汗だから
証人喚問されているのは泥の靴

田辺市 大峠 可動

曲り角陽気な男から転び
男の苦 躓く石がありすぎて
過去は過去 虫が逃げこむ窪みかな
夕焼ける憂いが一つ消えて行く
夫婦で歌う秘密が解けたなと思う

和歌山県 杉山 精子

焰たつ慕情 私を眠らせぬ
全力で生きたページにある誇り
一枚の絵から始まる縁かな
一因は私にもある戻り橋
背を向けたままで見送る父の愛

尼崎市 山本 すみ

スカートのひだへ想い出畳み込む

日曜日てゐる坊主泣き濡れて

あいまいな笑い残して逃げられる

テトラポットに優しくなった春の海

アリバイが手帳にあつた安堵感

丸亀市 萬 沢 翠

春風と男に軽く誘われる

コヒーをこぼし部屋中いい香り

つまらないナ気の合う鬼は旅行中

急カーブちよつとさわっていいですか

タンポポが百本咲いた父の墓

宝塚市 永 田 暁 風

流水の軋みを女はすでに知り

深爪の痛さが思い違いする

目まいすればまっ白になるカレンダー

春長閑いのちを刻む花時計

逃げ道も隙も作っておんなだな

熊本市 宇 野 照 代

ペランダで幸せ色のミニトマト

正座して子の言い分を聞いてやる

ゼスチャーの程には中身のない話

花過ぎてちよつと邪険に植木鉢

生け垣の外から花をほめられる

熊本県 大 川 幸 子

風あたり強いだろうなこのポスト

カラットを値踏みしている愛の揺れ

空っぽのボトルがなぐさめてくれる

染めても染めても白髪笑いだす

未だ若さありますドキドキしています

富山市 島 ひ か る

捨てられた形で咲いたシクラメン

はる三日 野良着が似合う豆の花

神の名も知らずに酔った祭り酒

塾へ行く仲間になれぬ雀の子

知っていて言えない事よ好きだから

富山県 高 畠 五 月

老いらくの夕日背負った散歩道

たとう紙を開いて結ぶ小半日

夕やけがきれいな里に今日も生き

夕ぐれて地蔵に語る老いひとり

黒梓の子におやすみと今日終わる

尼崎市 田 辺 鹿 太

爆笑のネタは夕餉にとっておく

学究の友が時々呑みにくる

法話聴く胎児の足がダダを言う

人形の抱かれ上手は炎の匂

機会さえあればハートに点火する

摂津市 木下道子

母となる欲び受話器から溢れ

節約節約ふんわり孫を抱く日まで

命名に漢字辞典の塵払う

艶やかにいのちを染める柿若葉

絵の具皿 干からび果てて恋終る

豊中市 石川勝

黒めがねかけると嘘がつき易い

ハンガーに風に疲れた父のシャツ

街路灯ふえて政治が生きている

きざみ葱生涯主役にはなれぬ

バラと許り思つて水をやっていた

静岡市 沢田きん

自惚れへポーズをとつてみる鏡

くず籠をはらはらせるラブレター

お早うと花に挨拶して回り

さつそうと歩ける足が欲しくなる

追伸へ元気で逢える日を誓う

鳥取県 土橋睦子

得をする話に耳をかたむける

わだかまりとれてわが家の水が澄む

俱会一処 背中あわせで丸く生き

恥ずかしい齢でもない好きなこと

影踏みも子供相手の知恵でした

今治市 野村清美

産みたての卵やさしく手に包む

Tシャツのマーク若さが盛り上がる

水子像 四季いろいろの花を差し

明るさを拒みつづけるサングラス

和歌山市 山口三千子

悟らねば心に青い空がない

還暦が古いへの導火線となり

惚けたかな時々ふつともの忘れ

捜してた靴犬小屋の中にあり

旭川市 朝倉大柏

読まれても差し障りない日記書く

あるというだけでふるさと誇らしい

笑顔だけくれて話に手は貸さず

何もないから清貧にしておこう

米子市 足立由美子

気がつくとき昔話の中にいる

洗濯機 朝のリズムにかかせない

忙しい事が幸福だと思ふ

喜びが山の緑の中にある 貝塚市 池田寿美子

働き蜂の巣箱はいつも花の中

ずんぐりむっくり竹の子だけはこれがいい

家計簿つけて貯まるものでなし

郵便局モダンになつて用もなし

久留米市 鶴久 百万両

藁人形が近頃お洒落して困る
魂を売った男の軽いウツ
不渡りを並べて善後策を練る
愛に生きる男の貌を補正する

尼崎市 森安 夢之助

天真爛漫笑い袋は旅がすき
内幕はどうあれ花が咲いている
隠し子がだんだん俺に似る怖さ
ゲートボールの音冴えて春となる

尼崎市 野瀬 昌子

起きたり寝たり母の一日恙無し
いそがしい一日でした日曜日
知らぬ顔ばかり故郷の船着場
雨が降る私の耳の中でふる

尼崎市 的場 十四郎

咲き誇る明日があるから種を蒔く
引力のうすい男が浮気する
姿見がときに不倫の顔うつす
隙間から互いに腹をさぐり合い

尼崎市 尾宮 弘治

灘ものに負けぬと地酒提げてくる
ナース達の引力に負け再入院
おなじみの飲み屋に妻を連れてゆく
お見舞いの客に疲れが有難い

尼崎市 長浜 澄子

口約束して泥濘を出られない
握り拳の中でジレンマを潰す
一笑にされた本音が眠れない
ゆつくりと愛満ちてくる星明かり

松江市 松浦 登志子

ふるさとへ帰るフアイトが不足気味
誕生日 手塩の花を摘む夫
ゴボウ 露 野菜の色で染まる指
欠点も笑って言える里の母

富山市 鍋谷 富士子

お見舞へ言葉すくなに手を握る
完成祝 薬玉をわる渡り初め
足弱になると知りつつ乗る車
旨い店秘伝のひと味隠し持つ

(前月分) 和歌山県 杉山 精子

浅黄色似合う女の後れ髪
慈悲深い温もりの瞳に抱かれる
ハーケンで登りつめたら消える虹
色封筒 愛がぎっしり詰まってる

今治市 渡辺 南奉

消印有効甘える癖がまだ抜けぬ
過疎が好き村長さんの国訛り
おじさんと呼ばれてそうだなと思
小まわりが効くと大物らしくない

今治市 塩路 よしみ

宅配にまかせ手ぶらの里がえり

雑踏の流れを縫うて生きる蟻

飽食の中でストレス溜めている

老春をべアルックでしゃれている

今治市 越智 青園

風みどり甘い言葉をさそい出す

まうしろに敵がいるからふり向かぬ

ネクタイを取ると課長もただの人

良妻賢母 冗談なんか言えません

熊本県 岩切 康子

遠慮して自分の負担軽くする

タンポポの絮も少し強い風を待つ

涙して仰げば広い青い空

砂時計見直してやる使いだ

静岡市 小木 久子

過ぎた日のわたし日記に拾い出す

無口な人とても奥床しく見える

薬湯を今日もこと煮ています

失意の日 温い家族に支えられ

兵庫県 西井 つや子

ほころびを一人で縫うて古希の坂

花びらは思い思いで散ってゆく

掘り返す土が昔を喋り出す

小さい花ちさい笑顔で和ませる

枚方市 森本 節子

ご馳走が並び話とはだえ勝ち

有馬の湯に余生あずける旅をする

姉妹の共有財産として兄がある

愛犬とあくびごっこの午さがり

西宮市 山本 義子

仏壇にかしわ餅 亡母好きでした

窓側の家具動かして夏の部屋

われながら老いたと思う針のあな

れんげ畑 夕陽とともに空につき

西宮市 牧 渕 富喜子

欠点をいっぱい抱えている人生

筆先をかみかみ香典書いている

大袈裟にするので何だと聞いてやる

せせらぎを黙って見てるまだ他人

和歌山市 古久保 和子

町の子が一人入学した故郷

タクシীর釣りはゆっくり出してくる

石垣へ腰掛け昔話聞く

役所から漢字ばかりの手紙くる

唐津市 野田 旭恒

梵鐘に送られ釈迦の手に絶る

縋り戻すための喧嘩は厭わない

傍に居るだけで良いよと独り言

吹流しここに日本男子あり

寢屋川市 富山 ルイ子

高松市 松本 翠

さりげなく聞いて心に刺さるとげ
胡蝶蘭芽吹いてきたと友の文

目茶苦茶に会いたくなった春の夜
自己防衛言い訳ばかりうまくなる

八尾市 平川 幸枝

真つすぐの道でリズムを狂わせる

母の居る屋根が見えてる遠い道

勝つほどの事もなかったジャンケンポン

いさぎよく着地を決めた落椿

西宮市 菊池 トミエ

保育園星のお話大好きな

菜摘唄 手早に摘んで香もゆかし

どの窓も開けて笑いのある暮し

御無沙汰の言訳もして花手桶

西宮市 岡本 道子

ふつつと木の芽言いたきこと多し

淋しがる片手にあめを握らせる

逢いたさの先の先まで藤の花

かばちや割るさえ刃こぼれの意気地なし

米子市 小塩 智加恵

取りたてて何もないのに妻やさし

エプロンをつけた男が家にいる

手をつなぐなんて出来ない夫婦です

亡兄は四人の孫を知らぬまま

裏表持っているので生きている

プレセント宅配人に世辞をいう

手のこんだごはんが続くブレンド米

元他人時には返事もしてやらぬ

兵庫県 森脇 和子

もう一度欲しいときめき抱く鏡

花の下女三人ワンカップ

星影のワルツで別れるクラス会

リハビリの一步歯がゆい松葉杖

兵庫県 円増 純子

約束の便りが届く花曇り

一つしかない席だから揉めている

遅く来る友の座席がとつてある

洗濯がゆっくり出来て平和かな

芦別市 斎藤 房子

郷愁の絵巻ホロホロみやこ島

泣いて笑っておんな涙で蘇る

ネオン街 伝書鳩がたむろする

捨てゼリフ吐いて世間を狭くする

河内長野市 大西 文次

持ちつけぬものを持ったたら寝つかれぬ

屁理屈が又はじまった父の酒

手をつなぎ妻と歩いたことがない

郵便のバイクの音を聞きわける

神業の妙に打たれる白牡丹

酒田市 永澤裕子

奥の手の打出の小槌軽過ぎる

サヨナラを言つてまたすぐ会う手立て

肩書きの多い名刺を撒きたがり

静岡市 増田扶美

登り坂 他人は過去を言いたがる

快調でまでも忘れた痛みどめ

若夫婦になつて隣が遠くなる

石段は昔のままよ老いを知る

大和郡山市 榑原慧心

満ちたりて不思議にころろ揺れ動く

母を追う瞳でものを言う赤子

杜の机 家に内証のものばかり

秘密でもないのに内証という上司

羽曳野市 芦田絢子

人並みという生活に満ち足りる

自己採点 眼鏡を少しずらしとく

アバンチュール期待している花ぐもり

年金アップ五月の風に乗ってくる

大阪市 江城修史

遠い日の句会を偲ぶ慶沢園

午前二時 父子ですする屋台そば

亡き友に心の借りがタンとある

病む暮し人の心が良く見える

体力の限界を知る野良の汗

はめられた時からボロが顔を出す

身を守るために渦の中にいる

根性が弱くて鬼と妥協する

鳥取県 植田一京

絵の中に少女のままで居る私

花言葉わかつて欲しい花贈る

湖の月に聴かせる失恋歌

お邪魔しますと来た姑さんが帰らない

鳥取県 奥谷彩子

涙跡笑顔で消して輪にもどる

無礼講うっかり本音ころがせる

青春を詰めた槌もセピア色

お茶だけで話の弾むいい仲間

和歌山市 森口恵子

わだかまり消えると電話したくなる

言い訳をはさめないほど叱られる

予定にはない説教をきいている

つまらないうわさで愛が消えて行く

鳴門市 八木芳水

明日も元氣早朝ゲート欠かせない

耳搔きに少し本音を乗せておく

呉越同舟 結局みんな生きている

急ぐので相槌打っておきました

福岡市 井崎 ミサ子

くり返し練習したけど出ぬ言葉
目で合図し合つて夫婦しらんぷり
ほかむりして応援のおとうさん
人生を悩む娘に助言され

尼崎市 岩倉 キク子

きれいなリボン嬉しくほどくプレゼント
色眼鏡かけて世間をせまくする
小さな鉢植それでも蝶が舞いに来る
それなりに懸命という華やかさ

大阪市 勢理客 トミ子

諦めが早いと背中叩かれる
病気には耐えて妻には甘えてる
朝顔を樂しむ隣の庭だけど
手をひろげ叫びたくなる瀧の音

大阪市 乾 哲 静

母の日の親爺二階で拗ねている
月を見て暮らす平和の有り難み
親馬鹿を宅配にして旬の味
連休も淋しく見える過疎の村

岡山県 大石 あすなろ

ふる里を偲んで歌う手まり唄
半生を土を愛して米作り
年ですとケタケタ笑う姫鏡
ボックリ寺は山の向うにあるらしい

尼崎市 中澤 向西

小金貯め内気になったおばあちゃん
くどくどと愚痴を言つては嫌われる
義理と見栄張つて苦勞をしています

尼崎市 湊 修 水

空港の橋から愛の虹が湧く
初恋とホップの苦味忘らりよか
Jリーグの帽子欲しがる三歳児

西宮市 亀岡 哲 子

千代紙の箱に星屑金平糖
猫病んで旅の予定を取りやめる
馬の足花道へ出る昂りを

柏市 上鈴木 春 枝

とりあえずいつもの場所待ち合わせ
待ち人へあと一時間待つ未練
単身の夫とエプロンベアにする

広島市 元林 光子

連休はどこも混むよで納得し
万歩計 今日足らぬぞさあ歩け
仲良くて掃除嫌いな嫁姑

広島市 中村 要

菖蒲湯の中で余命を噛みしめる
進学でひとくち増えた妻の愚痴
例えばの話に本音のぞかせる

春灯下 妻妻なりに夜を更かす 熊本市 遠山夏生

皿数が豪華でしたと帯を解く
長年の主治医も老いて頼りなし

兵庫県 安達厚

我が道を自分の歩幅で歩いてる
手をつなぎ渡ってみたい虹の橋
腹八分 妻の料理がおいすぎ

和歌山市 山根恵美

下らない話 女の長寿国

虚と実を抱いて真顔で弁明し

しつべ返し静かにしてる妻の意地

和歌山県 中後清史

着飾ってみても中身は変えられず
野良猫が鈴を付けてとやって来る
抜き差しがなくなつた勇み足

和歌山市 阿部喜久江

孫留守でのんびりしてる老夫婦

騙された振りをするのも老いの知恵
口コミで客が集まる味の店

岡山県 福原辰江

痩せても五分の魂かけめぐる

怒る顔見せない老母の座りだこ

芽は出ないけど平凡のありがたさ

反省と自戒で老いの日々平穩 羽曳野市 麻野幽玄
美味探訪四季ある国の旬の味
他人の眼に良い子に見える子に育ち

寝屋川市 後藤黎之助

誘われてとっさにうまい嘘ひとつ
氣を付けろそこにタンポポ咲いている
たこ焼と回転焼を仏壇に

藤井寺市 楠昭子

英会話少し嚙ってパスポート

九官鳥内緒のこととも言いふらし

八方美人いずれ孤独になるだろう

河内長野市 柏本靖子

前向きに生きた笑顔が素晴らしい
生きてゆく顔がラッシュに揺れている
手料理を喜ぶ人が居てくれる

和歌山市 木村親路

街路樹の一つひとつに顔がある

祖父に似て三代続く頑固者
信号を待つどの顔も個人主義

静岡市 柳沢たま

窓の灯が幸せ順に点く団地

以下同文気障な言葉の表彰状

真心を贈る手作りこれも愛

静岡市 永倉柳華

三四人囲み草書の字が読めず
親よりも生きて感謝の数珠を繰る
運転をパパに任せてみな眠り

大阪市 池田一男

ハイテクに浮かれ人間忘れてる
退職後 家でも影が薄くなる
漱石も論吉も連休浮かれ出る

沖縄県 杉谷一栄

オルゴール鳴る引き出しにあるバッジ
車椅子友の細った足さする
カレンダー孫の遠足嵐山

岡山県 福原悦子

鏡台の奥で魔性の目がさめる
逆縁に祈るしかなく忌がめぐる
自画像に真紅な花を描き添える

兵庫県 倉垣恵美

ニハオとシェーシェーの旅終る
お風呂で一句トイレで一句ひとりの日
じつくりと見てたら毛虫動きだす

西宮市 古谷ひろ子

迷ったらアンパンにする戦中派
まさかまさかの定退離婚お隣さん
やあやあ長い握手で名をさぐり

和歌山県 藤井春子

孫もゆくばあちゃんもゆくスイミング
末席の椅子で燃やしている希望
散り急ぐ花追いかけて根来寺

和歌山県 村中悦男

何気なく言った言葉にしばらくれる
すて猫の声高くなり陽が沈む
あの時のあの一言を抱いて生き

尼崎市 吉永伊三郎

親の脛かじれるうちに貯めておく
このお酒甘いと女腰を据え
雑草は踏まれた後で背伸びする

尼崎市 軸丸勝巳

親の歳 親の思いがやつと読め
幸せは静かな底の日向ぼこ
まん中の只一球に泣く投手

愛媛県 久保良子

がまん袋繕う母のかえし針
筋一本通すと火の粉ふって来る
土に生きる父は不作を口にせず

奈良県 飯田昇

口コミへ直ぐ走り出す軽い足
拍手が無理難題を吹っかける
逆らわぬ妻に尚更もて余す

妻の愛あの薬この薬まで

八戸市 島田昭治

連休に下水をあげて悔いはなし

唐津市 山門幸夫
(鹿児島旅行)

肩の荷がいつも降りないお人好し

高千穂の峰仰ぎつつ牛乳を飲み
ほどほどにほどよいブレンド母の味

今治市 渡邊伊津志

メイキャップ終ると銭になる仕種

欲捨てて老いを自由に生きる幸

佐賀市 古川かずのり

野望など捨てると海が風いで来る

薬屋根にむかし話が吊つてある

波音の聞こえる部屋にする対話

頂点に立つと弱音は吐けません

新潟県 高野不二

退職の自由晩酌好きなだけ

筋がよいと初めのうちははめてくれ

枚方市 前たもつ

晴耕雨読さっぱり降らぬのも困る

教会に入ると眠気さしてくる

年金の通帳カードで出す暮し

スーツ着ればデートですかと定年後

八尾市 村上剛治

迷ったら浜へ海鳴りききに行く

庭いじり趣味というには狭すぎる

枚方市 濱田良知

嘘だとは分かっているもおもしろい

擦れ違う笑顔の思い出せぬまま

薬湯をいただくように新茶飲む

惚れている待たされました待ちました

富田林市 欄 智久

一病息災お蔭で喜寿になりました

考えるゴリラと視線合いました

寝屋川市 森 茜

春眠や遅刻しそうな日がつづき

しんせつに税務署道順を教え

どこに置いてもきれいな花は見つめられ

母がしたよう惣菜の品そろえ

宿毛市 岡村千鳥

肩書を捨ててすっきり茶がうまい

あじさいは女の妬心よ七変化

寝屋川市 宮崎菜月

夢みんな破れ小さな灯に戻る

岩畳ひんやり木蔭のお弁当

明るさが取り柄ストレス寄りつかず

愛はもう還らぬ空気と知っている

寝屋川市 井上 すみれ

鳥取県 岩崎 みさ江

一年生学友出来て母の詩
退屈の相手になっているジャンプ傘
どちら様も孫が孫がの春四月

大阪市 一本 勇 太

矢車が元氣な朝の音で鳴る
ハンカチの白 涙の嘘を知っている
奴風 風の力を忘れた日

吹田市 馬 渕 光子

百万分の一のそげが脅かす
飛び火した夫婦喧嘩が燃え上がる
JRになって商魂逞しい

茨木市 島 元 ふ み

遠くから呼ぶのにあなたでも困る
公園の子連れ眺める老夫婦
暮し慣れ孫の活気に疲れ気味

松江市 安 食 友 子

神無情フィルムの笑い残されて(中華航空機墜落事故)
一寸だけチークダンスをいいますか
母の日を心の底で当てにする

鳥取市 中 西 智恵子

迷わずに蝶が選んだ白い花
矢印が消えて方向見失う
外米も舌になじんで落ち着いた

友の計や一期一会をいまさらに
青い目の女にもらったいい会釈
回遊魚自分を守る群にいる

岡山県 富坂 志 重

花散って五月は恋の実る頃
曾孫のおしめ替えつつ我が老後
小さい手にあふれるばかりひなあられ

相生市 中 塚 礎 石

茶柱にだまされていた靴をぬぐ
定刻に発車するのが当たり前
だだをこね後もどりする流しびな

尼崎市 河 津 正 治

潮騒を背に遅しく寒稽古
単身赴任心の過疎を縄ノレン
配転の訳は聞くまい後三月

尼崎市 向 井 末貞一

瑞兆か桜一輪狂い咲く
風船を渡すピエロにたじろぐ児
焦点を隙間に合わす遠眼鏡

静岡市 片 平 静 代

ご好意に甘えてなどと酒の席
花一輪無口の人を喋らせる
絵心はないが描きたい富士の山

岡山県 伏見 すみれ

抜け道がこんなところにも武家屋敷
犬が走る 子供が走る 月が追う
エプロンが走り並んだ先着順
捨てられている人形の瞳が恐い
さよならは言わずまた逢う日まで老い
敵は一枚上だ笑顔に殺される

唐津市 山口 ふさ子

河内長野市 水谷 正子

化粧のりよくてデートがたくなり
骨つばに丁度いいのを予約する
自由のない鳩で茶の間にばかりいる

堺市 吉本 菁風

海ばかり見ていた頃は夢があり
どこへでも車を止める大阪人
解説者言葉に困る貧打戦

兵庫県 北川 とみ子

目を奪うときめきもある妻の留守
許してはいない赤飯炊いている
平凡な倅を抱く太い指

福岡県 本田 忠男

つつじの芽ことしはきつと花になる
浄土から今日も足元照らす妻
税金を払うつもりの宝くじ

高槻市 江原 秀夫

妻は留守出前のまむし胃のもたれ
十三回忌話題は老後のことになり
新鮮で見ばえは良いが味が無い

大阪市 尾崎 黄紅

三浪の子が居り二度の宮仕え
左遷地の釣場に慣れて日やけする
ご立派な応接室で茶が出ない

東京都 清原 悦子

マネキンが着ていた服を欲しくなり
時々夫も主婦にしたくなり
目で会話できる親子にある平和

流山市 神田 治

墓の下でも母はいばっているだろうか
傷口が痒いお化けのリアリズム
菜の花を見ると起きそうな事件

青森県 諏訪 明雄

要領の良さ神経の若さだろ
二日酔い真水のうまさ確かめる
花鋏春には春の音を出し

伊丹市 樫谷 郁子

ペランダの鯉も負けずに跳ねて居り
昆陽池を直線で切る鯉のぼり
連休も想い出話の老夫婦

富田林市 山原昭水

青森県 加川 栄川

川柳塔表紙の墨絵にある温み

玉音を聞いたラジオが蔵にある

嬉しいと父は鯛焼買ってくる

島根県 菅田 かつ子

河内長野市 印藤 智子

生きている姿で秋刀魚並べられ

こんなにも近くにあった湖の青

六十ヘミニがどんなに流行ろうと

熊本県 高野 宵草

鳥取市 津村 静枝

老父突如軍歌を唄う淋しい日

入浴剤入れてゆっくり草津節

いいお菓子食べよう八十八夜の茶

島根県 岩田 三和

徳島県 安宅 美代子

トマト苗植えて真っ赤な夢えがく

草の実がはじける音に目をさます

絵ハガキのやりとり楽し友増えて

大宮市 新井 圭二

広島県 森川 抜智

父病めば詫びることあり過去の傷

出張も娘のいる町なら旅気分

通勤の流れを乱すフレッシュマン

岡山県 土居 孝

高知市 桑名 智加子

さよならの合図ヘメガネ曇りがち

忘却の合図のようなチャンチャンコ

良薬の苦さに今日を救われる

古里に向かうレールが敷かれてる

抑えた声で息子が嬉しい話する

いい話座り直してから始め

一輪差しわたしの孤独視てくれず

屈託を捨ててあなたの箸洗う

人生峠 重いつづらは捨てようよ

お揃いのTシャツちよつと恥ずかしい

目の前のヤング男か女かな

あの時に好きと言えたと口惜しがる

頑固でもどこか憎めぬお人好し

ふれあいを筆に託して輪を広げ

泣きじやくる孫あやしてる花時計

明日逢う話ばかりの長電話

笑いごと束ねて春の友が来る

いくさのない国にしたいと鳩が鳴く

猿も木から病も気から重くなる

五月からビールがすこし苦くなり

愛犬にいつもの雀叩いに(愛犬の死)

高知市 桑名 智加子

今昔の違い連休外国へ

熊本市 北川 一進

ウィンドーに夏の帽子がめじろおし

同じ事言うなと友に助言され

鹿児島 大山 舞鳥影

この坂は肺活量にきいてから

あの人の紹介ならば逆効果

過労死になるほど尽す会社とは

松山市 丹下 美津子

換気扇 小鳥にとられてヒナ育つ

発言をするからしっぽつかまれる

定年後も六法を繰る二度の職

寝屋川市 瀧本 八十八

うっかりと本音が怖い落し穴

天に虹 地に反り橋の神詣で

讃美歌がステンドグラス エコーする

寝屋川市 北川 波留吉

裏金で無難に見せる世間体

理不尽を得心させる多数決

バーゲンへ遅刻させない物価高

豊中市 田中 道胤

八十八夜新茶転がす舌の上

続編が出るのを待っている漫画

お砂糖の数は聞かずに入れる仲

返事だけは何時も威勢の良いお人

七人の五人は眼鏡鍋囲む

夕焼けに向いとめどなく走る

吹田市 福島 紀一

旅の車窓水田ばかりが眼にとまり

鈍行の各駅停車も味なもの

一枚のはがきがつなぐ友も居る

島根県 武島 ちよえ

急げどもバスは定時に出たらしい

記念日に何か嬉しいかくし事

雨続き滴り落ちる木の緑

姫路市 小井 里兆

物の怪が取り付くような山の藍

傷ついた船は母港で思索する

春の朝乙女らバイク素っ飛ばす

羽曳野市 西村 りつえ

霧もよく裸の摩周湖水張り（北海道旅行）

鹿キツネ迎えてくれる層雲峡（〃）

噂好きになかないかと風に聞く

和泉市 加山 よしお

宴果てたあと不機嫌な花の山

鎮魂の船は港のこの辺り

わが兄の墓標は遙かレイテ沖

岡山市 山磨行子

愛媛県 中居善信

何か訳ありそうそつと座をはなれ
チグハグな予定で終る三世代
今日の予定すっかりこなした軽い足

熊本県 増田一乗

読む氣力落ちて新聞投げ捨てる

健在を認めあつてゐる総会日

通院の皆勤全治と言う褒美

泉佐野市 稲葉洋

向こう傷ばかりと自慢する闘士

瀬戸際で腹を決めたか首洗う

指鳴らし定年ババがなに決意

川西市 田中喜俊

花吹雪 箒片手に眺めてる

カスミ草ひきたてで役で可哀そう

病みあがり絵筆をにぎる楽しさよ

島根県 松本聖子

不景氣を楯にどこでも断わられ

れんげ摘む空の青さが楽しくて

悩むだけ悩み抜いたる爽やかさ

島根県 三代朝子

子犬があとからついてくる散歩

湯に浮かぶ一句浮いたり沈んだり

趣味ひとつ増やして今日も家を留守

愛媛県 籠島恵子

迷ったらあかん好きならついてゆけ
読みさしを閉じて余韻のなかにいる

話相手かわればとけている心
お客さんが湯呑み洗って帰らるる

寝屋川市 太田とし子

駆込み寺 犬がしつぽを振ってくる

十階の窓から行つていらっしやい

宇部市 中村三良

全身を武器にぐいぐい引き込まれ

古傷にどきつとさわる悪い夢

八尾市 大内朝子

トンネルをいくつ抜けたか青い空

親子連れ昔の私をここに

泉佐野市 河原崎礼子

セールの口調だんだん荒くなる

渋滞の列さまざまなくび顔

神戸市 向井泰子

ガード下歩けば戦後の音がする

組の魚と話す夕べ

島根県 福岡博利

ぼーとした旅が楽しい戦友会

マンガ読む中年たちと汽車の旅

筋道の通る話は煙たがり

島根県 森 茂 美

鎮まればたわいないよな米騒動

鳥取県 美 浦 美代子

薫風にいねむり誘う講義聞く

首かけて言いたい事を言う若さ

唐津市 山 門 タ ミ

手をつなぎ仲よく喧嘩して旅へ

高千穂の山並友とバーベキュー

松江市 佐野木 み え

朝市の花いっぱいを抱いていく

朝市の曲ったきゅうり美味しくて

東京都 小 寺 九

子をやつと家族旅行を拒絶する

授業中もぐらたたきを続けている

静岡市 松 下 正 枝

賃上げもストもかわりない暮らし

家族合わせ遠い昔のゲームです

羽曳野市 酒 井 一 壺

一枚のエース カードを切る不安

社員より売上げ伸ばすアルバイト

泉南市 坂 根 流 水

政治家の離合集散 理が見えず

嫌な世と思うところが嫌になり

唇をあいうえおで塗りあげる

吹田市 西 岡 豊

親睦という酒がありまるくなる

東大阪市 松 山 隆

故事来歴 感情線が深すぎる

都会ではテンポが合わず気の苦勞

千葉県 大 川 晚 睡

サービスのお酒で頭痛くなり

ネジひとつゆるんで弾む浮かれよう

和歌山県 上 岡 正 直

定退と鑄型はずして世事音痴

酒席とて免責されぬ議員族

高槻市 乙 倉 武 史

連勝の効果客呼ぶタイガース

この辺に戦友が住む地図を見る

高槻市 庄 野 澄 子

夕焼けの向うに母が在します

清貧もステータスだった青春よ

大阪府 川 原 章 久

アルバムにあるあの頃は丸坊主

ハイウエーの真下に小さく湯原の湯

大阪府 中 橋 恵 美 子

花の無い場所が空いてるにぎりめし

病人に励まされてる五月病

合言葉チグハグになり倦怠期

大阪市 三浦 千津子

鵜呑みした話に針がついていた

大阪市 中井 正秀

ボランティア冷たい手ねと暖める

ボランティア笑顔の会話今日も聞く

羽曳野市 芦田 絢子

順ぐりに杜仲茶 柿茶 くだみ茶

発信機つけておきたい君の胸

池田市 金崎 峰子

ラベンダー花にあわせた旅をする

雨上がり春の光がまぶしくて

香川県 高橋 たみ

煙からちらちらみえる火のゆくえ

止まってる時計ふたつも飾ってる

香川県 堀田 茂穂

正義感もぐら叩きにくたびれる

葬列で自分のときをあれこれと

岡山県 国米 きくゑ

昼メロに酔って熱い茶を入れる

悔いのない余生今日のスケジュール

出雲市 中村 トク子

桜茶がほのかに香るめでたい日

年金で少しおしゃれな旅をする

年金の胸算用のお茶の味

島根県 槻谷 仲子

高級車乗り心地良い息子の車

鳥取県 橋谷 静江

実家には父とすごした場所多い

花時計太陽さんと仲が良い

鳥取県 藤山 弘子

楽しみの相撲がすめば風呂へ行く

愛犬と二人で食べる飯を炊く

鳥取市 杉本 孝男

泥んこの顔ニツコリと歯が白い

心配は要らぬといつも苦労かけ

兵庫県 玉田 三重

少年の澄んだ目にある未来地図

好きだから素直にハイと返事する

静岡市 三浦 つね

朝早く雀の家族話合い

急死した友の美声が耳につき

田川市 松元 寿永

南山に思いをはせる流れ雲

消灯のベッドで兵の泣き羅漢

八尾市 生嶋 ますみ

鯉のぼり団地の窓に競い合う

屑かごに内緒破られ捨ててある

大酒も飲むが甘納豆も好き
背伸びせぬ暮しで余生なお楽し
枚方市 八田 敏

いい風を入れて和らぐ会議室
はに candid 口説きにほろり騙される
大阪市 星野 四郎

美女何時も引立て役を供に連れ
簇糸とって晴着が使者を待つ
今治市 村上 久美子

年金がそろそろ底をついてきた
大漁だ沖から太鼓が鳴り響く
米子市 池尾 保子

約束の十分前に来て座り
四十年会わずにいたに君は近く（同期の死）
鳥取県 権代 康女

精一杯 春を奏でた桜散る
愛してはいけない人に身を焦がす
米子市 永井 三津子

水ぬるむ愛も芽吹いてくる頃だ
千羽鶴も知ってはばたく退院日
鳥取県 小西 五十鈴

ファイトファイト壁の向うで亡父の声
信号の前で来し方考える
松江市 福岡 芳枝

趣味一つ増やせば友も多くなり
春風が旅の誘いを乗せてくる
唐津市 浜本 治幸

検査入院まんまと蜘蛛にひつかかる
涅槃像描きベッドに横たわる
唐津市 市丸 晴子

花鋏どれを切ろうか迷ってる
犬猫を扶養家族のように飼い
静岡市 浅子 まつゑ

記憶から薯づるの味忘れまい
縁あつて結ばれた糸放すまい
静岡市 中西 雅

標示板たよりに迷う地下の駅
茶畑に忘れものあり菅の笠
静岡市 大村 正雄

空弁当提げて警備士朝帰り
朝市の声の高さに客動く
唐津市 岩崎 實

裏藪に鶯の鳴く金比羅座
大正のロマンなつかし夢二展
豊中市 岸田 知香子

一病も二病も持って同期会
囲まれて満悦の笑み喜寿の父
羽曳野市 山本 たけし

ご機嫌の父の鼻唄調子づく
改革へ疑惑もたつき辞任劇

池田市 木村一笛

悲しみを山ほど積んだ流し雛
背広着る機会少ない夫といふ

兵庫県 中野とよ子

葉刈りして見えた二宮金次郎

泉佐野市 大工静子

職離れ仲よくなったルーブタイ

松江市 浦辺静江

吹きだまり猫が昼寝の花布団

出雲市 荒本恵美子

朝一番目覚し代わり洗濯機

和歌山市 榎原公子

夕桜ほのかにゆれて明日を待つ

兄の背に亡父の姿彷彿と

箕面市 木村天弘

色恋の話に目くじら立てたとて
一陣の風に曇りを拭われる

海南市 谷口義男

ユーモアで来た祝吟にドツと沸き

寸志とは言えぬ中味が込めてある

鳥取市 近藤秋星

諦めて悟り開いた妻の顔
男にも泣きたい時が偶に有る

唐津市 入江喜久亭

目に青葉川に若鮎遡上する

ふるさとは田植の季節母は老い

大阪府 澤田和重

強いよで弱い女の泣き黒子
孫寝かす祖母の五ツ木の子守唄

鳥取県 橋本孝原

病んだから優しい言葉かけてくれ

湯の宿でうちとおんなじテレビ見る

香川県 高橋宅

ふる里ではのぼの偲ぶ母の顔
よろめいて美人の妻に捨てられた

鳥取県 山本正光

同県の車懐かし並び止め

校庭にいもを作りし昭和あり

羽曳野市 福田悦子

晩酌はいい汗かいた程うまい
脇役が走り目移りして困る

鳥取市 中澤正恵

夏の顔 隣もうちも朝顔が

行水をしたいが盥売ってない

屋久島旅情ほんのり酒が効いたころ

留守番の夫を思う宿の膳

姫路市 服部 一典

新刊書とび読みをする逆ページ

くじ引きで決まる役員持回り

姫路市 福島 姫女

からおけを天守も聞くよ花の莫塵

葉桜にかわり訪う城 姫牡丹

八尾市 村上 ミツ子

夫がつけた轍ちやつかり歩いてる

味方だと思わせておき策を練る

檀原市 西本 保夫

二つ目のお告げからもう信じない

小説になりそう義父母の過去まとめ

唐津市 江川 青琴

後一日待つてくれない桜花

「ないしょ」「ないしょ」孫と「ないしょ」の合言葉

明石市 小川 酔月

友ありて俺とお前で酒を酌む

戦争は反対だけど軍歌好き

大阪市 平井 露芳

団体で上がれば絵になる鯉のぼり

話にならん言うて話して帰り

出雲市 西尾 和子

口紅を濃目につけたクラス会

枷緩め妻は時々翔んでいる

米子市 木村 春枝

急ぐことやめて楽しむ余命表

急いでも五十歩百歩繭の中

大阪市 岡本 久峰

ああ歯科医軍靴しやぶつて息絶える(シベリア抑留)

復興に祖国は待つと耐えに耐え

米子市 服部 朗子

落慶式 仏も笑んで暗れわたり(菩提寺の落慶式)

採り立てのレタスが誘うサラダ食う

島根県 安部 美恵子

帰省した娘と茶摘み唄なつかしく

大正生れの夫は筆字書きたがり

寝屋川市 坂上 高栄

金きら金 回転木馬の子は王子

決断を八方美人で決まりかね

鳥取市 谷口 侑里

そろそろと月が二人を覗きこむ

過疎の村つばめ巣作り賑やかだ

告

謹

「川柳塔」誌寿古希記念合同句集は、予定を上回る多数のご参加を得て鋭意、編集にあたっています。刊行は当初の予定(7月7日)を若干、おくれますので、ご諒承をお願い申し上げます。

水煙抄

秀句鑑賞

— 6月号から

松本 ただし

俳句と川柳の区別についていろいろと論議されているが、定着した結論はなさそうである。私見になるが、服装に例えるなら俳句はフォーマルであり、肩の凝らないカジジュアルな装いを川柳に見る。気取らない川柳三原則のピリツと効いた句との出会いを楽しみに、ペンを運ばせたい。

ウロウロとするから毛虫嫌われる

宇野 照代

「出る杭は打たれる」「一言居士」というのもある。ご本人は案外気付かず、チヨコマカしているものだ。「人の振り見て我が振り直せ」、とかくこの世は住みにくい。

カーテンを小さく揺らす風が好き

島 ひかる

窓を開けると、初夏の香りを含んだ風がふわりとカーテンに小波を描く。肌に伝わる小さな刺激のある毎日こそ、かけ替えのない明

日へと続く希望の原点である。
齒ごたえのある奴だから叩いとかく

朝倉 大柏

「敵を知り己を知る…」は、軍書の一節である。百戦を危くしないため、機先を制するの戦略のひとつ。はやりすぎて足元を抄われる勇み足にならぬようご用心。

めぐり合い目刺しになっていた鰯

石川 勝

広いようで狭いのが世間の常。庶民のしれた行動半径とベースを、ユーモアのオブラートで包みながら、痛烈な風刺に心えぐられる思いがする。老練な句。

指切りの軽い約束ばかりする

小木 久子

人の良さが溢れている。頼まれたら嫌と言えない性格を、時には自分自身じれつたく思う時もある。下町を思わせる温い人情も都会から年ごとに影を消してゆく。

割り勘の立て替え消えてない手帳

森安 夢之助

律義さとルーズさが同居してこそ、幅のある人生が渡れるものだが、その兼ね合いがむつかしい。特にことカネとなれば、当り前がそつでなくなる。催促のタイミシングがむつかしい。

都会にもなれて薄情にもなれる

八木 芳水

情に棹させばいつか流される都会生活。冷たい鉄とコンクリートの塊の都市砂漠に蜷集する人々は、オアシスを求めて鎬を削っている。眠らないいくさ場。その名は都会。毒舌もお世辞も同じ耳で聞く

富坂 志重

毒舌には北風の厳しさ、お世辞には風鈴を鳴らす甘さがある。四季折々の風にそよぐ葦は、逆らわず右に左に揺れている。清濁併せ呑むのも生きる知恵。アンテナを磨こう。泣き砂の嘆きを潮が抱いてゆく

流 奈美子

お名前もお年もママが先答え

堤 くに子

叱られてもお叱られても母の膝

武島 ちよえ

頑固にも笑ってしまふ母の顔

土橋 睦子

どの子にも驚いてやる四月馬鹿

亀岡 哲子

古川柳にも母を詠んだ句が沢山ある。川柳誕生以来、星の数はど詠まれた母でありながら尽きることがない。時は移っても母の愛は未来永劫絶えることない大きな素材である。

本

と

私

同人ずいそう

宮沢賢治とわたし

堀 良江

チンセ童子とボウセ童子のお話は、二人の子とも大好きでした。宮沢賢治初期の童話といわれる『双子の星』は、私が最初に合った賢治の作品でした。

長男は幼稚園児、下の娘はまだ片言でしたが、このお話は二人の眠りへの誘いとなりました。どんなに遅くなっても、私が子どもたちの横にすべりこむまで起きています。家にはまだテレビのない時でした。絵本の好きな子どもも、いつのまにかお話好きになりました。話しますが、中でも『双子の星』は大好きでした。明るくて楽しくて夢一杯で、親子で楽しんだものです。端折ったり筋立てを変えようものなら、『チガウヨ』とクレームが入ります。あの頃の子どもは、もつ父となり母と

なりました。

数年前から朗読の勉強を始めました。多くの本を読みますが、相も変わらず賢治の作品がよく登場します。『貝の火』『風の又三郎』『なめとこ山の熊』『祭の晩』など、何とも

いえないやさしさあたたかさ（それは時には悲しいまでに深く）を感じながら、それらをよくまぐ伝えられるかとときどきしながら読んでいます。よく間違えます。一層ときどきしますが、皆さまはそれは熱心にじつと聞いてくださっています。どなたも『チガウヨ』とはおっしゃらずに――。

今、何かを：

政岡 日枝子

最近見るともなく見ているものに『太極拳 第一歩』という本がある。それは武術としての太極拳でもなく、美しく舞いたいのための太極拳でもなく、太極気功の効能に注目してい

るからである。

健康を維持するために何をしたいか。生きるために何をなすべきか。しかし、読んでみると仲々難しい。「読んですぐできる。からだを対話する」と書いてあるけど、専門用語（中国式の読み方）などがでてきて、私の頭脳と対話してくれない。

気功には動功と静功とがあつて、太極気功は動功であつて、大河の流れのような氣を流すという。この氣の流れを理解するのが、また難しいが、練習によつて氣の存在、氣の流れがつかめるようになる。

太極拳の動きをもとにして、形だけでなく内部の感覚を大事にし、「氣」の実感を追求していくものである。動作・呼吸・イメージすることによつて、リズムと命の想いが自分の身体の中に湧いてくるのである。

地を這うような蛇の動き、天空に舞い上がるような鶴の動き、養生に関しては、人間は動物に学ぶべきだという考えは昔からあつたことであらう。

「身体と心が十分にリラックスしていれば病気にもかかりにくい。緊張しっぱなしの情報過密社会だからこそ、太極拳のような動きが最良の健康法として歓迎されるのだろう」と本は言っている。

シルクロード

三宅 保州

NHKテレビの名番組であった「シルクロード」の取材班編で日本放送出版協会刊「シルクロード」(全十八巻)は圧巻である。

特にそのうちの六巻から成る写真集は、悠久の歴史と広大なロマンを秘めたシルクロードが、迫力ある画面と美しい色彩で再現されており、テレビとはまた異なる静のインパクトに深い感銘と胸の高鳴りを覚える。

各巻頭に寄せられた著名作家の美文のごく一端を紹介する。井上靖「戦乱、災害、歳月を経て砂に埋もれ建て直されまた埋もれ、それを繰り返して今日に到った」。司馬遼太郎「この広大な沙漠とオアシスは、電磁を帯び光を放ち玉のようにかたく風のようににはかなく、人間の魂の歴史のなかでの場所である」。陳舜臣「ここを通った玄奘三蔵の息吹きを肩のあたりに感じて、感動となつかしきをおぼえた」。起点の中国は長安から終着点のローマまで幾筋ものルートには、地名を聞くだけでもわくわくする憧憬の場所が迫力ある写真で胸を打つ。タクラマカン沙漠、ゴビ、天山

山脈、敦煌の莫高窟、トルファン、楼蘭王国、騎馬民族etc. 想像を絶する自然条件の厳しい地に隊商と民族が遺した文化と歴史を自の当たりにする時、感動で震える。

私は、中国へ仕事で三回行ったが、その都度このまま長安(現、西安)に走り、シルクロードの一端でも旅したい衝動に駆り立てられた。今も時々、写真集を開きつつ、この生涯の夢をいつかは果たしたいと思っている。

シルクロードこの魂を揺するもの 保州

日本をダメにし た九人の政治家

久保 正 剣

第一章から第五章まで組上に登った人物は保革を問わず、党利私欲に走り、政治を壟断しようとする企み、「裏金」で法案を通し、談合の橋渡しをしては金を貰い、国民不在の政治が今も続いていると言っ。

金塊を隠し、無記名の割引債が発覚して捕えられた元自民党の大ボスは、「権力を握ると金が寄ってくる」と豪語して憚りなかったと言っが、その金は政治を買ったための献金という名の賄賂である。ロッキードを始めリク

ルト、佐川急便、ゼネコンと汚職疑獄は枚挙に暇がない。その他、保身のためには平気で仲間を裏切り、部下を切り捨て、派閥ぐるみで買収するなどの行為は、日常茶飯事のようだ。

良識の府に良心が無いのは、国会の証言台の証言を聞くときよい。いくら金銭感覚が麻痺していても、億単位の金を貰っていて、「記憶にございません」はないだろう。千円札をどこで落したか記憶にないのとは訳が違っ。

昔の政治家は名譽を重んじ、井戸堀になるまで私財を投じて国政に尽くしたものだ。今の政治家は金に媚びる三流ホステスのように小粒になってしまったと思っのは、私が歳をとった故ばかりとは言えない。若い人の中に立派な思想を持った粒の大きい人が必ず居るはずだ。真に国を憂えるなら「老害」に怖じず、敢然と国政に取り組んで欲しいものだ。

著者自身、悪たれ政治家だと自認し、潔く引退しているのが唯一の救いだらう。蜜行による顕示欲も否定出来ないが、正義を貫いたことだけは確かだ。

五月十日現在、ダメな政治家の殆どは辞任していない。厚顔無恥でなければ政治家にはなれないとつくづく思っ今日この頃である。

銭曇り延々続く百鬼の府

正 剣

川柳は面白いだけ

藤 井 一二三

現在、俳句作家がふえ、中には季語を無視したり、即興でとんでもない句を作る人もいます。川柳みたいな、ただ面白いだけの句を作る人が、たくさん出てきました。

数年前、「主婦の友社」から出た『各界俳人三百人』、編者金子兜太氏の序文である。

句も文も作者の分身であり、「川柳は人間陶冶の詩」と学んでいる私にとって、「川柳みたいなの、ただ面白いだけの句」には腹が立った。大人気ないといえはそれまでだが、吉川英治（雉子郎）、岸本水府、麻生路郎ならびに西尾某氏の代表句を挙げて抗議した。

旬日後、雑誌社から「再版分から訂正云々」の詫言が届いた。その時は私だけが、兜太氏の非常識さに驚くだけで済んだが、後日譚があった。

平成三年東京での、NHK学園川柳大会の際に、前述の兜太氏が「川柳という兄弟」のテーマで講演、宿題「物語」の選もされたのである。「君子豹変す」、流石に大物だと感心した。しかし壇上の氏に、割れるような拍

手をおくったであろう柳友を想像して、腹立ちと情け無さが走った。

しかし時の経過と共に、私の怒りも反省に変わってきた。俳句の会では、誰もが「歳時記」を持ち、辞典を手放さない。一方、川柳では誤字を嘆く選者の声をよく耳にする。

以前はよく本社句会で、副理事長の若本多志先生が、若い日の苦い体験を挙げ、「右手にペン、左手に辞書を」を説かれたが、最近この言葉を聞くのは絶えて久しい。その点から考えると、兜太氏の「あの一冊」は、私にとって自戒の書であるとともに、今は亡き多志先生を慕わせる書と感謝している。

なぜ？

本 本 朱 夏

友人、知人に中学の国語教師が二人いる。一人は詩人、一人は歌人でもある。彼らに言わせると私の川柳は川柳ではないらしい。

彼らの川柳の概念とは、ユーモア・諷刺・穿ちの三要素を備えた作品が川柳だと言う。（なぜ川柳をわかってくれないの？）

中学の国語教師の認識でさえこの程度。ましてや一般読者に川柳を理解していただくこ

とは並大抵ではなからう。

ここに一冊の川柳の手引書がある。昭和三十年、至文堂から学生教養新書シリーズの一冊として、麻生路郎著『川柳とは何か―川柳の作り方と味わい方』が発刊されている。

路郎は言う。「人間は生れながらにして跳くように出来ている。しかしいくら跳いてもどうにもならないことに気づかないようである。しかし私は川柳することによって、体内の悪汁を排出することに成功している。だから私にとって川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためである」

川柳という途方もない怪物に向って、「なぜ川柳なの？」と自問自答をくり返している私にとって、路郎のこの言葉は救いであり、光明であった。川柳というはるかな道程の道標として、ぜひ復刻版をと思わずにはいられない親切な一冊の本ではあった。

川柳楽書帳

大 橋 政 良

明治・大正・昭和、文壇史の証人 小島政二郎氏死去（一〇〇歳）の新聞記事が目につ

び込んで来た。四月五日のことでした。

私の手元に古びた一冊の本がある。小島政二郎著『わが古典鑑賞』（昭和十六年十二月発行）です。堤中納言物語・大鏡・落窪物語・今昔物語・かげろうの日記の豊かな古典鑑賞は、何度読み返したことだろう。今もって私の心を掴んで放しません。特に今昔物語の鑑賞は、川柳の物語性を大切に私の心に強い影響を与えてくれました。

今昔物語は短編小説の宝庫であり、この物語に登場して来るのは人間ばかりではなく、神様、仏様、禽獣、妖怪、霊鬼、天狗など、上は高貴な方から、下は土民、盗賊、乞食まで、日本ばかりではなく、天竺（インド）・震旦（支那）にまで及んでいるのが面白い。

今昔物語三十一巻千二百編の中から一つ、巻の十三第二十二話「筑前の国の僧蓮照身を諸の虫に食はしむる物語」のあらすじです。

今は昔、筑前の国に蓮照という僧あり、諸の虫を哀みて、我が血肉を施さむ一略、然る間身に蛇の子多く生入れつ一略、法華経を誦する蓮照聖人の夢に気高き僧来りて、この疵を撫ぜ給う一略、疵忽に開きて其の中より百千の蛇の子出でて飛び散りぬ、と。この空想の面白さと、美しさと…。

「わが古典鑑賞」この一冊はこれからも、

私の川柳の泉になることでしよう。

一冊の本

森田熊生

川柳を作っていると、いろいろな人から句集を頂く。自分でも一冊と思いながら、なかなか決心がつかないし、そこまでの秀句もない。

私の亡父茗人の遺句集『風之いと』を昭和五十四年に発刊したが、一冊の本を作るには大変苦労した。その亡父が昭和四十一年九月に発刊した川柳手帳『うみなり』がある。二百頁ほどの小さな本であるが、内容は深いと思う。昭和四十年中に日本海新聞柳壇に掲載された入選作品の内、一人一句以上集めている。この中には、小林由多香、八木千代、奥谷弘朗、林瑞枝さんらの三十年近い前の作品が載っている。これだけならただの作品集であるが、この後に「川柳へのいざない」として、川柳の生い立ち、古川柳の要素、現代川柳のあり方、句のまとめ方を初めて川柳を作る人にもわかりやすい文章で書いている。

川柳は文学ですが、その内容には、哲学あり、科学あり、医学あり、物理学あり、数学

あつて多様です。人間生活を詠っている川柳作品を読んで、このような見方もあるのかと教えられ、それによって読者も反省し、自分のあり方を改めることも川柳のありがたさだと思います。過去をふり返りながら、それを基盤として更に前進することを願うところに川柳のたのしみがあり、人生に生き甲斐があります―と結んでいる。

そんな亡父の「茗人忌川柳大会」も今年で第十八回となった。

第十三年度 夜市川柳

第1回	煙草	高杉	鬼遊選	6月末
第2回	朝	小島	蘭幸選	7月末
第3回	鬼	新家	完司選	8月末
第4回	手ぶら	岩内	外吉選	9月末
第5回	勘	中田たつお	選	10月末
第6回	花	天根	夢草選	11月末
第7回	サラゲ	河瀬	芳子選	12月末
第8回	蟹	原田	北涯選	1月末
第9回	的	田頭	良子選	2月末
第10回	美人	中尾	藻介選	3月末
第11回	星	橘高	薫風選	4月末
第12回	湧く	西尾	栞選	5月末

小津と笠

福浦勝晴

松竹大船の名フケ役笠智衆(りゅう・ちしゅう)の『大船日記—小津安二郎先生の思い出』を感銘深く読んだ。笠氏は、熊本県の浄土真宗のさる寺の二男で八十八歳、ボウコウガンで平成五年に他界したが、若年時に上京して東洋大学に在学中、松竹蒲田撮影所に入社、以来、月給二十五円で大部屋の俳優生活十年、努力して個性的な俳優となったが、その彼が生涯先生と仰ぎ、崇拜した映画監督の小津安二郎—後の世界の小津は、実は私の出身母校である三重県下の旧制県立宇治山田中学校の大先輩だった。

昭和七年三月、中学校を卒業した私は、浪人で映画界入りを志望、小津氏を頼って上京せんとしたが、一家を支える小学校教員の姉の猛反対で挫折した。芸能関係者が川原ものとしてまだ世間の一部から蔑視された六十年以上も昔の話。しかし、この一冊で私は自分の知りたかった映画界の内幕が分かってまことに有意義だった。

昭和三十八年十二月、小津氏は享年六十歳

でガン死したが、彼の亡き後も、笠氏は他監督の下で活躍を続け、戦後は特に山田洋次監督のシリーズ「男はつらいよ」の好演技で毎日日本映画コンクールの助演男優賞に輝いた。要するに若い下積み時代の熱と努力が実を結んだわけで、小津時代の何回ものNG(撮り直し)にも屈せず、研鑽を積んだ彼の苦心の賜物である。「晩春」「麦秋」「東京物語」「東京暮色」「秋日和」「小早川家の秋」と、小津映画にはよく出る看板女優の原節子や三宅邦子と共演したフケ役笠智衆の飾り気のない名演技の内幕に興をそそられたものである。

没法子北京

田中正坊

私にとって本を読むということは、趣味でもあり、仕事でもある。趣味とは楽しむものであり、仕事とは苦しいことで、二つの相反することを「読書」という営みの中でやっているわけで、何の目的もなく、義務感もなしに本を読めたらどんなにかいいだろうと思うが、この願いはなかなかかなえられそうにない。ただ一つの例外は、知人・友人から自著をおくられた場合である。

つい先日、東野大八氏から『没法子北京』を贈られた。見返しには

没法子 北京が還すおれの青春 著者の一句が自筆でさりげなく書かれていた。

かなり以前からその構想をあたたためておられることは聞いていたが、さて、どんな本になるかと心待ちにしていたところだったのでむさばるようにして一日半で読み上げた。いくら筆が速いと言っても、おそらく執筆に数か月間がかかったであろう労作をアツという間に読みとばしたようで、著者には申し訳ないが、この本はそのくらいのスピードで読めるし、また、読む本ではないかと思う。

著者からの手紙によると、去る六月一日に八十歳の誕生日を迎えられたという。そして若き日に酒友の壇一雄や豊田稷から「川柳なんぞやめてマジメにモノを書け」と言われた元文学青年の大八氏の「八十の声をきいてはじめてのイタズラ心」で、「遺書代りの道楽」だとも言う。

七十年、八十年生きて、人にはそれぞれ「青春」がある。著者の場合はそれが兵役を含めての満十五年の大陸生活であり、終戦直後の数か月間にわたる北京での日々に凝縮されている。そのあらすじを紹介するような野暮なことはやめ、感想の一端を記した。

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(43)

橘 高 薫 風

川柳雑誌の一〇〇号記念特集号は昭和七年五月一日発行。表紙の絵は柴谷幸二郎。マンガチックなタッチで父子が風呂に入り、手拭でタコをつくり「ヒヤアーク」と数んで温もっている微笑ましいものである。巻頭は麻生路郎の「灰皿」と題する一文で、

「我等も世の常の人々が祝賀する百という数字に対して敬意を表し、至極軽いころもちで喜びたい」と書く。これは創刊時代の数多くの同人の消息が多く不明であるにかかわらず社業は益々発展している現状に鑑み、十年一日組の尽力に重ねて敬意を寄せたものに違いない。そして創刊時の同人の名を忘れることの出来ぬ私は、喜んでいいのか悲しんでいいのか、私の眼の底には熱い熱い涙があるのみだ、と。続いて、「雑誌を出しているうちに誰でも陥る压力を私はおそれる。情力で書く原稿、それも私はおそれる。今、柳界にとつて一番おそろしいことはこの情力であらねばならない。」と書く。情力で書かぬ路郎の原稿はよくよく渋滞を来す。大の大人がい

いらして泣き出したくなり、散髪や風呂で落ち着こうとして更に癪癪玉を寢床で破裂させる。作品や文章の執筆の内容や表現に悩み抜くものだから、折折の病臥もそのせいであらうかと思わせる。しかし路郎は、心から支持してくれる多くの知己友人や、路郎のために衣食を割いて不平を言わぬ妻子、また、苦り切っても敢えて甘受してくれる同人社友を持つことに、「私は恵まれた男である」と信じ、感謝する。この年の一月十六日、路郎は神戸支部で「爆弾を抱えて来る」という演題下に、

川柳は今や危機に臨んでいると述べた。

というのは、今日川柳が漸く社会に認められて来たものの、下手をするとそこに一頓挫をきたすのは火を見るよりもあきらかで、今こそ真に自重すべき時であり、より一層練磨すべき時である。にもかかわらず川柳人の多くが現在に陶醉して何等深き省察をしなかつたならば、川柳は永久に我等の手から離れて行くに違いない。私は外部の圧迫よりも内部から来る腐敗をより以上惧れると、病軀をお

して悲痛の叫びをなしたが、私の心を知らぬ一部の人は、川柳外の話をしたと称し、見当違いの解釈から罵詈譏をあげせかけられ煮湯をのまされた。私は魂で生きる。これは常に私の口にするところである。私の主義主張を援けるために多くの同志は蹟き斃れている。それらの人々を大死させぬために私はその主義とするところを貫徹しなければ止まぬ。(中略)私は川柳を愛するが故に、やむにやまれぬ心の跳躍のために私は動きつつあるのだ。私は近く一転機するだろう。深い考察の下にそれは行わるべきであるから、今此処へは具体的に書かない。(註・職業川柳人宣言のことか)しかし、私達川柳人の一人一人が、日本の芭蕉、日本の一茶、日本の川柳にならなければならない。伊賀の芭蕉、信濃の一茶、松山の子規、江戸の川柳に踴躍したくないしさせたくもない。誰も彼も永生の句へと突込んで行くべきだ。爆弾を抱えて飛び込む瞬間の努力の尊さよりも、私は苦難を抱いて果てしなぬ幾歳月を悩み抜く勇士たらんとするものである。

百号が何処まで続くか私も知らない。私が第一の叛逆者となるか、それも知らない。が、ただ私の後継者の肩へ絶大の重荷がかかることだけは想像し得られる。

銀河系

河内天笑選

鳥取県 新家 完司

にんげんはきらいきらいとあげひばり
ちかごろのにんげんどもはなまいきだ
にんげんのにんげんころし合っている

鳥取県 土橋 螢

薫風とのんびり橋の下ぐる
親はなれ子ばなれ金のある方へ

吹田市 山本 希久子

欲しがって坂を転げたことがある
カード信じ過ぎて計算うとくなり

豊中市 田中正坊

キミはもう観たかシンドラーのリスト
セーラームーン知って孫に誉められる

八尾市 村上ミツ子

迷ってる奥には欲が見えかくれ
時どきはつないでる手をふりほどく

名古屋市 藤井高子

げんのよい話に今日の蓋開ける
攻めて来る敬語の棘がつきささり

箕面市 岩津 ようじ

永野はなんてんごいうたらあかんがな
まだ温いお骨を横に酒肴

米子市 石垣花子

忘れ物にされてしまったお骨箱
一食に負けて自由を捨てた犬

鳥取県 岩崎 みさ江

風はもう生まれ故郷に帰れない
本心は丸めた反故の中にある

米子市 林 瑞枝

ソロバン違いだった失語症になった
羨ましい八百比丘尼は若いまま

砂川市 大橋 政良

はじめが少し気になる白髪染め
手のひらで転がす玉のような嘘

八尾市 山下 美津留

逆らわぬ妻だがいつも火種抱く
華やかな暮しへローン纏いつく

泉野市 河原崎 礼子

黒雲をすっぱりと切る稲光
雲走るわたしも走るにわか雨

和歌山市 堀畑 靖子

遅すぎた出会い人生とは皮肉
悲しみの席でシツクになる真珠

倉吉市 最上 和枝

無駄ですが皺とりバックしています
何時からかブレンド米と仲良しに

松原市 小池 しげお

先輩を追い抜いていた禿げ具合
診察を待つ間にノドの骨がとれ

鳥取市 岩原 喬水

城跡のさくらカラオケ聞き飽きる
はのぼのと患者同士の思いやり

鳥取県 鈴木 公弘

とつぜんに笑う娘がひとりいる
女房の二つ返事が珍しい

笠岡市 松本 忠三

妥協して垣根に風を通しとく
妥協して垣根に風を通しとく

鳥取県 さえき やえ

新入社もう読んでるトラパーユ
わたしだって通ってみたいものの道

和歌山市 楠見 章子

能面の裏で泣いたり笑ったり
能面の裏で泣いたり笑ったり

岡山県 福原 辰江

凡ミスが続くぐつすりねむらねば
凡ミスが続くぐつすりねむらねば

和歌山市 細川 稚代

五月某日 菜の花百万本のなか
五月某日 菜の花百万本のなか

流山市 神田 治

先生と呼べば四五人ふり返り
先生と呼べば四五人ふり返り

兵庫県 遠山 可住

男はんの嘘へにつこり倍返し
男はんの嘘へにつこり倍返し

大阪市 三浦 千津子

ありがたい外米仏様にあげ
ありがたい外米仏様にあげ

神戸市 向井 泰子

寝屋川市 坂上 高 榮

証文を破って自由かみしめる

鳥取県 植田 一 京

父の日は母の日ほどにパツとせす

鳥取県 乾 隆 風

ゆらゆらと燃えて火刑をまつ女

茨木市 堀 良 江

丸う丸うそれで渡れる世間なら

和歌山市 福本 英 子

無傷なのが一人もいない久しぶり

鳥取県 上田 俊 路

人間の終りにもあるランク付け

柏市 上鈴木 春 枝

吠いた無理があつさり認められ

八尾市 村上 剛 治

迷いからさめたか友のでかい声

今治市 渡辺 南 奉

起承転結どの辺かなあ五十歳

鳥取県 土橋 はるお

泥田から曾祖母さんの櫛が出た

鳥取県 土橋 睦 子

ラストまで踊ったことは言わないで

鳥取県 田村 きみ子

腹割って話す時間を下さいな

海南市 三宅 保 州

一つしかない椅子だからしがみつく

鳥取県 江原 とみお

一悶着起きそうな風連れてきた

枚方市 濱田 良 知

ありがたい話に何故か出るあくび

岡山県 伏見 すみれ

屋根からの日の出ばかりを見て暮らし

岡山県 江口 有一朗

騙された方が馬鹿だと諦める

大阪市 中橋 恵美子

病人に励まされてる五月病

米子市 小谷 美ツ千

恋人よわたくしだけを好きになれ

米子市 金山 夕 子

容赦なく叱ってくれる友がいる

米子市 茂理 高 代

先を読むと不安になるからよそう

鳥取市 西原 艶 子

わたくしの背に温い風寒い風

和歌山市 池永 正 雄

マンションは蜂 地下街は蟻になる

唐津市 山口 高 明

転勤へ妻も娘も従いてこぬ

姫路市 北条 てる代

口裏を合わせたところがほころびた

和歌山県 杉山 精 子

耳打ちを信じる程は若くない

米子市 小西 雄 々

スパイスを効かせ一年無事に越す

青森市 工藤 甲 吉

人間の言葉で犬を慰める

倉敷市 田辺 灸 六

愛のない人はどうにもなりません

鳥取市 春木 圭一郎

みえすいたお世辞それでも礼を言う

和歌山市 田中 み ね

病む姑へ特効薬は思いやり

八尾市 大内 朝 子

つまりけば支えてくれる嫁がいる

今治市 月原 宵 明

古希すぎで三病ぐらい友とする

羽曳野市 酒井 一 壺

息を抜くコツを覚えたアルバイト

岡山県 富坂 志 重

価値観の違いに親子の声尖る

香川県 川崎 ひかり

拝啓も前略もなし金送れ

旭川市 朝倉 大 柏

一枚のハガキを母は嬉しがる

五所河原市 斉藤 荔

種粃の芽が出てくれてはつとする

鳥取県 谷口 次 男

王様がひとりこつそりグイエット

鳥取市 近藤 秋 星

人形がしゃべりたそうに目を開ける

川西市 氏林 洋 敏

旅に出て地球の鼓動聞いている

羽曳野市 福田 悦 子

隣からトラが勝ったと言うてくる

八尾市 片上 英一
黄昏であふれんばかりコップ酒

唐津市 市丸 晴子
ハウスからCD流れいちご肥ゆ

西宮市 奥田 みつ子
おだてられ石にも羽が生えてくる

海南市 谷口 義男
寿命より貯金が先に音を上げる

寝屋川市 後藤 黎之助
気配りがとてもうれしい齢になり

東大阪市 今岡 貞人
朝を出る靴に軽い日重たい日

八尾市 高橋 夕花
あじさいのどの彩もよし平和主義

米子市 光井 玲子
声のつや餡をしゃぶって出せるなら

大阪市 榊本 露児
悲しいね君は頭が良すぎるよ

寝屋川市 平松 かすみ
買うつもりない建売りをほめておき

香川県 木村 あきら
残り福そんな期待は甘すぎる

今治市 野村 清美
かなしさを越えたと涙涸れてくる

堺市 高橋 千万子
人並みと言える定規の当てどころ

阪南市 深日 白光子
分岐点をどこに仕合せ不仕合せ

綾部市 藤田 芳郎
一升瓶が三日で空いた目分量

米子市 青戸 田鶴
酸欠の街にもつばめやって来た

岸和田市 田中文時
見る位置で高さかわるツインビル

河内長野市 水谷 正子
延長戦終電までに片付け

和歌山県 中後 清史
少し欲が出てきたらしい通知表

姫路市 大原 葉香
満杯のダムには期するものがある

大坂市 一本 勇太
井の中の蛙幸せかも知れず

鳥取市 美田 旋風
手に入れた椅子が早くも狙われる

今治市 越智 一水
耕せば子雀虫を食いに来る

横浜市 菱田 満秋
もてあます我が身悠々自適とか

今治市 矢野 佳雲
この齢まで生きた手相を侮るか

羽咋市 三宅 ろ亭
植物の無言の声を今朝も聞く

熊本県 高野 宵草
芹もない小川に変えた排気ガス

出雲市 竹治 ちかし
成行きで結ばれ成行きで別れ

宇部市 中村 三良
百計に溺れて初心見失う

弘前市 佐治 千加子
武家屋敷外人さんと切るシャッター

寝屋川市 岸野 あやめ
入試ミス塾の教師に指摘され

姫路市 本城 よし子
衣替え庭の若葉に教えられ

和歌山県 木村 初子
産声に早や天性のリズム感

鳥取県 林 露杖
一つずつ欲諦めるお経読む

岸和田市 古野 ひで
月並の夫婦にもある幾山河

姫路市 黒田 とよの
一言に安らぎ貰う古い二人

藤井寺市 高田 美代子
山頭火気取りで飛鳥路の風と

青森市 漆戸 凡凡子
田植えが済んでお天道さま拝む

香川県 辻上 よしみ
継ぎはぎの小つちやな夢を縫い合わす

寝屋川市 籠島 恵子
訂正をしたい噂が流れてる

大阪市 藤田 頂留子
気にしてることほめられて面はゆい

西宮市 西口 いわゑ
一言が言えないでいる傘の中

大阪市 松尾 柳右子
金だけを当てにされてる親馬鹿で

米子市 澤田 千春
納得のゆくまで海と語り合う

寝屋川市 堀江 光子
車から軽く会釈の出世ぶり

尼崎市 春城 武庫坊
一つ聞き一つ忘れて恙無し

大阪市 北 勝美
子の成長筋の通った口ごたえ

兵庫県 倉垣 恵美
面構え田んぼの中の蛙にも

鳥取市 杉本 孝男
うちの母 隙間だらけで慕われる

和歌山県 村中 悦男
二人して蛙に憩えば若葉風

羽曳野市 吉川 寿美
ナタデココ噛んで暑さを乗り切ろう

大阪府 板東 倫子
雛壇に未熟な大臣の顔並ぶ

和歌山県 山田 高夫
ぼっくりと死ねたらなんて老いの嘘

鳥取県 石谷 美恵子
梅干でたいがい治す医者嫌い

有田市 松井 かなめ
赤い糸すり切れたのか波長ずれ

八戸市 島田 昭治
あの角を曲がればひょっこり会いそうで

大阪府 本間 満津子
他人の批評するのが趣味の情報魔

和歌山県 山口 三千子
適当にごまかしておく勘違い

和歌山県 青枝 鉄治
初登院汚職しそうな顔でない

兵庫県 玉田 三重
石鹼の匂の好きな朝の空

和歌山県 山根 恵美
とつときの話と小鼻ふくらます

熊本市 遠山 夏生
ネクタイに一時凝ったことがある

和歌山県 宮口 克子
目と鼻の先で逢うてはならぬ人

鳥取県 橋本 孝原
頑固一徹通しみんなに認められ

和歌山県 森口 恵子
純粹に生きて生傷絶え間なし

香川県 新川 マサエ
叱られて逃げ込む祖母の膝がある

鹿児島県 大山 舞鳥影
散り際も椿桜に脳死まで

唐津市 野田 旭恒
盂蘭盆会灯影ユラユラ戦友還る

唐津市 山門 幸夫
みどりの日しやくなげ一本買ってきた

高知県 赤川 菊野
晩運を信じて耐えることに慣れ

大阪府 町田 達子
晩霜の子報気になる稲の出来

岸和田市 三輪 通彦
ペットにも救急施設出出来ない

広島県 田村 新造
飲み放題ですが元など取れぬ歳

守口市 結城 君子
懸賞金知っているのか競う馬

米子市 田中 亜弥
水族館の魚に睨みつけられる

仙台市 川村 映輝
脚腰を鍛えてくれる歩道橋

弘前市 中山 雅城
骨肉の音が聞こえる砂被り

川西市 松本 ただし
連立の積木を崩す蟻の穴

箕面市 椎江 清芳
火をつけぬ煙草をいじる禁煙車

川柳塔社常任理事会 (6月1日)

▽東野大八著『没法子北京』の取次を川柳塔

社でも行い、普及にあたることを決定。

▽誌寿古希記念合同句集の参加が多数に上り

発刊が予定よりやや遅れることを承認。

▽川柳塔碑基金の現況についての報告があり

次回に成案を作成することとする。

▽今年度同人総会の会場について検討。

荀香のむ 八木千代選

親捨てる同じ軽さよ紙コップ

和歌山市 榎原 公子

宴は終わって客を見送り、座布団を片付けて、まだまだです。汚れた皿小鉢を流し元まで出さなくては。ひとりで後始末する訳ではないけれど、自分もいっしょにはしゃいでいただけに、まあこの山積みみの洗い物。主婦のしごとは延々と、それこそキリがありません。ここで強力な味方が登場します。曰く、缶ビール、お手軽なカンチューハイ、ジュースもお茶も缶、ビニールバックのおつまみ割り箸と。そして極め付けには乾杯からどの飲み物にもさんざ世話を掛けられた紙コップ、飲み残しの液体が底に澱んでいるのも哀れです。あっさり捨てられればくしゃくしゃとご用済みの残骸を曝します。否応なくです。ここでふっと、指がためらうのは、さつさと家を離れたあの頃の自分。所詮、親というものの因果はいつか子に捨てられるために育てようなものと、一瞬の思考です。ごめんね。おとうさん。おかあさん。

としやぶりの傘の中から招かれる

大阪市 北川 弘子

この数年、弘子さんの活躍は川柳作品はもとより評伝作家として輝くばかりの存在でした。もちろん意欲も注がれていられたようで、たまに逢う機会があつて、お話していても、痛快と感じるほどの接点があつて、こんなに打ちこめるのは才能もさることながら、余程の精神的支柱があるに違いないと。いつも光る印象ばかりでした。「日々濃ゆし若葉に夫を捕られたり」と二句目にあります。「お祭りに溺れて家が流される」と続きます。さあ大変、これは只事ではないと案じて続けていまして、ご主人は手術をうけられたとの報、幸い結果も経過も良好とのことですが、切羽つまつた事実を匂にしながらぐつと抑えた書きぶりがよけいに痛々しいです。頑張ってくださいね。

わたし一人をこらす位の自信なら
胸底の島と健気に生きている
ひとかわを剥いたら傷だらけのりんご
ぼろつと落ちるトマトの種の白々し
何も彼も雨が上がつてから話す
砂を吐く貝に失望してしまつ
いつまでもうまくならない愛し方
風の笛 立往生はさせまいと
鬼になるなんと楽しいことばかり
どうであれ芯は真面目に回さねば
お寺さんのゆたかき光燦々と
ここ久しく居眠りしるる薬指
ぼつりぼつり老母が教えてくれたこと
好きな花少うし毒を持っている
幸せはこんなに水がまだ旨い
どこかがほんとに私問い糺す
蜘蛛ならばぐるりと糸でせめるかも
夕映えの向こうの明日をのぞきたい
マーガレットよ その純白は誰がために
ないものをねだつて旅がまだ続く
白い花描いて白さに憧れる
あれは何 耳はあらしにおそわれて
対岸の大きい桜だけ咲かず
落椿何に抗い首を振る
独りのわたし残して金魚死んでいる
生き方を変えれば何か変わる筈

堺市	板野 美子	和歌山市	田中 輝子	堺市	横田マリ子	米子市	石垣 花子	島根県	松本 文子	大阪市	西出 楓楽	米子市	政岡日枝子	西宮市	西口いわゑ	米子市	足立由美子	尼崎市	春城 年代	名古屋	藤井 高子	和歌山市	古久保和子	米子市	野坂 なみ	鳥取県	石谷美恵子	西宮市	牧瀬富喜子	香川県	高橋 たみ	茨木市	堀 良江	和歌山市	玉置 当代	和歌山市	桜井 千秀	八尾市	高杉 千歩	枚方市	森本 節子	寝屋川市	森 茜	西宮市	秋元 てる	大阪市	日阪 秋子	和歌山市	宮口 克子
----	-------	------	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-----	-----	-------	-----	-------	------	-------

生まれた森に帰りたくなる風みどり
敬遠のボールは投げなかつた自負
足もとの闇につけ入る水の嵩
老いていくあかしのようによく転ぶ
許すとはなんと気持ちの良いものか
風景をかえてもひとはひとりなり
好運を掴む片手は空けておく
むらさきの煙ひと筋 誰が文ぞ
私がわたしを騙す日に疲れ
矢印を辿ってお辞儀して帰る
沈黙がいい木々のささやき聞けるから
死んでなお生きた振りする乾電池
聞こえない耳へにつこりして上げる
かなしみの順に染まっていた雲
前後裁断忘れ上手に生きてみる
水の音火の音明日を生きてみる
指切って血はまだこんな奇麗な色
明るいうちに屋根を点検しておこ
うたた寝を叱ってくれる人がない
今日明日でないが決めねばならぬ事
人ひとり行方知れずの椿谷
それぞれの小説を持つ敵味方
駅までを超特急で走る癖
花しようぶ恋には遠き人という
初な娘に週刊誌など差し上げて
鬼の背に仏もきつと住んでいる

和歌山市 堀畑 靖子
柏市 上鈴木春枝
倉吉市 淡路ゆり子
鳥取市 西原 艶子
藤井寺市 高田美代子
八尾市 宮西 弥生
西宮市 奥田みつ子
弘前市 一戸 ツネ
堺市 高橋千万子
米子市 新 正子
貝塚市 池田寿美子
和歌山市 和田寿美子
米子市 金山 夕子
富田林市 片岡智恵子
和歌山市 山口三千子
羽曳野市 吉川 寿美
西宮市 門谷たず子
米子市 寺沢みどり
和歌山市 細川 稚代
寝屋川市 堀江 光子
出雲市 石倉美佐子
米子市 中井 ゆき
寝屋川市 宮崎 菜月
八尾市 高橋 夕花
大阪市 松尾柳右子
米子市 木村 春枝

よい出会いでしたね亡姑の一里塚
花ごろもおろかに人を信じけり
やがて朝小さな夢は手放せぬ
ひとふきの淋しい葡萄まだ熟れず
紫陽花が自我にめざめる細い雨
おぼろ夜に遠ざかるもの引きよせる
耳のあるつばみ足音待っている
悪女よと呼ばれて生じた子がふたり
組のくぼみは過ぎた日の長さ
身の程を忘れて藪に米を捨て
おまけして貰った金魚はかないの
迷ったら花の香りにきいてみる
葱坊主 競う心はさらになく
母の手をすり抜けて行く夏帽子
ようやると我を励ます独り言
四捨五入いつもはみ出す私です
幾山河 母には母の返し針
子育てに狂いなかった子らの愛
細紐に母の手垢が生きている
安らいで老いの極楽 今此処だ
花を売る女二人も美しく
粽食う手付きはおなじ兄いもと
素晴らしい花のトンネル母が逝く



投句先 〒683 米子市花園町14-8

和歌山県 小倉 アサ
弘前市 佐治千加子
米子市 青戸 田鶴
和歌山市 野々 圭子
愛媛県 久保 良子
米子市 白根 ふみ
堺市 山本 半銭
寝屋川市 岸野あやめ
宝塚市 丸山よし津
米子市 林 瑞枝
有田市 松井かなめ
八尾市 村上ミツ子
出雲市 園山多賀子
今治市 野村 京子
大阪市 本間満津子
和歌山市 森口 恵子
寝屋川市 籠島 恵子
姫路市 丁坪サワ子
和歌山市 山根 恵美
米子市 服部 朗子
神戸市 向井 泰子
守口市 結城 君子
青森県 富士 トキ

八木千代

葉

茂見よ志子選



若葉の頃迎えに来ると言つたまま
目に青葉 心は春の風に酔う
森林浴 緑のシャワー浴びに行く
青葉萌え邪心持つ身を恥じて見る
クローバーの四つ葉探した少女の日
凄く 辛い 葉わさびの一夜漬け
紫蘇の葉の赤さに母の愛がある
葉脈にいのち流れている春だ
葉隠れに今年のみかん粒がよい
大根の葉の効能を今日も聞く
よもぎ摘みせっせっせと母のあと
葉桜の道で誓って征ったきり
催促の葉書尖った文字で来る
地下街の木の葉をそつとたしかめる
葉桜に顔染め手話の二人連れ
さりげなく他所の落葉も寄せて掃き
川に浮く葉の一枚に似た余生
目に青葉二つ三つは若く見せ
愛情を鉢は素直に葉で応え
葉脈のような血管透かし病む
わくら葉を燃やし残り火かきたてる
葉桜に春爛漫の過去があり

さち子 旋風 正坊 高代 美代子 螢 よし津 落児 多賀子 悦男 泰子 達子 風云児 高江 良栄 英千子 博友 高夫 宵草 倫子 圭一郎 洛醉

若葉キラキラそぞろ歩きの手を重ね
葉桜がすむと出稼ぎ北を向く
一葉の葉に残す片思い
逢えぬまま葉風鳴る日の道急ぐ
じじばにもみじに掌託す共稼ぎ
針葉樹妥協嫌いの気の強さ
枝葉末節 こんまい事は言うでない
保護色の葉に青虫の生きている知恵
針の葉に敵意を見せる一位の木
枯れ葉色になって世間が見えてくる
葉桜はピンクの夢を語らない
落葉掃くやがて私も地に還る
落ち葉はらはら計の便りまた一人
男手の菜つ葉料理の粗っぽさ
葉桜に染まる散歩の車椅子
佳

夕子 雄々 哲恵 玉恵 花匠 白光子 寿美 清史 雅城 希久子 虹汀 重人 愛論 晋 明水 俊子 宵明 正子 善保 杜的 門谷たす子 軸

行く川に乘れず枯葉にある惑い
地 枯葉カサコソ時は冬へつづく道
天 葉すれの音をし母かとのぞく夕月夜
庭園のとなり落葉を掃く日課

配 る

川竹松風選



通彦 四郎 ちよ 加恵 ミツ子 螢 宵明 清雲 佳子 三千子 次男 達子 よし津 ひでの たす子 正子 倫子 公子 雅城 白光子

芽の出ない女が配るチョコレート
手掴みで配り文句を言わさない
縄のれんころ配りで丸く酔い
郵便の配達を待つある期待
配膳に女将鋭い目の配り

幸せを配る神様にも落ち度

気配りが過ぎてコーヒー冷めている

気配りの未だ衰えず母は古希

ここだけの話を配る罪な風

お赤飯配る佳い日待っている

気配りの一つひとつに人間味

目配せ一つピンとくる呑み仲間

気配りが過ぎて誤解の風が吹く

お土産を配りようやく旅終る

気配りのリーダーがいて輪が温い

佳

駅前でお金を貸すというチラシ
気配りが過ぎて自分を見失い
黙ってる気配りずっしり胸を打つ

アルバイトちらしを配る無表情

善人が配ると自分の分がない

人

幸せを配る役なら引き受ける

地

気配りの言葉の中にある温み

天

咳ばらいては気配りの声になり

軸

隣へも配れと届く里の幸

ページ

河内月子選



青春のページを埋めた悔いと恥
若い日記どのページにも金がない
色褪せたページの中に僕が居る
寸劇のページが終りピエロ消え
飛ばし読みスピードだけは一番だ
美しいページばかりで飽きてくる
終焉を飾るページはバラ色に
夫には見せぬページを持っている
妻と母のページ書き分ける

青春のページ軍歌で埋まってる
この辺でねむったらしい本の皺
ばらばらとめくるページはあてがなし
あと何ページあるかと見てる大あくび
歳時記の春のページが忙しい
このページ妻が読んだら怒るかな
古いページの中に消したい傷がある
このページにいのち燃やしたい古い杜史
ページ増え新聞代が高くなる
このページほどで眠気の文学書
三ページほどで眠気の文学書
人生のページ 今日入社式
赤裸々につづるページに酔っている

あずま 博史 喬水 雄々 次男 南奉 杜的 たず子 昭子 彩子 良子 満秋 佳雲 豊島 俊子 義美 三重 甚一 仙恵美

その昔父にそむいた一ページ
和解したページ甘実なるころ
かびが生えぬようにページを練っている
生き下手を記す一日一ページ
素晴らしいことだけ書いて置くページ

感動のページ暗誦してしまふ
日に何度老化防止のページ繰る
めでたしで最後のページ飾りたい
長男がパパになったと書くページ

よしみ 英壬子 保州 蛭 しげお 艶子 武史 朝倉大柏

初歩教室

題一満足

吉岡美房

投句は、はがきで3句直接私宛お送り下さい。毎回一句だけという方や三句とも同想の句という方が居られます。句想を広くして深みのある句を作って頂くようお願いします。

満足度中位にて分を知り 静枝

(中程の暮しで知った満足度) ミツオ

満ち足りた余生に幸せかみしめる 泰子

(満足の余生二人で噛みしめる) 知香子

満足の味にととのえ老いの卓 八重子

(満足の夫の味にととのえる) ツネ

老二人長所温めて満足し 姫女

(満足は長所温めて老い二人) 満足

羽根布団敷いて今宵は満足だ (羽根布団今日の満足抱いて寝る) 満足

満足もあなたとわたし違います (満足の基準あなたと違いすぎ) 満足

満足の新居で主婦は出てばかり (満足をして新居で妻出好き) 満足

湯の華で満足祖母の家庭風呂 (湯の華の風呂で満足してる祖母) 清美

筋一本通した父は満足か 孝原

(満足の父は一本筋通す) 幸枝

子は満足夫は小鉢の酒のあて (満足な夫の顔に酒を注ぐ) 宅

満足にほど遠い道二人連れ (満足じゃないが二人にある希望) 絢子

一本の銚子で満ちる父の老い (父の老い銚子一本満ち足りる) 春風

歌舞伎見て満足して父帰る (父老いぬ歌舞伎ぐらいで泣いてくれ) 幸雄

満足だ笑みをもらして逝った父 (満足の笑みを残して父は逝き) 志華子

豊かさに馴れて満足度を忘れ (豊かさに馴れて満足忘れられ) 克美

満足のいかぬ夫婦で別れない (満足な妻ではないが頼られる) 隆

生来の五体満足それでよい (父となる五体満足だけでいい) 忠男

呑むだけで満足をした子の寝顔 (育つ子に乳房ふくませ満ち足りる) 三津子

授乳終え満足そうに吾子が寝る (満ち足りて乳房ふくんで寝てしま) 満足

満足に歩けぬまからよく喋り (満足に歩けぬ口がよくまわり) 満足

満足に歩けぬ口がよくまわり (満足に歩けないのに口達者) 満足

満足に歩けぬ孫の口達者 (満足に子育てできず悩み込む) 満足

満足を望み子育て行き詰まり (満足に返事も出来ずに不貞腐れ) 満足

満足な返事も出来ず口答え (満足はできぬが俺に似た息子) 満足

満足は出来ぬが息子期待する (満足に仕事をしない口八丁) 満足

満足に仕事をしない口八丁 (満足な仕事口ほどしてくれず) 満足

満足に出来た料理の一人膳 (満足に出来た料理と思ってる) 余り

余り物食べて満足してる母 (残り物食べて満足瘦せられず) 満足

満足に違いはないが欲はある (満足と思うが欲は捨てられず) 満足

満足をしたくて夢の続き追う (満足を追いかけて夢を見つづける) 自己

自己満足上見てきりのない暮し (あきらめてみると満足見えて来る) 毎日

毎日が達者達者で満ち足りる (健康な日々をもらって満ち足りる) 満足

満足に生きた喜び知れと言う (満足に生きた仕上げの大ジョッキ) 一日

満足を生きた仕上げの大ジョッキ (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を生きた一日満ち足りる (満足を生きた一日満ち足りる) 満足

満足を達者で老の坂くだる 美恵子

(老いの坂下る達者に満ち足りる)

雨露をしのげる家で満足す ふゆ子

(雨露をしのげる家で満ち足りる)

満足を知って冥土へ一人旅 圭二

(悔いのない人生だったデスマスク)

満足感味わいつつも文句言ひ 美寿子

(尽きぬ欲満足感のない暮し)

衣食住足りた世に不満あり きぬ

(衣食住足りて何かが物足らず)

満足にまだまだと深追いし りつえ

(深追いをして満足を知らず生き)

自己満足するまで庭師松眺め 一乗

(満足をするまで庭師松を見る)

職人肌満足作をいとおしむ 園幸子

(職人の満足作の希少価値)

満足のいくまで辞書を引いてみる 侑里

(満足のいくまで辞書を引く句作)

満足です今年の無事に新茶のむ 由正子

(満足な新茶の出来に酔う家路)

碁で負けてこうで勝って中満足 真一

(満足に大中小のある暮し)

肩書きをほしがりもせずくれもせず らくだ

(肩書きの取れた気儘に満ち足りる)

ほどほどに満足しよう戦友偲び 幸夫

(ほどほどの満足以よし戦友偲ぶ)

満足を買ってやれずに娘の嫁ぎ 旭

(満足は荷物じやないと娘は嫁ぎ)

満足の小さなボツケ持つてます 桂子

(満足を溜めるボツケを母は持つ)

小花咲く猫額の庭満足す 三重子

(四季の花咲かす庭あり満ち足りる)

満足のゆく言い訳がなく黙る 恵子

(満足な言い訳出来ず負のおんな)

物指して計って見たい満足度 タミ

(物指して計れぬものに満足度)

ありがとうの一言で母満ち足りる ひろ子

(ありがとう日々満足の母達者)

含願の遍路の旅よ満足だ 仲弘子

(満足と感謝で辿る遍路道)

ハンサムで五体満足だと聞いた 瑠美子

(母になり五体満足聞く至福)

着想・表現ともに立派な句

我が道を飾る叙勲に満ち足りる あずま

中流で暮す我が家が満ち足りる 芳水

うなずいた顔が満足していない 孝男

素うどんで満足財布独り言 行子

産卵を終え満足の鮭沈む 半畳

二人ならその日暮しも満ち足りる 辰男

タンポポで満足孫のネックレス 志重

合掌の指は八分で満ち足りる 芳郎

満足にきりなく今をありがとつ 義子

食べる時妻の満足そうな顔 よしみ

満ち足りて送り出されるハネムーン フク子

指折って出来た作句が不満足 嘉子

満足と言える暮しはないものだ 郁子

満足に返事せぬ子ののど仏 備章子

遣らずの雨男冥利に浸ってる さち子

孫が来て阪神勝った父の顔 たもつ

満面の笑みをたたえて着地する 一壺

満足感上手にキャッチして暮す ふさ子

満足のフィナーレ飾る紙吹雪 碧

満足に豆腐も切れず嫁に行き 瑠美子

満足な父ではないがひとの親 黎之助

特売を追いつ満足を買いに行く キヨエ

満足は皆勤賞というメダル 春枝

たつぷりと母乳を飲んだ児の寝顔 高栄

満足が肩組み合って出る屋台 武春

満ち足りた今日に感謝の幕おろす 君枝

満ち足りた身へ足払いかけに来る 恵美

戦争がないただそれだけで満ち足りる 彩子

私の句

満足を辞書から消して挑戦者

外米で十分元氣生きている



題「理解」—7月15日締切(9月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔みちのく

小寺

花叢報

仏壇の母に捧げるカーネーション
ハスキーな枯葉にもろい後れ髪
鯉のぼり千尾泳がす村おこし
子育てが終ると無遊病になる
本家より少し低めに鯉のぼり
母の日や娘が母になる報せ
襪背負う雑魚のひとりは覇者の夢
物事に動じぬ人の目が違ふ
濡れ落葉妻の座ビタリ引き立てる
難儀して山に開基の師を恨む
またBへ就職変えた右左
白髪抜く妻は母の日だと知らず
母の日も母によく合う割烹着
どの花も良い母の日に母が抱く
母の日もいつも野良着の母でした
偏差値と横一線の鯉のぼり

川柳たけはら(前月分)

森井

青居報

春だからシレンとちようちよのツーショット6千枝

春風にさそわれ君に逢いにゆく
蕾たち中学生になるんだね

護摩供養 一日だけの信者なり
かくれんばいつしか鬼が一人きり

海三代 家紋がじつと見つめとり
無罪放免なかなか孫はしてくれぬ

亡き夫の誕生日です句を供え
軽々と助言は出来ぬ娘は一途

養命酒 晩酌気取りしてうまい
青い芽に話せば明日が見えそう

茶柱へ好い事あると一人決め
遺伝子を残せないの句誌残す

不景気は言わぬ家族の温い膳
メーキャップのいらぬ祖父の役貰う

瀬戸内の海の恵みに旬の牡蠣
眩しいな若さとスニーカーの白

中年の哀しみを知らぬ靴の音
バレンタインだった二つの妻のチョコ

朝の風呂湯治に行った心地にて
風の彩しかり見たぞ娘の佳き日

威厳持つ古刀に心論される
米櫃も気象予報が気になる

入学の孫が年金待っている
指の棘探してくる家族の目

不言実行豊かに繁るくすの木よ
外米の味を仏に問うてみる

予定などお前もないかたつむり
こんな時 女するとい事言う

友見舞う話が出来てはつとす

中2史子

蘭幸子

笑子

比呂子

美佐雄

現代

ヤスエ

汎美

麻代

浪子

正宏

喜久恵

蝸牛

夏喜

千代美

喜美子

厚子

房子

一路

清水

淑子

栄恵

臣子

静佳

静風

貞子

千里

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

ひとり飲みひとりで休む風の中
もつれ糸ほぐす老母には休みなし

連休の終ったあと五月病
の寺休みやすんで老いの足

ほめ言葉肥料になって子は伸びる
ホームラン打って手荒くはめられる

子育てへはめる言葉が芽を伸ばす
褒め言葉丸めた嘘も少しある

人ほめてほめて陽の目へ送りだす
フランスを振っているのは何の種子

ナタデココ種の由来を聞きもらす
たね袋さらさら息吹く音がする

晩年を自分に生きる種をまき
菜の花の種しつかりともらい受け

地に伏して時をうかがう種の意地
蝶の舞う夢を見ている花の種

一粒の種があしたを抱いて乱
一晚で覚えた文句出てこない

文句いらぬ酒は楽しい飲むが良い
一言の文句が乗せたローカル線

文句言わぬ仏の花が枯れている
文句なく捨てたところある紙コップ

文句言う相手が居なくなつて寒
不景気はよそ事のように成田発つ

よそ事でないかわかつた日のショック
恍惚の姿に我が身だぶらせる

つれなさはよそ事でない影を曳き

洋風

一子

春子

勝美

夕花

春堂

朝子

登之

欣之

柳伸

隆

たもつ

美津留

和樹

度

美幸

和子

信博

恭昌

かつみ

透太

森子

祥一

頂留子

ますみ

弘直

切られるのはバラだと思ふかすみ草 シマ子

城北川柳会

吐田 公一報

定められた時間にのりと長すぎる ふみ

灰皿の紅に刑事があわてだす 静子

白紙にはあふり出したい文字が見え 秀夫

内緒ごと何処で洩れたか社の人事 春蘭

朗々と読むは白紙の勧進帳 史風

反対はするが心は許してる 昭子

欲しいもの知ってたような贈り物 満津子

団地窓メザシのような鯉のぼり 頂留子

好奇心ブレンド米も炊いてみる 登美子

食後には灰皿そっとくれる妻 久留美

娘に贈る言葉はいつも平凡に 典子

墓詣り無垢の心になつてくる トヨ子

是々非々というおだやかな反対派 ただし

自画像を画くには紙が白すぎる 白峰

少年のころつかめぬ反抗期 一枝

平成の平和を破る米不足 あい子

反対も居て慎重になる会議 達子

日本から明治の気骨消え失せる 倫子

うどんなでもパンでもあると慌てない 政子

繕いの母の針先まだ達者 柳影

反対の意見じつくり聞くゆとり 公一

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

ランドセル背負う蕾へママの夢 夢之助

咲き誇るバラに妬心の矢を放つ 鹿太

桜咲く我が家の春はポストから 幸代

諦めた夢そこかしこに咲きはじめ

師の句碑に咲いてこぼれるハナミズキ

諦めのポーズに少し媚がある

旅の宿諦めましようと月を見る

裁かれた追及はげし記者の席

コーヒー館出ると若葉の匂う道

運転手へコーヒーおくる長い旅

春麗な娘運ぶコーヒーいい香り

ほろ苦い味で目ざめるモーニング

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

人指し指が動くときつと何かある

罪抱いた指でコンバクトを開ける

太腿をつねった指を嬉しがり

はつれ髪指でかき上げ寡婦の意地

真珠には縁なき妻の太い指

指切りのお指が出来ない三角形

手をつなぐ事が出来ない三角形

無農薬を誇る我が家にある形

体形を気にして婚姻遅らせる

形だけ真似て奥儀が掴めない

外形を保ち疲れた鬼瓦

形ばかり粋がつている抜け殻よ

蛙の子見様見真似で蛙を塗る

融通のきかぬ蛙が跳ねたがる

子蛙が海の広さをあこがれる

大学を出ても蛙は蛙の子

地蔵さんと同居しているひき蛙

馬飛びが上手になった蛙の子

ミサ子

弘治

尚利

美々

十四郎

紫香

定人

向西

勇次郎

桂子

たつみ

茂美

多賀子

房々

雄々

満江

きみえ

米子

清子

与根一

友子

清志

邦代

早苗

螢

鶴丸

静江

五体満足その産声に父となる

満足に言えず笑顔で勝負する

満足が出来ず指折り繰り返す

満足ですこぶるぬい春の午後

満足を通り越して不足言う

満足をした足音で子が帰る

ひと言も言わず耐えてる不発弾

ひと言も言わなくなった反対派

ひと言の温いことばに命かけ

ひと言も返さず夫は出たまんま

ひと言の重みしっかり受けとめる

ひと言が過ぎてもつれて来た絆

川柳ささやま社

酒井 靖子報

出会う度まるくなつて紺碧の海

とよ子

佳句地十選 (6月号から)

岸野 あやめ

花びらがひらひら誰の手に落ちる

無理をした鬼が過労死してしまう

米ビツの底がこれほど浅いとは

暫れた神も迷惑してるのだろ

地図のない山が出てくるので怖い

円満と勝手に決める近所の目

言葉まずしく胃袋は吹き出し

怒つたらあかと医者に言われとる

折詰の残りで幹事呑み直し

鉛筆で書く信じて貰えない

鳳笙

畔

知恵子

長三

静恵

午朗

太泡

義良

蘭水

芳枝

みえ

町紅

靖子報

とよ子

いゝ

文秋

祥司

千代

かつみ

薫

碧水

鳳笙

昭子

乾し草の匂が甘く亡夫を恋う
諦めかもう禁煙をすすめるない
娘のお尻だけはやりわり草しとね
紙一枚汚して人が裁かれる
古傷が燃えたがってる火消壺
もう泣かぬ亡母の煙が星になる
指切りの指が出会いを確かめる
煩惱も修羅も紫煙に消えてゆき
雨の日は雨の情けを身に受ける
良い出会いだつたと遺書に書くつもり
煙突の煙が見えぬ決算期
雑草に学ぶことあり立ち直る
草に寝て少年の夢天駆ける

京都塔の会

松川

杜的報

神風を信じた日あり半世紀
こたつとまだ仲良くしてる母の風邪
鴨川べりで少し詩囊を膨らませ
変り身の早い娘の春帽子
登りつめたなら今度は降りて来ぬように
白れんのしろ春くる空へ盛りあがる
少々の不安が残る帰り道
片減りの靴にも少々意地がある
与党内疑心暗鬼で堀深く
道頓堀愛し中座の輪の中に
ライバルの堀の深さへ石を投げ
市民から慕われる堀鯉がはね
花びらを浮かべ古城の堀激む
妥協して堀の深さが解らない

惠美 純子 素水 八重子 ふゆ子 靖子 靖子 富美 芳郎 ヒサ子 和子 可住 宗悟 倫子 飛鳥 宗悟

堀も亀もわたしも泥にまみれてる
渾水の堀雑草の群れとなる
悩み聞く地蔵も雨に濡れたまま
鍵っ子の悩みブランコ揺りながら
仏壇の前で悩みを聞かされる
検査して悩みが一つ増えました
安全なはずの歩道ではがをすた
歩道から殿下を見てはなりません
年金がブラブラしてる遊歩道
プランターで葱が育っている歩道
まっすぐの歩道を敵と歩いている

南大阪川柳会

金井

文秋報

エプロンで少うし齢を若くする
筆太のめし大阪の匂する
近頃は親が遠慮をする同居
ひとときを心静かに経写す
エプロンの似合う女性と決めていた
ほとぼりが冷めると例の虫おこる
宅配の印エプロンで手を拭いて
あと一つ誰も取らない甘い菓子
エプロンのポケットにある母の夢
値切るのにその前例が持ち出され
例によってちゃんと根回しできていた
遠慮なくいたたく悔いのないように
めしのれん林芙美子をダブらせる
絵の具として平絹画布に春の朝
平絹をわざと装って朝帰り
母さんのエプロン姿に惚れなおす

磯 真柳 求芽 萬的 白溪子 芳子 庸佑 福正 杜的 栄 秋子 柳宏子 楓楽 志華子 源一 恒明 文秋 スミ子 直子 萬的 千里 度 勝美 真砂 明星 咲

エプロンを妻が外せば終い風呂
借金を返せば遠慮しなくなり
單身赴任一膳めし屋の旨い汁
平絹を装う膝が落ちつかぬ
判例で閉ざされた道開く道
腹いっぱいめし食う夢を見たむかし
例の場所同じ時間て夢じ合う
遠慮ない仲間同士茶碗酒
戦争を知らぬ子供にめしを盛る
通夜の席例の女が隅にいる
一例ですがと痛いことばかりつき
朝めしをしつかり食べて今日がある
昔なら遠慮しあつた嫁姑

川柳塔とつとり

武田

帆雀報

改築の軒に今年もつばめくる
つばめさんよく来たうれし声かける
過疎の村つばめ花嫁つれてくる
巣立つまでつばめの母は忙しい
鶏もつばめのように飛びたかろ
嬉しなつばめも土間を舞うて逃げ
つばめにも門限があるサツシの戸
都会より田舎が好きなつばめの子
凶作の知らせかつばめ果を変えろ
実力で勝つた男のよい笑顔
実力で登龍門をくぐり抜け
実力者いい派閥が揉めている
実力も頑固過ぎると夜叉になる
沈黙も父の実力眼が光る

悟郎 正博 智久 シメ子 トミ子 三男 庸佑 柳伸 しマ子 信博 千梢 久子 岩信 侑里 友夫 孝原 喬水 銀嶺 千秋 俊路 黙光 螢 一京 帆雀 輪多朗 崇 孝男

実力を出して隣の子に勝てず
 実力のないのが指揮を取りたがる
 冷飯で練った実力見せようか
 実力が涸れないように辞書をひく
 ランドセルうれしく枕元に置き
 ランドセル風に押されてとんでゆく
 ランドセル置いて道草くつている
 百点は目指さなかったランドセル
 ランドセル温故知新をつめている
 花びらを一枚のせたランドセル
 お陽さまもにこにこしてるランドセル
 ランドセル青いリンゴは仲良しだ
 ランドセルうきうきわが家春にする

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

一枝 圭一郎 喜与志 艶子 明美 粗粒 山人 静生 揚芝 睦子 日枝子 由多香 三男 忠翁 鉄治 英子 正博 紀久子 精子 忠雄 和子 信子 稚代 吞天 綾子 紀美女

本心を聞く日の脈をととのえる
 耳打ちで潮時を聞く宴の席
 耳打ちが何やら秘密らしく見え
 耳打ちに来るから味方だと思ひ
 母と娘の耳打ちばくは蚊帳の外
 窓際で風も耳打ちしてくれぬ
 耳打ちをするから人に勘ぐられ
 耳打ちの熱さが胸に舞い降りる
 議事堂の中の耳打ち見る不安
 ベテランも未熟も同じバート質

川柳岩出 小倉 アサ報

好笑 政一 武春 高夫 豊太 アサ めぐみ 寿子 千寿子 克子 昌子 綾子 千鶴子 紳一郎 春子 愛子 和子 精子 英子 アサ 保子 ふみえ 正義 重徳 正直 悦男 忠雄

只になる激辛若さ勝負する
 川柳塔唐津支部 久保 正剣報
 年金の予算はみ出す慶弔費
 途中下車ゆつくり眺めるふじの色
 連休も祝日も無い老い独り
 ないしよいし孫となしよの合言葉
 天草でのりかく海女の光る肌
 日本人中国よりも千支信じ
 みどりの日通り合せて苗もらう
 土曜日の午後は任地へ通ひ妻
 口よりも実行はたが迷惑だ
 仏壇の妻に詫びつつ朝の酒
 葉桜のトンネル抜けて夏が来る
 カーテンを閉めて団地の昼の闇
 限りあるいのちとことん生きようぜ
 綻びた桜に背き春二番
 風に乗りあれよあれよとスタンドへ
 少年は夫を抱き朝配る
 人脈が違ふ夫婦の趣味と旅

三幸川柳教室 三宅 保州報

与呂志 治幸 紀一 ふさ子 青琴 喜久亭 ちよ 夕ミ 高明 虹汀 久仁於 四郎 實 旭恒 幸夫 朴竜 正剣 みね 当代 朱夏 公子 鉄治 親路 初子

こちらにも落ち度があつて出来た壁
 反省はもう遅すぎた玉手箱
 残パンの白に反省迫られる
 反省をされても帰らない命
 反省のときか神は手を添える
 足もとに火がついてから振り返る
 一筋の轍の跡に悔いはなし

余所見した反省蛇を取り直す

昏を噛んだ反省忘れない

反省を男は明日のバネにする

愛からの逃避に居留守使う靴

留守居して天上天下我ひとり

いつも留守わたしが嫌いなのかしら

米倉で居留守を使う内地米

香焚いて子は留守中とまだ思ふ

居なくても存在感のある男

石段の数ほどある古い傷

座ぶとんを数えて幹事落ち着かず

点滴のしずく数える長い刻

アリバイを崩す決め手の時刻表

伏兵が居るとは知らず多数決

因数分解しても心はまだ解けぬ

ナンパリング打って一日狂えない

数知れぬお陰もろうた紀伊の旅

かけ数で愛を確かめ合っている

踊いた石の数なら覚えてる

くろつかすドレミファソまでやと咲き

満ち潮へ力一杯産み落とす

宣誓の力強さが春を呼ぶ

学力を頼む時だけ百度石

進化したことを忘れて猿笑う

人類の進化宇宙に住みたがる

進化するカタカナ言葉馴染めない

岩美川柳会

羽津川公乃報

信子 昭枝 高夫 靖子 正雄 美智子 よし子 千秀 保州 恵子 かなめ 恵美 武春 由梨 三千子 百合子 茜 桂香 和子 圭子 章子 町子 孝子 芳江 單車 公乃 嘉津江

進化論唱え自然を消してゆく

進化した人はあの世へ旅に立つ

頑固一徹 進化をしない祖父であり

人間も進化の果ては猿に似る

進化して猿も都へ下りて来る

進化論に私の素姓教えられ

人間を駄目にするほど進化する

人間の進化は宇宙人だらう

たましいを抜いて進化をしたけもの

川柳東大阪

森下

ときどきは両替をするお付き合い

三月の絵馬はときどき笛を吹く

運だめしときどきは買う宝くじ

木簡の文字に悲しい人柱

柱にもなれずあすなろ仰ぐ空

肩書が物を言ってる床柱

ささやかな義理へ年金忙しい

忙しい生活が老いの目にまぶし

忙しい絵皿に明日の声を盛る

忙しい日は気付かずいた笑顔

正直に生きて童話が面白い

ピノキオの夢だら孫の鼻動く

童話から抜けてたような子供服

法が盾泥を吐かせてくれたびれる

正義の花血一杯に埋められる

美人になりたくて素肌に泥も塗り

泥水で咲いても心の白い蓮

愛論報

美恵子 黙光 睦子 孝男 照女 喜与志 はるお 忠良 螢 二南 元紀 猪太郎 勝美 恒明 文子 美子 真柳 晋吾 湖風 太一 孤舟 隆 東雲 文秋 頂留子 愛論

直感が外れて困っている明治

病状を直感させる医師の顔

子の事になると母の直感素晴らしい

いち早くねずみが逃げた難破船

大穴の直感 馬に凝り始め

直感の鋭い妻に距離を置く

お人好し都合よろしく使われる

星条旗の核は平和と言う都合

釈尊の手落ちか妻が先に逝き

仲人が手落ちなく両家春にする

青い鳥逃がした手落ち森がない

妻の手落ち裏木戸ひとつ開いていた

最大の手落ち僕は僕に惚れた女

手落ちだと気付か思わず膝を打つ

当然の報い定年後の離婚

当然の事をしたのに喜ばれ

当然は米屋の棚に米が来る

へそくりは当然ですと妻主張

川柳クラブわたの花 片上 英一報

大声で遊ぶ子供の声が好き
庄助さん地獄めぐりの日がつづき
あやとりの相手を孫にせがまれる
これからは花と緑があれば良い
年金の暮らしにレジャー多すぎる
ハンドルの遊びも楽しハイウエー
ハンドルに遊びがあつて走りよい

朝一 甚一 ひで 通彦 浪速子 白光子 一齋 ダン吉 洋 さい子 東雲 一弥 金太 二南 文時 昭二 呂万 狸村 シマ子 隆 千枝子 友甫 泰成 英一 剛治

遊びにも熱中してる塾カバン

しあわせな遊び知らぬ塾かばん

塾通い遊び嫌いなわけじゃなし

公園で鳩と遊ぶす日の子守

遊園地疲れて夢路父の背

蝶々も猫と遊んでいる日和

売り犬の競うなみだの眸があつた

朝っぱらから何やと受話器置いてから

桃の節句母ははまぐり買うて来る

同居してほんのすこしをささえ合い

初杖に重ねた年が身に沁みる

客だとは思っていない米屋さん

人生を豊かにさせたい出合い

初孫の名付けに祖父の生き字引

舶来のごはんかいねと祖母の箸

大和路に雪がちらつく寒の行

たんぽぽの綿毛に旅を誘われる

万葉の花咲く園へはすも足

花曇り花には早い昼の酒

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

玄関は花一杯で春が来た

花の芽が匂うて窓をあけてみる

花だより心そわそわブランねる

やぶ椿生さざま見つめ目にやさし

こぼれ萩杖にやさしい散歩道

人生の花道つくる蟻がいる

コスモスの花に隠れている子猫

花から花へうつり変わるバカ男

ますみ

正子

実希子

トシエ

龍

明子

幸枝

しのぶ

暁子

花子

道子

雅恵

君江

初子

春子

弘直

一風

美津留

鬼遊

外国の小粋な花にとびついた

お祝いは花束せめに合うスタ

雪どけの道辺に小さい白い花

長すぎてランの咲く日が待ち切れぬ

花の種配り歩いて手をつなぐ

なすの花重い責任負っている

職終えて野道の花が見えてくる

妹よ癒えたら花を見に行こう

花屋ではいつも自分を見失う

押し花が語れば長いものばかり

戸を閉めてひとときわ蘭を匂わせる

蝶は恋う花のいのちのあるときに

船だまりで見付けた花の名が言えぬ

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

夫婦喧嘩すんなり謝るのは私

何かある夫がすんなりあやまった

仲人が来てすんなり和解せず

快いお世辞すんなり聞いておく

すんなりと枯山水の石になる

美しい妻がいるのに浮気する

会社にも矛盾を通す室がある

学力の程度と学費矛盾する

矛盾したことを平気で世を渡る

窓際の椅子にも矛盾の裏表

言い訳の矛盾を妻は見落とさぬ

心ない一言溝を深くする

寅さんが踏む溝板があつたかい

南北の溝深くする核疑惑

朗子

八重子

寿々子

富美子

恵子

日枝子

千春

千代

夕子

亜弥

荒介

ふみ

瑞枝

ルイ子

伸子

白溪子

澄子

恵美子

東雲

かおり

一閑

彰一

志女

英一

模杳

杜的

正坊

正論を吐いて上司とできた溝

花冷えの誤解が溝を深くする

五十年掘っては埋めた溝の跡

思いきり風船を蹴る頼りなさ

窓際の椅子蹴りやすく出来ている

大地蹴り早く飛びたい退院日

赤ベコに雪蹴る牧場春になる

八人目の敵はどうやら家に居る

名も知らぬ名があり残る女傘

誤りを素直に認めるのも勇氣

老いの美学シルバースーツを棄権する

反省はテネシーワルツ聞きながら

父の愛すんなり嫁った娘を想う

口下手な男寝言でよくしゃべる

不器用な男の貰う努力賞

童話の森を探索す男と女

川柳高知

川竹

松風報

米不足こぼした米の悲鳴聞く

過労死にさせてはならぬ夫送る

真直ぐに生きて肩書などいらぬ

広い空ジャンボが点になって消え

この広い地球に僕の土地がない

価値観を変えると広がる歩幅

昼酒が妻のその後を狂わせる

五十年舌が忘れぬ母の味

本当の味はトマトの丸かじり

飽食の味おふくろに遠い味

三世代の味で彩るぬくい膳

しげお

茶の子

ひでお

よ志子

大輔

波留吉

静江

あきら

艶子

庸佑

稲子

春風

節子

武庫坊

瀧小

薫

さち

春枝

竹萌

功

快風

菊野

幸泉

幸

圭風

朱坊

千鳥

上り坂男の舌が肥えてくる
口コミの味はやつぱり裏切らぬ
歳時記に背きハウスの味に慣れ

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

タイル張る手際の良さを見ていたり
おいタイル垂んだ顔を写すなよ
張りボテのタイルで一軒持ちました
時間を食い潰すタイル絵のひまわり
夕暮れになると童謡唄う老母
サヨナラに握手の温み日が暮れる
負け犬の影長と夕暮れる
一日の呵責払うて夕暮れる
日が沈む今日一日の礼を言っ
黙々と明日が見えるまで走る
口止めもしたい噂が走り出す
過疎の町私一人のバス走る
ランナーの悲哀を風は知っていた
遅くても走ればきつと着くゴール
怒鳴りたい我慢している喉仏
古希過ぎた男に遅い鯉轍り
初月給貰った孫のプレゼント
幸せと思うお墓で枯れる花
逃げる児の歩幅になって鬼ゴッコ
鍵っ子は鍵の重さを知っている
同じ本読むたび初心思い出す
電子占い連れの男の目が笑う
局面はいやおうなしに夜となる
何一つ知らずに生きて幸せそう

佳風
京子
松風

すみ
隆男
水声
薫
佳秋
正治
道子
澄子
天弘
石舟
園歩
メ女
芳子
正坊
昌子
伊三郎
正子
武庫坊
ハツエ
文夫
ミサ子
萬的
行隆
吉太郎

おおらかな山の湯宿のみだれ籠
たわいない話でドライブがはずむ
いつまでも二番手である心地良さ
はらいせは蹴られた石が知っている
入れ替えがすぐく妻の乾電池
貸借はおごつて返す程の額

川柳大阪

川端

一步報

朝日さすいで湯の宿で心満つ
給料日おやじの威厳ちよつぱりと
菜の花は咲けど世相の風寒い
桜花に似合う晴着とツーショット
目の前を歩く老婆に母を見る
なんやかと春は祝いの金が出る
改札をはさんでおじぎまだ続き
晴着着て社会ふみ出す第一歩
幾度目の見合いか晴着板につき
値上げして国産米が顔を出す
ある物でもてなす家の暖かさ
正直に生きる証きょうも春
母の顔めくみや乳房覚えなく
改札機軽いジョークが通じない
伺いに来るのはいつも選挙前
損ばかり積んだ亡父の笑い癖
エプロンの白さが匂う春支度
野ぼとけのお顔もたるむ春の風
子は母に預け二十歳という晴着
伝統の茶粥を老母は今日も炊く
しばらくは春の香りで酔うと決め

鹿太
タカ子
よしお
白溪子
求芽
紫香
美花
保夫
和子
太元
柳昌
末坊
比呂志
須賀夫
柳弘
しげお
亮太
川童
重人
一介
希久志
洛醉
本蔭棒
雅果
美津留
与呂志

ランドセル弾んで春の音となる
伺っておきますやる気ありません
悪妻に伺いたてる四番打者
カタカナがあるから母の手紙です
晴着着て少しは女らしくなり
何うと欲を捨てなとご住職
片親のボク負けないぞ一年生

川柳藤井寺

高田美代子報

サボテンの花へ男が近寄らず
亡者達ちくちく登る針の山
善人といわれその後芽が出ない
その後は憶えていないコップ酒
なりわいを誌すその後の日記帳
その前もその後も変わらない政治
あの日からダブルベッドにひとり寝る
再婚してもいいかと墓に問う
その後は度胸をきめて相手する
その後で視野に入ってきた女
その後は三べん回りワンと鳴き
着想も速いが諦めも速い
諦めがはつきりついてよく眠る
諦めることに慣れたる歳になり
未練きつぱり捨てて一からやり直す
諦めた子の巣立ちにも桜咲く
諦めた鶯から鷹は生れない
落椿あきらめ切れぬ色で落ち
諦め上手な女で白い歯をこぼす
運命を変える諦めだつてある

金太
まつお
醉照
笑風
河南子
鉄心
一步
悦子
宗一
三郎
六武
利武
美房
吸江
和子
恒雄
和樹
しげお
みのる
寿美子
与呂志
公輔
キミ子
敬一
治子
美代子
昭子

ポケットに孫の写真がうふふふ
それとなく殿の山門覗かれる
うそまたほんとなるかも四月馬鹿
もの覚え悪いとおおと根比べ
久々のスカートはむいて淀屋橋
酒臭い欠伸がうつる終電車
諦めがつかず八卦をみてもらう

川柳後案吟社

従野 健一報

呆け役の部屋に芸術論すらり
輪の外へ出てから知った血の絆
陽が沈むせいっぱいの自己主張
頭を空にして立ち読みにつける
風百態串刺しにして飛躍する
上を向いて歩けば小石にけつまずき
わが道を行けば変わらぬ遠景色
余剰人員と言われてからのよこれ役
花の色俺には消えた四月の陽
マイカラーで家族揃って銭湯へ
肉親のありがたみわかる血の温み
不満でも笑顔をつくる人の良さ
受話器の向う熱い息吹きよアイラブユー
泣きながらやり返す子の石つづて
渦巻いた人出平和な国と知り
平行線レールにもある自己主張
ストープでだんだん濃くなる健康茶
牛の目に緑はうまい彩となり
タクシーを飛ばしてストの日の欠伸
正体は鬼かも河童の笠踊り

伴 子 末 一 春 蘭 トミ子 敦子 志 洋 一 屯 草 風 拓 治 美智子 義 親 正 秀 哲 郎 道 博 柳 五郎 桃 風 金 吾 邦 季 幸 子 佐 加恵 玉 水 吉 則 秋 月 鮫 虎 狼 照 路

川柳塔鹿野みか月

土橋

三代の母が揃って動いている
菱餅に母の指紋がついている
義姉さんの草餅亡母の味がする
ありがたい母がいて飯炊けている
お母さんと大きな声で呼んでみる
母の海いとも風いでるさざ波に
もつれ糸はぐしてくる母といふ
母を裏切る仰き見ておりながら
横轂を深く刻んで母元氣
母という烙印を持ち続けている
夢でよいいさみ足にて旅したい
泥んこを追いかけてやる親ごころ
こしひかり食べてる飯にある自信
仏壇へ真似て孫達手を合わす
飽食に慣れて足りない思いやり
しやしり出て割ってしまったガラス鉢
腹を割ってグラスの中に解かしちゃう
面白く聞かせる夏の後日談
凡人の視野から夏が駆けてくる
新緑の中で見つけたすみれ草
夏向きの破れ障子がたてである
不器用でいつも他人の泥かぶる
どっぷりと泥につかてきて咲いた
泥沼で拾われた娘が私です
汗に泥まじり草取り寝床から
泥臭い彼が今では一番好き
農業で生き抜く汗と泥の腕

螢 報 久 枝 幸 枝 一 枝 くに子 早 苗 八 重子 陸 子 諷 人 しげる 汲 香 明 美 喜 与 志 正 恵 弘 子 孝 男 和 子 隆 風 美 恵子 三千代 きみ子 はるお 忠 良 富 久江 保 子 静 江 実 満 かつ乃

サツカー少年は泥のように眠っている
掌は泥の感触忘れない
泥まみれの青春悔やんだりほしくない
節 子 螢

川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

波立った過去は振り返らずに行く
大波も小波も越えた老母の背
手応えがないからジョークにして置こう
子育てが済めば女房も強くなり
領海も国境もない渡り鳥
返し針しても破れる夫婦仲
キャッチホン入り話の腰が折れ
希望さえあれば苦労は花舞台
店構え広げて味はますますなり
大波を乗り切り嶺に立つ男
波の花やつと北国春を告げ
黙秘権 選挙の時はよくしゃべり
夕波が静かに闇を呼び寄せる
生かされて亡母に感謝の墓詣り
波の音浜の子供の子守歌
波の華咲いては消える繰り返す
病床に心とます季節花
一時の心を燃やす試着室
サークル檸檬 小林 一夫報
手を洗うさびしい横顔を見ている
蚊が鳴いて僕を探しに来てくれた
洗っても洗っても落ちぬ心の染み
にんげんの臭いを消しに駅の行列
一 夫 薫 風 正 坊 薫

人生に矢印のない面白さ

明日嫁ぐ娘の背洗うそつと洗う

ビリオドを打って涙は昨日まで

哀しみを洗う五月の雨に打たれ

何もかも遅すぎたけど墓洗う

皿洗う嫁と平和な話して

今日もまた恥をかく顔洗いおり

流れ出た支流ふたたび交わらず

笛吹きが消える狂った列になる

どしどし降りる雨で洗っているところ

洗濯好きの女に油断してしまふ

ほたる川柳同好会

井上

直次報

口癖を孫が覚えて笑わせる

覚えてた英語を試すパスポート

政界は離合集散みな覚え

フロツピーが覚えてくれる住所録

身に覚えのないに尾緒つけられる

記憶力頭と共に薄くなり

大相撲腕が覚えた技の牙え

僕のこと覚えてるか握手され

脱ぎすてたつものりの過去について来る

今様は前もかくさず脱衣場

脱がされたマネキン着たい服がある

逢うてきた温みを胸に足袋を脱ぐ

草履脱ぐしぐさにもある茶の心

何のためはいらいまでも脱ぎ捨てて

夫婦喧嘩子が眠るまで待っている

眠ってるうちに梯子をはずされる

雅子

喜美子

房子

希久子

あずき

いわゑ

みつ子

智恵子

千代

智子

楓楽

明光

螢柳

馬洗

方郎

純次

祥司

竹二

保子

吉太郎

清史

英子

喜美子

昭子

洋子

博史

直次

居眠りし慌てて降りたが早すぎた

男子厨房眠る才能掘り起こせ

歩いても亀には亀の足がある

政権の日替り舞台歩き出す

歩いても歩いても山遠くなる

万歩計今はしずかに棚の上

気持だけ歩幅広げる花の下

溝口川柳会

小西

雄々報

手探りの人生恥もかきました

旅の恥詰める袋を持ってゆく

タイガース負ける父の乱気流

お育ちか気品恥じらい漂わす

二度三度恥をかいなら落ちついた

輪の中で恥を知らない子が一人

恥一つ見栄の一つがござり合い

一言へ恥じて胃薬のんでいる

高い木へ登ると恥がよく見える

思い出せば恥がめらめら燃えだした

はびきの市民川柳会

榎本

吐来報

恋成就しそつな今日の花ぐもり

いい天気ですね ほづきと市場かこ

ちやんづけで同窓会に二次三次

筆ペンを重いと思う遺言書

ひとすじの恋が暮れる夕桜

昨日脱ぎ今日は重ねる桜冷え

留守電にしどろもどろでメッセージ

地に還る明日の命へ花満ちる

正安

紫水

福一

一笛

蔽子

恭子

桂子

久子

豊枝

鈴枝

弘子

静江

康女

雅水

智恵子

正光

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

雄々

終章まで女に消えぬ化粧箱

お花見の歌も踊りも波にのる

思惑が途中で変わる段梯子

桜散ってばんやりしてたなと気付く

ばんやりを忘れ列島病んでいる

病床の老母に通訳いる会話

熱帯魚に腹減ったかと聞いている

九年を待つ達磨と会話する

クシャミひとつ誰かが褒めてくれている

誰かのうしろの正面だけあれ

内閣のうしろの正面だけあれ

誰もまだ私のかつらに気が付かず

誰方かと訳けはわたしと言う電話

単車買う夢で精出すアルバイト

アルバイト予算を先に組む息子

赤い爪野心があつてアルバイト

娘のバイトちよつぱり顔も大人びて

バイトする娘が先にニールック

連休の疲れ会社でとつてます

何をする会社ですやろ横文字で

仲人は本人よりも会社誉め

会社では見せぬ笑顔の縄のれん

倉吉川柳会

谷口

次男報

親らしくできることからやっておく

親に似てもつたいないを繰り返す

親の涙に特効薬が入れてある

思い切り泣いて子離れ親離れ

お隣の奥様ちよいちよい美容院

キミ子

シマ子

一壺

美代子

ダン吉

たけし

扶美代

一屯

六點

繁男

敏

夏秋

吐来

利武

さとみ

厚子

金太

悦子

辰子

和風

りつ

志洋

碧水

美由起

節子

秀峰

独歩

奥さんをはめて外濠埋めてくる
奥さんがいっぱい昼のカラオケ屋
米不足奥さん闇へひたし走り
奥さんが若くて旦那おじいさん
奥さんでないので妻と書く宿帳
むこはんがいなくても奥さんと呼ぶ
奥さんと持ち上げ陰でおばあさん
本宅に怖い奥さまいらっしゃる
うさぎ小舎の王様だけど気楽な日
奥様のお供で独も内またで
王様と月の砂漠のものがたり
思い切る男の割に運がない
王様をどなりつけたい虫もいる
王様に若葉マークがはつてある
王様になれる心配だけはない
だまし絵の王様からのメッセージ
王様の家来の家来の家来のほく
王様に育てた子供もてあます
王様も民も太つて平和です
水揚げのかにが港の王様だ
王様のお目にとまった白い蝶

川柳ねやがわ(前月分) 高田 博泉報

康志 日枝子 小生 ゆり子 和枝 苦句 康子 秋女 美智子 喜美子 寿満湖 次男 幸苑 サカエ 柳風 螢 天雀 よしえ 幸子 御前 博泉報 たもつ 恵子 高栄 とし子 時弘 シマ子

問題になつてゐるそんな地獄耳
塾なんかなかつた頃の子の笑顔
献金の名が泣きますよまた汚職
この前とおんなじ愚痴を聞かされる
妻とても油断出来ない保険金
事故保険引山取れて他人の目
美しく老いゆく人の薄化粧
問題は贈つた花の言葉
一億円どうしたどうしたお殿様
知らない町の終点になつた孤独感
履きなれた靴で気がねのないつどい
春や春父の残した道しるべ
姉を見本に素敵な恋をして見た
生命保険妻は冷たく僕にかけ
おしやれして待つ幸せへ花時計
君もまた句仏となる春彼岸
校則が問題になる死亡事故
父さんが見本のみすけには嫁かぬ
保険かけていてよかったという不幸
保険証忘れず入れて長い旅
ことごと春の水車はよく回る
問題の鍵はしっかりと胸に抱く
関係の無いのが騒ぐ保険金
控え目なおしやれ女を匂わせる

川柳化粧槽(前月分)

植村客遊子報

一笑 良知 一途 まさお 三郎 一芳 光子 英王子 かすみ 弘直 頂留子 冬葉 磯 洋風 一風 薰風 文秋 鬼遊 柳宏子 波留吉 紫香 権太 庸佑 速水 岳詩 朱玉 悲子

尻馬で笛を吹いてる弱い夫
何の芽か小鳥がくれた庭の隅
この大豆も輸入品かと手に晒す
歯ブラシをくわえて庭を一巡り
大たぶさ砂で磨いた肌の艶
底なしに笑えば地肌見えてくる
善を積み残し少ない日に感謝
顔みせず影から天の声おくる
ひな人形桃はころびて春の風
字あまりの句にあやかりたい寿余り
寒椿真紅の笑顔が呼んでいる
子の寝顔だけしか知らぬうちのパパ
どの窓も倅せそうに灯がともり
新聞に目もととおさずに日を送る
賽銭を持たず立ち寄り厄落とし
四百年堪えた古梅の紅の彩
女房の留守をチャンスの飲み仲間

川柳ねやがわ

高田 博泉報

サワ子 三青 葉香 礎石 太鷹 奮水 遊峰 松美 勝美 珊瑚 茂章 早苗 嘉 是る女 姫女 春蘭 客遊子 波留吉 一笑 文秋 一風 シマ子 弘直 たもつ とし子 一度 一途

仕事の鬼痛しゆの嫉妬心
迷いつつ生きて人生味が出る
人間の熱気に酔うている桜
人情の機微に調査がはかどらず
ジェラシーに心の狭さ自省する
三人が寄つてもとんと出ない知恵
電話口入れ知恵らしい声がもれ
知恵も汗も出せず肩を叩かれる
一張羅また着てゆけず御招待
老いの身は葉桜も好し杖を曳く
窓開けて叱られ閉めて叱られる
やんわりと悟気も籠めてなじられる
小心の知恵に悲しいものがある
動物のように愛してくれはった
汗流し調査されても恥じぬ日日
職退いて生命の残る名刺焼く
老母の知恵若い世代の穴を埋め
ジェラシーで少しこぼしたプランデー
四畳半の窓から浅草が見える
ジェラシーの風に折られた花の首

川柳化粧檣

植村客遊子報

恵子 高栄 かすみ 真柳 庸佑 良知 頂留子 勇太郎 静江 一鬼 あやめ 時弘 欣史子 礫 光子 黎之助 柳宏子 紫香 元紀 洋 岳詩 サワ子 里兆 朱玉 葉香 礎石 三青

今日の運下駄でも投げて決めようか
飲まれた煮え湯も今はなつかしい
のしかけて贈るでもない祝い事
入学日桜吹雪が舞を舞う
老大生 迷子になってお慌て
母の愛来や野菜を助手席へ
孫たちのおかげで花見また出来た
名城へ観光バスの絶え間なし
桜咲き分つきうき風邪をひく
古をしのぶ風情の山桜
殿様も散って仕舞えば粗大ゴミ
散り急ぐ春の嵐が命取り
宮参り同名多く苦笑い

むらくも句会報

藤井 明朗報

悲子 遊峰 奮水 白遊 松峰 昭点 川楽 清泉 希美 晃風 清峰 たまえ 正朗 芳子 義良 幸夫 朝子 百代 はる代 やス子 定子 島子 仲子 千里 美恵子 林蔵

呼びかけてふり向く顔は違ふひと
孫の声あたりかまわず母を呼ぶ
赤い屋根 山のみどりがマツチする
嫁さんにはしい親切なバスガイド
偶然に重なるように運不運

打吹川柳会 奥谷 弘朗報

鮮やかに老ける背筋をピンと張る
考えも態度もでかい新社員
あの世へと秘書が汚職の罪かぶり
闘病を抜けた笑いの花開く
拝啓と書いて暫く考える
逢いたいがあなたあの世は遠すぎる
いやな気にさせず断る鮮やかさ
ペアでならいつでもあの世いとわな
点滴であの世近くのを引き伸ばす
考える時の鏡がおいてある
今日もまた老いて幼時に戻りおり
ミンク着て動物愛護考える
独り者伴侶と決めて犬を飼う
井の中で天に翔ぶこと考える
健康法病気になるで考える
風船に心配無用の空がある
胸衿を開くと雪も解けるだろ
あの世での愛を夢見て散った花
つっぱり心の心を開く愛の鍵
あの世まで持つて行きますプライドを
閻魔様を騙す言葉考える
子の心開いた妻の知恵ぶくろ

しげる ます美 婦美 幸子 明朗 光枝 一浪 小生 野草 野杏 佳女 善政 柳風 早苗 寿満湖 雄々 碧水 松盛 喬水 とみお 幸子 孝恵 仙岳 玲子 節子 勝見

鮮やかな曲線になる恋ひとつ

鮮やかな血が五体を走るありがたさ

地獄行きの業を毎日積んでいる

袖の下慣れて恐さが消えちまい

富柳 金池

順番を待つてられない年になり

寝袋で順番を待つコップ酒

誘うのはよそうあいつは雨男

誘われて嫌とは言わぬ好きな道

薬袋の裏筆談の乱れ文字

買い袋今日一日は休ませる

順番が狂つて美女と手が離れ

順番に並ぶと空気動かない

アリバイがあつて白だと認められ

穴のある袋に溜めていた小銭

また朗報笑い袋が破れそう

おいでおいで鬼はやさしい顔をする

誘われた二人に月が明るすぎ

夜桜へ特級酒で誘い出す

白か黒その中間もありますよ

順番に家中風邪を引いている

床しきは匂袋の沈丁花

誘われる予感で揺れるイヤリング

順序不同と書いてやっぱり偉い順

順番に咲かぬ花にも水をやり

頭陀袋人の情けで重くなる

守り袋今日のいくさの安らかに

へそくりを入れた袋が笑い出す

螢

きみ子

喜与志

弘朗

森子報

紅月

恒雄

晋

喬之

紅紫朗

花子

登子

和樹

二三子

絹子

昭子

悦子

敦子

昭水

(伊) 勇

智久

(岡) 勇

美代子

文次

透太

岳人

維久子

花梢

順番が狂つて河が蛇行する

川柳たけはら

森井 青居報

昼食は遠足気分お弁当

初夏の声あなたもきくと聞こえている

ライバルは僕より若いひとにする

夕の膳色あざやかに春を盛る

桜咲く春がやっぱり好きだなあ

花びらの私語を流している川だ

母逝きし歳なり不孝かみしめる

熱いお茶入れて話の向きをかえ

アメリカに行くなら覚悟決めて行け

外に出たくて外に出たくて春の陽よ

申告を済ませ息子は墓まいり

いじらしく春をつかがう野の花よ

貧困をみんな忘れて暮し

頑として過疎に生き抜く鬼瓦

同窓会顔のしわなど忘れてる

ひと息入れてゆっくりと行く八十路

かかる時父のジョークに心風ぐ

花束に弱い女の素顔です

退職へ四十年のベージュ繰る

お寺さん口ウソクの火をうまく消す

春一番コロリ転げた植木鉢

うつくしい過去ひとつ持つオルゴール

いたわり合い病を一つずつ抱いて

絵にすれば古い家並が面白い

母の知恵すぐに答を出さぬなり

垣根ごし見るお隣は美しい

森子

中千枝

史子

蘭幸

麻代

比呂子

笑子

静佳

一枝

勲

ヤスエ

喜久恵

千代美

清水

喜美子

千年枝

喜喜

栄恵

汎美

節夫

正宏

一路

こうじ

貞子

蝸牛

臣子

静風

正義感心の芯に貯めて置く

桜見ていると四人の子を思ふ

昔話森の小鳥はみな陽気

恋知ったバラは真つ赤な息を吐く

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

自画像は九分咲きぐらにしておこ

独り居の遠い雷きいて眠る

放つといて下さい私のブライバシー

その時のほころぶ笑みにかるい罪

世のうつり男と女あべこべに

男性のエプロン女が慣れてきた

食卓の上にも春が咲いてます

ほころびをつなぎあわせて年を取り

咲かせたい気持も少し薄化粧

神の怒りどんな姿で出てくるか

自分史の一つぐらいは咲かせたい

あべこべもすっかり溶け合い喜寿の春

咲かせては花をつまめるチューリップ

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

豌豆のお握り貰うローカル車

初物の豌豆土産に母が来る

ランチタイム世界の米を試食する

のぼせさす甘いささやき洗う波

後家さんにははせて入れ揚げたそう

握手した手からのぼせが這い上がる

薄い毛が逆立つほどにのぼせさる

表面はのん気に見えて芯が有る

のばら

千里

現代

青居

惠美子

英子

歳栄

はるみ

鈴江

かつ子

聖子

好栄

ちよえ

洞然

博利

清泉

白汀

まき

よしえ

正治

末貞一

すみ

勇次郎

弘治

いわお

今日だけはのん気で居たい花見酒
のんきそな顔して策を練る男
のんき節唄うと若い風になる
のんきだが銭のけじめはちゃんとする

釣糸を垂らし昼寝をして帰る
沸点を合わせ本音を煮つめている
それとなく本音を聞いてくれる姉
二階から笑い話が落ちて来る

西宮北口柳会

亀岡

哲子報

尚利 昌子 十四郎 夢之助 鹿太 澄子 紫香 六浦

いわゑ 澄子 よし津

あの雲の一つに亡母がいるのです
心音に目ざめる母となる自覚
探しものきつと出てくる母の部屋
故郷の小包解けば母こぼれ

ハガキ一枚心の模様まで見える
模様替えた部屋にボツンと一人
人生模様皆それぞれの色で書く
成行きは模様眺めのレモンティー

風紋に続く駱駝の足の跡
母が編むセーター手の込む花模様
森ハナエの蝶にかこまれ若く住む
何色にも染まりわたしの身を守る

水守りの一途な笛を聞いている
だんだん畑守り平和を疑わず
ほどほどの尺度は守り風という
身を守る嘘は平気でつけそう

万全の構えで守る一点差
余命守る隠し預金も底をつき
月淡く女の語尾が聞きとれず

武庫坊 ひろ子 二南

怪我しない距離で別れた淡い恋
手鏡へ淡い気持を打明ける
淡い恋老い弾ませる昨日今日
淡味に慣れて一病息災に

花嫁のブーケは淡い彩を抱く
正論を守ると風がキナ臭い
しよもない話に落着く立話
一日に三度きつちり食てます

価値観の相違ドライの眼がからむ
一日がやたらと永い休肝日
灰皿からこっそり聞いた君の嘘

翠洋会

渡部さと美報

諷云児 佳秋 てる トミエ 哲子 正坊 白溪子 房子 正とし まさお 春蘭

すべらせた口が噂の種をまく
すべる禁句四月になつてホツとする
神童が就職試験でがっくりと
午前二時睡魔と戦うルポライター

目ざましが気になるたまのバスツアー
ズレ出した二人の時計倦怠期
貼り出しの孫の絵一番光つてる
一合の酒で一升飲んだ顔

消費税出来て一円落ちてない
カンバンにしてからママの一人酒
凡聖一如ひとりで生まれ一人死ぬ
一本の木になり初夏の陽を浴びる

約束を果たした今日の背の軽さ
職安の椅子には丸い背が並び
背の孫に鳩見に行こう独り言
白々しい拍手を背なに会社退き

志華子 綾子 叡子 真砂 絹子 さと美 良江 久峰 東雲 正坊 希久子 光子 兼治郎 正雄 恭昌

嫁に背な流してもらう山の宿
時流れ背中合せの日が沈む
追わないと決めてから背な丸くなる
母さんの眼は背中にもあるらしい

踏切の真ん中辺で出た結論
踏切に立てば子の手を思い出す
遮断機をこじあけて来た人と添い
輪の中の一人をゆるす向い風

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

千歩 英一 登志子 楓楽 佳秋 春子 ひろ子 鬼遊

負けた日はバックに入れる野球帽
夕暮れに帽子並んでうな垂れる
手に取ればガラガラと鳴る母の骨
夢がまだ醒めぬ女に骨がある

小骨ばかりが刺さる六月 喉仏
マジックの種伏せてある肋骨
骨のない会議で決がまだたれず
大学を出ても手ごろな職がない

吃水線手ごろなところでする妥協
その時は手ごろな家も今 重荷
一生を手ごろな嘘であやつられ
道草はお好み焼にしばらく

豆絞りに振つた三社祭
問題をしほと結局 金の額
知恵絞りに替り政府船出する
骨太の女が増えて世は平和

青筋を立てて男が負けている
胸ボタンかけ違えての黙秘権

武庫坊 薫 つえ子 明光 森子 路児 紫香 きく子 ただし 慶一 福史 英子 登代子 圭坊 一笛 吉太郎 知香子

— 100 —

秀才の膳をのぞけばパン二つ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

悟郎

人生の終着駅へゆつくりと
 この駅で旗を振り出て今無人
 駅弁をゆつくり解く禁煙車
 掃除夫も兼ねて駅長ただ一人
 春風が吹いて野山は笑い出し
 道ならぬ恋の火を消す春の雨
 首輪ない犬も一緒に雨やどり
 結局は濡れて帰った雨やどり
 肩よせて小さな軒に雨宿り
 俄雨シナリオに無き雨宿り
 振袖をもちあげている雨宿り
 神からのお告げこころで雨宿り
 つかのまをきれいな人と雨宿り

川柳クラブわたの花 片上 英一報

ハイキングの道をそれてく二人連れ
 アップルパイのりんご哀しいひとり道
 表札を見るたのしみの回り道
 道路鏡写して年の顔になり
 車椅子親子につらい坂の道
 赴任する航路を祈る母一人
 みどりの道六道の蝶舞い迷う
 この道は二人来た道もつけない
 つい枝をいじりたくなる散歩道
 日記帳に苦い人生封じ込め
 人生もあの世も金が物を言い

香 住
 留 吉
 曉 子
 シマ 子
 千枝 子
 清 芳
 光 子
 田実 子
 能 子
 あずき
 豊 子
 欣史 子
 弘 直

君 江
 春 子
 しのぶ
 明 子
 トシエ
 道 子
 初 子
 幸 枝
 千枝 子
 曉 子
 シマ 子

人生の実り友人たんともち
 人生は楽より苦勞多きもの
 人生は七色でとぶシャボン玉
 人生の随所に鬼が待ち伏せし
 人生の門出あざやかはむらたつ
 やり直し誓って独り旅に立つ
 初恋は金魚みたいなひとだった
 平民と戸籍に残る吾がルーツ
 籍はいり覚悟新たに欲を出し
 三文判押して夫婦になる戸籍
 競り合った椅子は孤独の味がする
 発火点上げライバルと競いあう
 政治家の道に転がる黒い金

サークル檸檬 小林 一夫報

風船と魂だけは赤がよい
 風船に私の息が生きている
 舞いあがる風船気付かない殺意
 わたくしを騙す いつとき楽になる
 善人の仮面 今更外せない
 口だけで愛してよるはないだろう
 灰皿の煙草くすぶりと子の闇
 筆順の違ふ父と母と子と
 真剣にジャンケンボンもしなくなり
 くすの木の下で安心して泣ける
 ナタデココつるつる天皇制居座る
 てにをはが狂うねぎらい受けてから
 蜘蛛ゆらり時空を越えたところで生き
 人嫌いな笛を一管持つている

ますみ
 雅 恵
 花 子
 剛 治
 弘 直
 友 甫
 英 一
 龍
 泰 成
 隆
 一 風
 美津留
 鬼 遊

智 子
 あずき
 楓 楽
 薫
 みつ子
 希久子
 一 夫
 雅 子
 房 子
 千 代
 喜美子
 智恵子
 喜 風
 薫 風

第12回 夜市川柳大会

とき 7月31日(日) 午前10時開場

ところ 堺市総合福祉会館 大研修室

兼題と選者(各題2句)

「飲む」 村田たか子 選

「元氣」 奥山晴生 選

「巡る」 田中輝子 選

「谷」 板野美子 選

「すつきり」 小池しげお 選

「群れ」 福井桂香 選

「人並み」 小島蘭幸 選

「目」 鈴木公弘 選

「忘れる」 河内天笑 選

「式」 新家完司 選

*席題なし・出句締切正午

呈賞 天地人と佳作に呈賞

会費 2000円(昼食・記念品・作品集とも)

懇親宴 午後4時半から河内天笑宅 会費5000円(20名まで)

主催 堺川柳会

本社 六月句会

六月六日(月)午後五時半

メンズファッションセンター

六が並んだ記念すべき日(平成六年六月六日)の本社句会とは、一〇一名の出席で開会。受付で本間満津子さんの句集『銀髪』が全員に進呈された。中途失明というハンディキヤップを背負つての上梓に、惜しまぬ賛辞が贈られる。令息のお嫁さんの真知子さんに付添われ、川柳塔社からの花束、常任理事会からのお祝いを受けた姿は、よりいっそう輝いて見えた。

「おはなし」は河内天笑氏。氏の主宰する堺川柳会の事業として、毎月募集している夜市川柳の紹介があらためてされる。会場の約四分の一が、その前身である大萬川柳を知らないとのこと、時代の流れに感じ入った。

夜市川柳は、課題吟の入選点を競い合うわけだが、投句の清記を通じて自らも勉強するという真摯な態度に考えさせられるものがあった。選者によって句のストライクゾーンが異なるので、没をおそれず、自分の句を作り

続けてほしいとの希望が述べられた。当社相談役、東野大八氏の『没法子北京』や今後の大会の紹介があつて披露に入る。

初出席は寺田甚一氏(岸和田市) 月間賞は宮崎シマ子さん(八尾市)に輝く。

(司会)東雲(受付)いわゑ・千歩(記名)ダン吉・月子(清記)楓楽

席題「ルーズ」 大 路 美 幸 選

年ごとにルーズになった母想う

ルーズだが手紙はキツチリ書いてくる

いつもルーズな机を一つ持っている

ルーズなのが居るから空気軽くなる

割勘のたびにルーズになる男

尻に火がついてルーズにしておれず

金銭にはルーズ人情には脆い

ルーズだと言わせぬ父さんのいびき

几帳面ルーズと妙に馬が合う

いつまでも弟ルーズで得をする

ルーズだと人に言われてから悩みな

んとやねルーズな男よくもてる

そのときはその時ルーズさに慣れる

経理課にルーズな奴が一人居る

度の過ぎたルーズねずみを捕らぬ猫

植物園ルーズな薔薇に棘がない

少しだけルーズな妻で居てほしい

ロボットがルーズな僕の尻叩く

私のルーズに嫁が居てくれる

少しルーズに今日をたのしむつむじ風

政治家のルーズを攻める雨蛙

つっぱりの靴はルーズと決めている

外見はルーズ内面几帳面

お互いがルーズ仲良くきた夫婦

お互いにルーズで気持通じ合い

暑いでルーズな服を着てしまふ

青空にルーズな帽子とんでゆく

坊ちゃんのルーズな妻の夜の蝶

真夏日にルーズな妻の生返事

ルーズさは親ゆすりだと気にしない

ルーズな子 誰に似たかと内輪もめ

門限がルーズになった恋だろか

ルーズさを口八丁でごまかされ

男です少しルーズに構えとく

もっ少しルーズであれば好きになる

少しルーズ少し可愛いうちの嫁

人生をルーズに八十路ベレー帽

ルーズさを叩かれ丸くなった石

前向いて履くからルーズな靴を選ぶ

兼題「親戚」 門谷 たず子 選

遠方の親戚よりもうちの犬

親戚に大久保彦左が一人居る

頂留子 たもつ 甚一 英子 透太 美代子 美幸 高栄

正子 高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

萬美代子 公一 楓正 武庫坊 柳伸 いわる 美ツ千 文時 和子 みつ子 蟹 美幸 太茂津 房子 紫香 ルイ子 哲子 絹子 岳人 澄子 一風 千秀 正坊 武庫坊 花梢 菁風

洋 いわゐ 庸 佐 狸 村 美代子 (劇) 森 子 隆 花 梢 楓 楽 たず子 来選 螢 勝 美 落 児 花 梢 落 児 洞 庵 頂 留 子 たず子 一 風 一 風 弘 直 武 庫 坊

文時 澄子 志洋 保州 しば 大茂津 隆 一風 正坊 千秀 楓樂 勝晴 ルイ子 公一 茜 利武 英子 雅文 弘直 志洋 萬的 太茂津 一閑 一閑

ボクの妻 美人で賢く愛想よし 哲夫

天

ぬけぬけと言うが親身になっている (園澄子)

軸

ぬけぬけと『美人募集』に応募する 吐来

兼題「苦しい」 吉岡美房選

父の墓 苦しい歴史理めてある 勇太

苦しみが日に日に募る片想い 稚代

苦しんでいるのはあなたただけでない 保州

苦しみにじっと耐えている泣きばくろ 志洋

愛別離苦うなで耐えているおんな 朱夏

街路樹が苦しくなつて葉を揺する 和子

霊柩車見ると苦しくなる乳房 岳人

苦しみに堪えろ堪えろと蛙鳴く いわゑ

苦しいと言え男は負けになる 花梢

苦しまず逝くことだけを考える 三男

梅雨冷えへ少し苦しい世辞を言う 萬的

苦節十年 見事に打つた句読点 隆

苦しいといえは助けてくれますか 透太

口に出す苦しきならば耐えられる 友照

心電図いのちの主張描いている たもつ

ライバルも苦しんでいる息遣い 薫

薬一本つかむ苦し神頼み 千秀

苦しさを乗り越えて来た芋の蔓 豊太

苦しみを混ぜ合いながら夫婦箸 公一

苦しさが表に出ない肥満体 しげお、

苦しさにふれぬ男の思いやり 雅文

相聞歌 苦しいこともありましたが 園美代子

頼杖にずしり苦しみ乗せている 吸江

言い勝つた方が苦しい夜になる 楓楽

拷問のようにごちそう責めにあつ 朱夏

背伸びして苦しきじわりわり来る 庸佑

香水に挟まれては満員車 かすみ

苦しんでやがて豊かになる森よ 森子

苦しんで薬一本がはなせない 稚代

苦しみを越えろと風が読めてくる 楓楽

網の目に絞られてゆく雑魚のかお 薫

お月さま恋は苦しいものですね 正子

苦しかった戦中戦後笑えるか 笛生

頼むには神も仏も多すぎる 一閑

風下に苦しい嘘が寄ってくる 章久

再起する決意 苦しい橋渡る 太茂津

保釈金さほど苦しい顔をせず 鬼遊

苦しさが溶けて女の海が風ぐ 寿子

酸欠の金魚の如く満員車 美房

兼題「四角」 玉置重人選

四角張つた鬼が鬼門の戸を叩く さち子

四角から飛び出す事を考える 美ツ千

性善説 君は四角いままが良い 緑良

風薫る四角の窓をみな開く 螢

四角四面に言うから愛が迷い出す 花梢

ふろふきの大根 四角に切るおしゃれ 絹子

鬱の目の縁は四角で弾まない 勇太

四角はるころをばくす和がまるい 狸村

真四角を花で飾れば丸い部屋 シマ子

真四角を花で飾れば丸い部屋 美房

愛の言葉は四角四面におさまらぬ 武庫坊

芯のない愚痴ばかりきく冷やっこ 鬼遊

ビル谷間 四角い空に星がない 絹子

四角四面の影が生涯付きまとう 鹿太

四角にも丸にも変わる愛は謎 (園澄子)

四角張る背広ヘジョーク通じない 千秀

真四角に育て暴走する息子 豊太

四角四面な息子に夫の血を少し 英子

ナツメロを四角四面に唱う老父 保州

天窓の四角い宇宙からロマン かすみ

頭打つても四角な殻から抜け出せぬ みつ子

指名手配の四角い顔に似る家系 哲子

丸四角三角画いた孫画いた 正雄

賽銭箱 欲な願いを聞きあきる 千歩

風も陽もゴツンと当るツインビル (園美代子)

四角にも丸にも添える水になる 庸佑

額ぶちら四角四面の亡父が居る 稚代

四角から丸い眼鏡になる余生 洋

母さんが四角になつてきた恐さ ダン吉

升酒の塩に勝利を噛みしめる 一風

寅さんの似顔絵がある尋ね人 正坊

四角にも丸にもなつて母の水 たす子

四角いこと言わずにおこう赤い靴
丸い石 四角い過去は語らない
負けそうになると四角いものを言う
円になろうと真四角はいつでも思う
四コマのマンガが落ちてゐるロビー
人
真四角まだ愛されることがない
地
三角四角 恋はだんだら血の匂
天
酸欠の街で四角になる思想
軸
税務署を出ると四角い顔ほどく
兼題「使う」 橋高薫風選
使ひ捨てなんと淋しい一言よ
姑にもつ使ひこなせぬワントッチ
太郎冠者パフォーマンスの使い分け
たった一人使つて社長きどりなり
使つ身も使われる身も耐えている
会社人間 戦死するまで使われる
使ひ捨てそれも流行かも知れぬ
生きたとは猫も鳴き声使ひ分け
如才ないママでお客が使われる
使ひ慣れたよき雑巾の一つにも
使ひこんだフライパンにも妻の自負
愛なれば使ひ切つてるテレカード
心おきなく使えと金をさりげなく
使ひ捨てカメラばかりで写される
弥生 たもつ 森子 金太 女 岳人 薫 楓楽 重人 花梢 隆 保州 子 射月芳 柳伸 智子 歌子 和子

使ひ手の気合いがこもる津軽三味
外国へ円を使ひに行つてくる
旧仮名を使ひたくなるモンブラン
儉約など教えず聞かず使ひ捨て
当りくじ額集めてどう使つ
二枚舌 盾と矛とに使ひわけ
喜んで使われていた亡母だった
魔法使つてこの虚しさに灯をともし
人使ひ上手い男の枯れた背な
でき過ぎる部下を使つて疲れてる
使つて下さる有難さ五時に起き
左ぎつちよが使つたという推理
使途不明で帳尻が合うお偉方
使ひこなしした竿一本が川下る
真刀を使つと芸に幅が出る
空虚感 氷枕を使つべし
同じ手を何度使つか見ていよう
持ち駒を使ひ果した三次会
佳
使つても元へかえさぬ息子たち
使ひ捨てカメラに写る胸の奥
媚びるのに使つ口紅別に持つ
火の性を隠し女は火を使つ
天使かも知れぬ指輪をしていない
人
包丁は使ひ手の腕知つてゐる
地
母になり亡母の使つたおまじない
天
狸村 笛生 楓楽 (安美代子) 愛論 頂留子 公一 みつ子 吐来 甚一 千歩 豊太 たもつ 二南 岳人 美ツ千 透太 月子 さち子 佳秋 (安美代子) しげお 洞庵 かすみ

いつまでも母を使つてまだ嫁かず
使われて使われて盲導犬やさし
軸
シマ子 薫風

番傘川柳本社水府忌句会

とき 8月6日(土) 午後6時

ところ チサンホテル 新大阪
(地下鉄御堂筋線西中島南方下車 北へ7分)

お話 「水府師と私」 田口 一香氏

宿題と選者(各題2句)

「土」	杉森節子選
「友だち」	梶川雄次郎選
「ずばり」	岩井三窓選
「昨日」	河内天笑選
「線」	磯野いさむ選

席題(1題) 午後7時締切

会費 500円

番傘川柳本社

▼訂正 6月号『各地柳壇(尼崎尾浜川柳会)の「教会に好きな娘が来る日曜日」の作者は「薫」ではない旨、同川柳会から訂正の連絡がありました。

■句集紹介

本間満津子『銀髪』

神夏磯 典子

私と満津子さんとの出会いは、故川口弘生先生のお誘いで城北川柳会に初出席した二十年前の雨の日でした。人柄に惹かれ、遅い時は深夜まで川柳を語り合ったものです。

銀髪になったら着たい色があり

路郎賞準優秀作第一席にこの句が輝いた頃から、句集への夢が芽生えていました。

表紙は絶対「紫」、題字は「銀色」、私も大賛成でした。この度ご長男のお嫁さんである眞知子さんの献身的協力により、二年がかりで句集が完成しました。

こんな姑を頼りと嫁が言うてくれ
姑が母 嫁が娘になる歳月

何もかも話せる嫁が居る果報
話好きの嫁にいつでも救われる

思いは一つ嫁と検診受けに行く

はた目にも羨ましい関係のお二人です。
私が十年前、大手術した時は、心から励ま

して下さり、下着まで洗わせてと言って洗って頂きました。

友手術の日にちにち掃除をして居たり

病む人へ千の祈りの千羽鶴

満津子さんは政治にとっても深い関心をお持ちで、私が無関心なため、時々叱られます。

聞かせたい人は聞く耳持っていない

消費税に協力小銭入れ持って

この嵐乗り切れ愛する日本丸

また出来た怠け人間製造機

お茶好きで初めて訪ねた日に入れて下さったお茶の味は忘れられません。

ポットの湯いっぱいにして友を待つ

お茶一服飲めばなんでもない話

御家族の愛に包まれて ますますのお幸せ

を願って筆をおきます。

松本 ただし

本間満津子さんの初の句集の上梓おめでとうございます。「思い」に始まり、「四季」まで七項目に分け、六〇三句の柳歴二十数年に

及ぶ身の周りの日常、試練、家族、仲間と世間の風を幅広くひたむきに鋭い感覚で捉え、

誰にも解る言葉で織りなす縦糸横糸の十七文字は、黄八丈の華やかさよりも、控え目な気

品のある細を彷彿とさせる金字塔である。全編を通して下五の引き締め方は、余人の及ばない仕立ての妙に、敬服を禁じ得ない。

人生の喜怒哀楽を淡々と詠む中「黒い画布」の項で感覚の現実と胸がキュッと締まり、立ち立まってしまった。

本社句会においては、毎回満津子さんは中央の列の前から二、三番目に席を占め、披露が始まると背筋を伸ばし、小首を少し傾けたポーズは変わったことがない。落ち着いたはつきりした「マツコ」の呼名は、数多い呼名の中でも目立つさわやかそのものである。

流行におもねらず、奇を衒うことなく、独自の感性のほとばしる句を貴重なものと受けとめ、心にとまった句の一部を抜粋させていただきます。

半分ずつ寄せて幸せ一つ出来

後味が逃げそつなので喋らない

手袋をぬいで握手をもう一度

送られて帰りの道は近かった

食べ残し一切れもない皿洗う

打ち掛けの刺繍切ない指でみる

母の顔 私が彫った皺もある

夢見たとだけを長距離電話する

真実のつめたさ嘘のあたたかさ
持てるだけ持って大事なものの落し



古川覚然坊氏を悼む

宮崎 シマ子

覚然坊さん、とうとう逝ってしまわれたのです。いつものように病院へお見舞に行ったのですが、いらっしやらないので事務所まで聞いたところ、四月二十日に亡くなられ、娘さんが連れて帰られたと……。

逢いたくて訪ねて見れば幼友の計よ

この句を作られた時は、さぞ寂しかったでしょう。私もあの日は悲しく淋しくて、トボトボと家へ帰りました。最後にお逢いしたのは四月三日でした。点滴の管やオシッコの管をつけて目ばかりギョロギョロ。「もう桜も咲いたのに、元氣を出してお花見にも行かんと」と力づけましたら「オトツツアンは元氣か」「ええ、体は達者やけど、きょう白内障の手術をするんです」と言ったら、「アンタはアホか。そんな大事なときにこんなところへ来て。早よ帰れ」と、全く父親の声。「時間があるからちよっと覗きに來たのに……」と口答える私は、娘の声でした。頑固だった

けど細かい所に氣がつく優しい覚然坊さんは、私の持つて行った菓子を付添婦さんにかけてくれと氣を使っておられました。

川柳を始めたばかりの頃、何も知らない私にいろいろ教え、また、話もしてくださいました。同郷人の菊池寛のこと、小学校で習った二郎や一伊の間違つて伝えられている話、井上剣花坊さんのこと、果ては近くに住む曾孫さんの話、本も沢山見せてもらいました。俳風柳多留もその一つ。少々エッチな川柳の句報。今も心に残っているのが、佐藤岳俊さんの『縄文土偶』、あれはもう一度読んでみたいが、もつ貸してもらえませぬ。今治の句会へも、二度連れて行つてもらいました。長野文庫先生、月原宵明先生の色紙も頂きましたが、今も大切にしていますよ。

昭和五十七年一月から覚然坊と雅号も変え、やぎ髭をたくわえ、独身男性が蛆もわかず身ぎれいにしてあちこちの句会で頑張つてお

られました。そして最後まで作句し、本も読まれ、見習わなくてはと思つておりました。『短歌俳句川柳一〇一年』も、病床の枕元においてました。私は買わずに貸して貰い、そして返さなければ形見にもなったのに……と今更思つても、もつお目にかかれなないので、八尾市民川柳会での最後の句に

天国に女ばかりと言う噂

というのがありますが、今頃は天国で大勢の女性に囲まれ、楽しく句会をやつておられるでしょう。女性ばかりでなく、男性も仲間に入れてあげてください。天寿を全うされ、柳歴も六十有余年とこれも全うされました。いろいろと教えて頂いて本当に有難うございました。心安らかに眠りください。合掌

覚然坊さんの若い時の句を知らないのが残念ですが、晩年の十年の中から私の好きな句を拾ってみました。

他人の子を育てる職にいて嫁かず

老婆心また鼻先で笑われる

出稼ぎの父を迎える豆御飯

目覚しは鳴るだけ母の声で起き

雨やんで行くところがある蝸牛

集団ともなれば鳥にもある意見

枯葉ふむ足に淋しい音がする

夕焼の物みな明日へ生きる影

柳界展望

★川柳 e i の会創立5周年

記念川柳大会は5月22日、

吹田市のサニーストンホテルで1990人が参加して開かれた。秀句賞次のとおり。

喜びが重なり少し馬鹿になる
林 はつ絵

すかたんにぶっちゃける
程雨が降り 小出 智子

地鳴りして鏡が割れた卑
弥呼の死 日野 愿

火を見れば胸がどきどき
して困る 脇 正夫

夕やけに染まるはがきを
出しにいく 村田たか子

ゆつくりと明るくなつて
どつと朝 前田 咲二

★中日川柳平成5年度賞は
千成賞に太田まもる、白楊

賞に清水英和、孝三郎賞に
竹内孤雁の各氏を決定した

★川柳えんぴつ社の年度賞
は、村上健一・浜田京子・

石倉須磨・石崎外義の4氏
に決定した。

★川柳あきあじ吟社のあき
あじ賞が決定した。

職安で値切られてゆく自
尊心 三浦 強一

★川柳路吟社は平成5年度
年間賞を発表した。

握り続けたがそつとあけ
たら風 岩本 完

★川柳はつかり吟社の年度
賞は浅沼よし子さんに決定

★川柳美すゝ吟社は平成5
年度賞を発表した。一席は

責任を取らぬ味方が拍手
する 真壁 佳子

★柳都川柳社の第20回白石
朝太郎賞は宮本めぐみさん

(仙台市)に決定した。

★北見川柳社は平成第2回
オホーツク賞を発表した。

しぐれ虹忘れ上手になつ
てゆく 岡田美智子

★川柳宮城野第9回誌上川
柳大会の募集が行われてい

る。課題は「林」(2句)
参加料千円、7月5日締切

投句先は仙台市太白区日本
平35-21・川柳宮城野社。

新同人紹介

八 田

— 薫風・恭昌推薦 敏

山 口

— 薫風・智子・保州・千秀推薦 三千子

榎 原

— 薫風・天笑・保州・千秀推薦 公子

土 橋

— 薫風・紫香・諷人・螢・はるお推薦 睦子

★川柳新京都社は今年度の
誌上秀作競詠句会の作品を

募集している。課題と選者
は、「沖」芳賀弥市・瀬川

瑞紀・前田夕起子▽「雑詠」
■高瀬霜石・加藤正雄・岩

墨作二郎・樋口由紀子・森
佐タシ吉・山口新子の各氏
本夷一郎で、7月5日締切
から提出いただきました。

★第21回沼津市文芸祭の川

柳作品の公募が行われている。

未発表作品3句で応募

料は千円、7月31日締切、

送り先は〒410沼津市市場町

3-32・沼津市文化協会気

付「ぬまづ文芸」実行委。

★京都番傘川柳会創立65周

年記念川柳大会は8月28日

新・都ホテル(陽明殿)で

開く。宿題は、便り・冒険

脱ぐ・屋根・はつきり・魔

糸・いけず・サンブル(各

題2句)、うち、便り・冒

険は事前投句(7月20日締

切)、会費3000円。

★第4回「太平記の里」全

国川柳大会の開催要項が決

まった。日時は10月30日、

会場は太田市教育総合セン

ターで、会費は2000円

第1部の課題と選者は、足

仲川たけし▽太鼓▽山田

良行▽金▽渡辺蓮夫▽音頭

〓西村在我▽弾む〓山崎涼

史▽ポケット〓川俣喜猿▽

燃える〓竹本瓢太郎▽もつ

いちど〓萩原柳絮▽来る〓

清水惣七(各題2句)、第

2部(郵送参加)の課題は

「散歩」(2句)で選者は

西尾菜など10氏、合点30位

まで呈賞、参加費千円、9

月10日締切、連絡先は〒373

太田市浜町2-35・全国川

柳大会実行委員会。

令息の協力でまとめた。

■川柳句集「足跡」(川柳

噴煙吟社刊・B6判134

頁・非売品)出水今川柳会

22名の各20句を収録した合

同句集、吉岡龍城序文。

■「川柳おぼえがき」その

人間性を探る(小松原爽

介著・A6判110頁・1

000円)著者が指導して

いる西宮川柳会の会報に執

筆したコラム87編に近詠と

添削50題を付している。

■合同句集「縷」(川柳e

iの会刊・A5判106頁)

片岡つとむ序文・朝日な

にわ柳壇投句者有志で組織す

る川柳eの会5周年記念

合同句集で50名の会員の各

15句の作品750句を収録

■本間満津子句集「銀髪」

(B6判232頁・川柳塔

社刊)西尾菜序文。

■「没法子北京」(東野大

八著・蝸牛社刊・B6判2

80頁)戦傷で隻手となっ

た川柳人が敗戦後の北京を

描くドキュメンタリー。

▽お便り△

■久家代仕男氏(本社参与

平田市)「検査入院以来、

肝臓が悪いというので、退

院がおあずけでいます。当

分、腰を据えて療養に努め

る覚悟であります」

▼卦報▲

■古川寛然坊氏(同人・八

尾市)4月20日死去93歳。

■小林英子さん(京都塔の

会会員・誌友)5月28日、

腸ガンのため死去、71歳。

▼訂正▲

■5月号P81(銀河系)

下段28行目「肩書きを忘れ

られない人の飲む」↓「::

人と飲む」

■6月号P34(水煙抄)

上段10行目「野心も捨て

もつ、終点見えてきた」↓

「野心も捨てよう」▼

P56上段1行目「江坂修史」

↓「江城修史」

堀口堯人句碑募金

川柳文学社の創立者で

あり、戦後、日本川柳協

会の設立に献身的に尽力

した故堀口堯人氏の句碑

を建立することが大阪川

柳人クラブ・川柳文学社

の発起、全日本川柳協会

・番傘川柳本社・川柳塔

社・川柳天守閣・川柳瓦

版の会の協賛によって進

められている。

募金は一口20000円

(何口でも可)で、郵便

振替は00970191

318951大阪川柳人

クラブへ、現金は〒565

吹田市山田西1-15-2

の竹森舎へ。

▽出版△

■渥美秀秀句集「川柳あざ

み」(A5判24頁・自家出

版)平成元年から5年間の

作品から富士山はか60句を

第25回

奈良新聞川柳大会

とき 7月24日(日) 午前10時開場
ところ 信貴山玉蔵院富貴閣
(近鉄生駒線信貴山下駅からバス10分)

席題(1題) 芳野 村雨選
宿題「肩」 福田 秋雄選
「コラム」 石田 常念選
「炎」 鶴本 むねお選
「まんなか」 宮口 笛生選
「髪」 杉森 節子選
「宿」 石岡 正司選
「うどん」 片岡 つとむ選

会費 3000円(昼食・発表誌含む)

*欠席投句 5000円(発表誌呈)

出席申込みは、7月18日までに左記へ

〒630 奈良市三条町606

奈良新聞社文化事業部川柳係
(電話〇七四二―二六―二二三(代))

欠席投句送り先(7月18日必着)

〒630 奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

主催 奈良新聞社

後援 奈良県教育委員会

奈良県川柳連盟

第18回

茗人忌川柳大会

とき 8月28日(日)

午前9時開場 同10時半開会

ところ ホテル・ニューいなば

(鳥取市水楽温泉町403)

〇八五七―二七―八181

おはなし

阿萬 萬的氏

兼題(各題2句・席題なし)

「陰」 高杉 鬼遊選

「他人」 西出 楓楽選

「我慢」 恒松 町紅選

「洗う」 小林 由多香選

「顔」 八木 千代選

「胡座あぐら」 奥谷 弘朗選

「暗示」 土橋 螢選

締切 午前11時半

会費 3500円(作品集・懇親会含む)

昼食は各自でお願いします。

投句 投句料10000円(作品集呈)

投句のみの方は8月15日までに着くよう

うみなり川柳会宛投句してください。

うみなり川柳会

〒680 鳥取市相生町3丁目204(森田熊生方)

〇八五七―二七―八181

西宮北口川柳会20周年

黒川紫香会長米寿祝賀

記念川柳大会

とき 9月6日(火) 午後零時半開場

ところ 西宮市民会館 1階大会議室

(阪神西宮駅北へすぐ)

おはなし ふあうすと川柳社 田中好啓氏

課題と選者(各題2句)

事前投句「八」 黒川 紫香選

◎出・欠に関する投句歓迎、締切は8月

15日必着、投句先〒663 西宮市高木

東町9-4 西口いわゑ

当日出句「壺」 橘高 薫風選

「炎」 来住タカ子選

「ふたつ」 小出 智子選

「純」 和田 光代選

「島」 香川 水声選

「女」 森中恵美子選

「詩人」 西尾 栗選

会費 10000円(記念品、発表誌呈、

秀句賞)

☆大会終了後、中会議室で懇親宴開催。

会費5000円

主催 西宮北口川柳会

後援 川柳塔社

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(金)午後1時から こっそり・機会・叫ぶ・関心	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	1日(金)午後1時から 夏・立つ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 苦(にが)い・螢・約束	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午前10時20分 暑い・金魚・出張・ルール	近鉄奈良線「富雄」駅集合 〈吟行〉連絡先 (0729)99-2656 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	10日(日)午後1時から 目覚め・目安・面会	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	11日(月)午後1時から 屋上・濡れる・特別・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いゑゑ
ほたる 川 柳 同 好 会	12日(火)午後1時から 日(ひ・にち)キャンセル決める	豊中市立螢池公民館 阪急螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
南 大 阪 川 柳 会	15日(金)午後6時から 危ない・看板・逆さ・対立	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川 柳 ねやがわ	17日(日) 正 午 から 落書き・浪費・両方・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時半開場 10周年記念川柳大会	豊中市立中央公民館集会室 表紙裏参照 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都 塔 の 会	19日(火)午後1時から 宵・狂う・秘訣	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21日(木) 正 午 から 冷静・汗・脱ぐ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島鳳云児
富 柳 会	21日(木)午後1時から 鉛筆・昼・カード・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	23日(土)午後6時から 白・借る・プレーキ・牙	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日)午後1時から 避ける・スター・げんこつ・後輩	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北へ約5分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
岸 和 田 川 柳 会	24日(日)午後1時半から 似合い・縫針・寝息・納期	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地裡村

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★若い人が何か物忘れをしたとする。誰もそれを年齢と結びつけては考えない。

ところが、高齢者が物事を忘れると、必ずと言っていいほど、年齢のせいになされる。前月号のこの欄にも、

まだまだ若いと思うみつ子さんが「忘れる」ということについて書いていたが、

私はこれらのことはいささか考えすぎだと思う。

★加齢によって低下するのは、何も記憶力だけではない。体力・気力を含むすべての能力が落ちるのは私たちが日常的に体験していることである。感覚しかり、

感性しかり、知的能力に限っても、記憶力とともに理解力・判断力・推理力すべてが鈍ってくる。それでも日常生活に支障がなく、仕

事も何とかこなせるのは、劣った能力を経験によってカバーしているからではないだろうか。

★記憶力について言うと、「エビングハウスの記憶保持曲線」というのがある。

ドイツの心理学者、エビングハウスの研究によると、人間は記憶したことを二十分後には半分近く忘れ、翌日には三分の一しか覚えていないという。これは性別や年齢にはあまり関係がないらしい。とすれば、さまざまな能力の中で、記憶力だけを取り立てて問題にすることはない。むしろ、物忘れと年齢が結びつけられることによって、つい自信を失うことが物忘れを加速する大きな要因であるという研究結果もある。

★川柳塔誌本号の暑中見舞広告へのご協力、ありがとうございました。

(正)

ひとこと

句会と煙草

前月号に掲載された「煙草と呼

名」に双手を挙げて賛成する。私も実は数年前までは、ブカブカと

煙草を吹かして他人の迷惑などは

考えてもみなかったが、いざ禁煙

してみると、「煙草」は何とかな

らないものと本気で思う。

火をつけた煙草から立ち上る副

流煙とやらは、喫煙者が直接吸い

込む主流煙より有害成分が多いと

いうではないか。『勝手』と言わ

れようが、煙害発生の前科者とし

て本社句会だけでなく、各小集句

会でも「禁煙」ないしは「分煙」

の実施を強く訴えたい。

しかし、これも一方的に強行す

れば、愛煙家の反発を招き、句会

の運営に支障をきたすことにもな

りかねないので、同意と協力を得

るよう努力したいものだ。

島江 一夫

○ひと月ほど前、家で階段

をすべり尾椎骨をいやとい

うほど打った。しばらく椅

子に座るのがつらくて苦勞

した。この二月には北海道

で「ずってーん」とやり、

右手の肘をしたたかに打ち

長い間、痛かった。

○「骨折しなかったから、

まだ捨てたもんじゃない」と

負け惜しみを言ったものの

二度あることは二度ある。

この次はどうなるやら。

○そこで、これを機にもつ

と体に気をつけようと反省

なるといふβカロチン野菜

の缶ジュースは、昨年の夏

からばちばち飲んでる。

ため、だしじゃこをから炒

りし、ミキサーでこまかく

して、ご飯にでもおかずに

でもふりかける。苦手の牛

乳はスキムミルクで代用し

て飲みはじめた。

○ことのついでに、髪を黒

動物ばかりで満腹になつて

しまふぞ。暑さの砌、夕食

のときの缶ビール一本は、

絶対省けないし。(ふ)

暑中お見舞い申し上げます

富	笠	奥	松	竹	藤	川	小	辻	松	阿	黒	正
山	嶋	山	川	内	村	島	池		川	萬	川	本
ル	恵	美	芳	花	メ	諷	し	白	杜	萬	紫	水
イ	美	智	子	代	女	云	げ	溪	的	的	香	客
子	子	子	子	子	子	児	お	子				

暑中お見舞い申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

二	西	高	高	田	田	小	片	川	小	内	井	生	指	高
瓶	沢	橋	橋	中	中	出	上	崎	沢	田	上	嶋	宿	杉
道	一	明	初	花	ト	雅	英	友	泰	の	し	ます	千	鬼
子	雄	子	子	子	シ	恵	一	甫	成	龍	ぶ	み	枝	遊

驚	吉	安	山	村	粃	宮	宮	牧	松	松	平	服	奏
見	村	永	下	上	山	崎	崎	戸	木	葉	川	部	正
	一	晩	美	剛	シ	弘	き	み	実	君	幸	春	子
章	風	子	津	治	マ	直	子	子	希	江	枝		

川柳クラブ

わたの花

暑中お見舞い
申し上げます

YFC文化センター川柳セミナー

暑中お見舞い

西	浅	盛	中	岸	大	坪	人
尾	野		田	野	塚	田	見
	房	ス	悠	あ	節	紅	翠
栞	子	ズ	水	やめ	子	葉	記

暑中お見舞

申し上げます

川柳若葉の会

橘高薫風	指宿千枝子	梅田宣司	大福留吉	黒田能子	小森正晴	椎江清芳	辻川慶子	中島田実子
堀江光子	近藤豊子	宮本欣史子	宮崎弘直	宮崎シマ子	山内香住	安永暁子	吉田あずき	

暑中お見舞

申し上げます

はびきの市民川柳会

安芸田 泰子	芦田 絢子	大澤 夏秋	酒井 一壺	徳山 みつこ	西村 りつこ	福田 悦子	山本 たけし	清水 利武	塩満 敏	榎本 吐来
--------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	--------	-------	------	-------

暑中お見舞い申し上げます

兒 中 高 福 武 楠 高 赤 菊 高 川 福 中 吉 笠
島 原 田 田 部 田 木 地 津 端 元 島 岡 原
他 与 比 治 悦 敦 昭 美 和 繁 三 六 み 志 美 吸
一 呂 呂 子 子 子 子 代 子 男 郎 点 の る 洋 房 江
同 志 志

川 柳 藤 井 寺

東大阪市川柳同好会

会 長 ^{カタ}片 ^{オカ}岡 ^コ湖 ^{フウ}風

会 員 一 同

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中御見舞

サークル 檸檬

暑中お見舞い申しあげます

5月22日の10周年記念川柳大会には
過分のご支援を賜わり有難うございました

高槻川柳サークル卯の花

会 員 一 同

もくせい川柳会

三満松栴星春辻玉田田滝栗木北岡江一安黒橘
宅仲本本野城川置中中北原村山本口瀬藤川高
つきた路登武慶英正博富一悟吉明福寿紫薫
えくだし児子坊子子坊薫史子笛郎郎光一子香風

ようやく10周年を迎えました 7月18日に記念大会を開きます

盛夏お見舞申し上げます

兵庫県

川柳ささやま社 一同

代表 遠山 可住

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井 千秀

暑中お見舞い申し上げます

吉前森棕藤古中富高玉滝田嵯近黒日井木岡奥岡江上行一石稲月湯井橘
井田川山原川田永江洲置北中峨藤崎下村村田村本口田田瀬川葉原浅上高
他一竹昭紫祥桂喜美純敞桂英博蛭保洋恭万之正一幸し吉太明佳清福眞方馬直薫
同二子水司子子次子子子史柳子子子助安笛子え郎光秋史一勝郎郎洗次風

ほたる川柳同好会

毎月第2火曜日午後1時から豊中市螢池公民館にて毎回薫風先生の御指導を受けております。 申込み・お問合せは 06-841-5265井上まで

第18回茗人忌川柳大会(8月28日)

ご来会お待ちしております

うみなり川柳会

鳥取市相生町3丁目204

電話 (0857) 23-4672

暑中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会 一同

事務局 〒596 岸和田市上松町610の85

芳地狸村方

電話 (0724) 27-5029

暑中御見舞

京都塔の会

松都高松 渡山本
川倉沢川 辺田莊
杜求芳 圭葉福
的芽栄子 坊子子

暑中お見舞い申し上げます

堺川柳会

綿中神高渡福村小以竹内長
 野川原田辺田上西倉田藤谷
 春星満博夏菜みず摩耶彰
 香楓文子都州光子々き耶彰
 河河高藤寺藤小山宮桜矢荒
 内内橋井井田西本本沢倉川
 天月千万一東泰小半かりあ五磯
 笑子子二三雲子雪銭ん里月子

暑中お見舞い申し上げます

野村静雄

〒666 川西市南花屋敷四一七一三

岩津ようじ

〒562 箕面市箕面七一五一八

中野櫨子

〒588 堺市西野三二〇一二〇

瀬戸まさよ

〒565 吹田市山田西四丁目四一四二六

暑中お見舞い申し上げます

城北川柳会

喜多佐津乃	神夏磯典子	叶岡史風	柏木八重	岡田ふみ	上田柳影	上田登美子	今西静子	井上白峰	吐田公一
松本ただし	松岡久留美	町田達子	本間満津子	板東倫子	中田あい子	高橋一枝	鈴木トヨ子	鈴木政子	小糸昭子

暑中お見舞い申し上げます

翠洋会

肥塚一美	児玉真砂蛙	黒田真砂	栗谷春子	北田綾子	片上英一	奥田みつ子	岡本久峰	梅田宣司	上田佳秋	池田登志子	稲本凡子	井上照子	中西兼治郎	高杉鬼遊	橘高薫風
渡部さと美	米田恭昌	山本希久子	堀江光子	堀良江	古谷ひろ子	藤村宏子	藤井正雄	西出楓楽	中村叡子	寺井東雲	津村志華子	田中正坊	高杉千歩	清水絹子	

暑中お見舞い申し上げます
夏バテ要注意の発令です

1994年 盛夏

第15回 記念大会を11月20日(日)開催
皆様のご支援を心からお待ちしております。

◎宿題「簡単」 ◎宿題「木」

◎宿題「占う」 ◎宿題「畳」

◎宿題「劇」 ◎宿題「輝く」

◎宿題「動く」 ◎宿題「絵」

※大会詳細は別紙のお報せです。

川柳塔鹿野みか月

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原諷人方
電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞申し上げます

平成6年 盛夏

いずも川柳会

事務局 〒693 出雲市大津町大曲2097

TEL 0853-22-2179

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690 松江市雑賀町1686

恒松町紅方

電話 0852-24-5450

姫路 川柳化粧櫓の会

平成六年盛夏

暑中お見舞い申し上げます

菅原朱玉

植村客遊子

保西岳詩

大原葉香

丁坪サワ子

服部一典

中塚遊峰

丸尾はる子

福島姫女

美原嘉

本多茂章

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

主 幹 顧問
副 主 幹

坂口公子	黒瀬登紀夫	北山好笑	柿花紀美女	尾田綾子	小倉アサ	大野武太	内芝登志代	上杉信秋	岩崎瑞穂	岩倉天彦	伊賀政一	若宮武雄	牛尾緑良	野村太茂津
------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	-------

中島正博	中後清史	中井栄美子	富上光代	天満三千子	寺田裕美	辻本守	千原淳太郎	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	塩谷佐代子	坂部紀久子
------	------	-------	------	-------	------	-----	-------	-------	------	------	------	------	-------	-------

会 員 一 同	横垣忠翁	森三枝子	宮口克子	松原寿子	前田勝	堀端三男	細川稚代	福本英子	福田和子	平井照子	西口忠雄	中根勇太
---------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------

事務局 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良方

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小 島 蘭 幸 方

暑中お見舞い申し上げます

平成六年 盛夏

会 会

計 長

山 古 古 岩 藤 古 石 岡 三 森 時 岩 小
内 田 田 本 解 谷 原 本 宅 井 広 本 島
ほ 房 比 太 文 静 節 淑 清 不 菁 一 笑 蘭
か 一 呂
同 子 子 虚 晴 風 夫 子 水 朽 居 路 子 幸

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ

黒	木	門	奥	奥	上	秋	黒
田	村	谷	山	田	田	元	川
能	貴	た	美	み	佳	て	紫
子	代	ず	智	つ	秋	る	香
子	子	子	子	子			
吉	山	丸	藤	春	春	林	西
田	崎	山	村	城	城		口
笑	君	よ	メ	武	年	は	い
女	子	し	女	庫	代	つ	わ
		津		坊		絵	ゑ

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

会計監査

松川杜的

塩満敏

小出智子

小池しげお

川島諷云児

河内月子

河内天笑

奥田みつ子

榎本吐来

常任理事

板尾岳人

副理事長

西田柳宏子

副主幹

黒川紫香

理事長

橘高薫風

主幹

西尾栞

吐田公一

吉岡美房

宮園射月芳

宮口笛生

春城武庫坊

西出楓楽

辻白溪子

玉置重人

高杉鬼遊

田中正坊

阿萬萬的

野村太茂津

川柳塔社常任理事会

作品募集

初歩教室「理解」(3句) 吉岡美房担当

課題吟
(3句)
「跳ねる」
「入門」
「野」
吉岡美房選

銀河系(3句) 河内天笑選

水煙抄(10句) 黒川紫葉選

川柳塔(10句) 西尾朧選

9月号発表(7月15日締切)

「筒」「古い」「なるほど」
「なるほど」
初歩教室「探す」

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友(誌代半年分前納者)茴香の花欄は女性に限ります。

10月号
課題吟
初歩教室「探す」

路郎忌 本社7月句会

会席 兼 会 日
投 費 題 題 場 時
句 料 1 題 当日発表 各題2句以内
500円
投句料400円(80円切手5枚)同封のこと

「守る」 岩佐 薫 風
「敬う」 塩満 敏 選
「すっきり」 小出 智子 選
「定着」 片岡 冨子 選
「師」 西尾 朧 選

会場
7月7日(木)午後5時半
メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
おはなし

本社8月句会 8日(月)

兼題 「蛙」「リゾート」「にがい」
「形見」「太陽」

夜市川柳募集

第2回「朝」 小島 蘭幸選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

8月の常任理事会は8月2日火

NHK川柳作品募集

課題「下手(へた)」 橘高 薫風選
ハガキに3句 7月10日締切
投句先
〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 7月23日(土)ラジオ第1放送
午前11時5分から(予定)

西日本文字放送作品募集

課題「虹」 橘高 薫風選
ハガキに3句 7月15日締切
投句先
〒540 大阪府中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料84円)

半年分 三千八百円(送料共)

一年分 七千五百円(同)

平成六年七月一日発行

編集兼 西尾 朧

発行人 藤原 童心

印刷所 大蔵市阿倍野区三明町二一〇一六

〒545 川柳塔社

振替口座大阪813336八番

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

関大正門前店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

TEL (06) 330-0006(代)

FAX (06) 388-6102

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6886

東野 大八 著

没法子北京

題字・大野風柳 装画・石丸弥平

体裁 四六判・288頁・上製本

定価 2300円(〒 310円)

メイファーズ

没法子とは、中国語の「仕方

ない」の意味

戦場で隻手となった川柳人と
赤紙結婚の哀妻を中心に織りな
す没法子街の人間曼陀羅地獄図
著者畢生のドキュメント

◎川柳塔社でも、お取り扱いいたします

発行所

蝸牛社